

道路改良事業(一)和気寺井線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

能美市

石子町ハサバダ遺跡

2015

石 川 県 教 育 委 員 会

(公財)石川県埋蔵文化財センター

いしこまち
石子町ハサバダ遺跡

2015

石川県教育委員会
(公財)石川県埋蔵文化財センター



遺跡遠景(南から)



遺跡遠景(北東から)



例 言

- 1 本書は石子町ハサバダ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県能美市石子町地内である。
- 3 調査原因は、道路改良事業一般県道和気寺井線であり、同事業を所管する石川県土木部道路建設課(南加賀土木総合事務所)が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成23(2011)年度から平成26年度に実施した(平成25年度から公益財団法人石川県埋蔵文化財センターとなる)。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は、石川県土木部道路建設課が負担した。
- 6 現地調査は平成23年度に実施した。期間・面積・担当グループ・担当者は下記のとおりである。

期 間	平成23年10月3日～平成23年11月9日	面 積	750㎡
担当グループ	調査部特定事業調査グループ		
担当者	北川晴夫(主幹)、澤辺利明(専門員)、畑山智史(嘱託)		
- 7 出土品整理は平成25年度に実施し、公益財団法人石川県埋蔵文化財センター調査部特定事業調査グループが担当した。
- 8 報告書の原稿作成・刊行はそれぞれ平成25・26年度に実施した。原稿作成は北川晴夫(調査部特定事業調査グループ主幹)、編集は松山和彦(調査部県関係調査グループリーダー)が行った。
- 9 調査には下記の機関の協力を得た。

石川県土木部道路建設課、石川県南加賀土木総合事務所、能美市教育委員会
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T. P. (東京湾平均海面標高)による。
 - (3) 出土遺物番号は挿図と写真、観察表で対応する。

目 次

第1章 経 過	1
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘作業の経過	2
第3節 整理等作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の方法と成果	8
第1節 調査の方法	8
第2節 層 序	8
第3節 遺 構	8
第4節 遺 物	21
第4章 総 括	55
第1節 弥生時代後期から古墳時代前期	55
第2節 中 世	55

挿図目次

第1図	一般県道和気寺井線等概略図	1	第20図	出土遺物実測図3	28
第2図	調査区位置図	3	第21図	出土遺物実測図4	29
第3図	工事計画と調査区	3	第22図	出土遺物実測図5	30
第4図	石子町ハサバダ遺跡試掘位置図	4	第23図	出土遺物実測図6	31
第5図	遺跡の位置	5	第24図	出土遺物実測図7	32
第6図	周辺の遺跡	7	第25図	出土遺物実測図8	33
第7図	調査区グリッド図	11	第26図	出土遺物実測図9	34
第8図	調査区壁面土層図	11	第27図	出土遺物実測図10	35
第9図	調査区全体図	12	第28図	出土遺物実測図11	36
第10図	土層断面位置図	13	第29図	出土遺物実測図12	37
第11図	柱穴列Ⅰ	14	第30図	出土遺物実測図13	38
第12図	柱穴列Ⅱ	15	第31図	出土遺物実測図14	39
第13図	S A01・S A02	16	第32図	出土遺物実測図15	40
第14図	竪穴状遺構・土層断面図1	17	第33図	出土遺物実測図16	41
第15図	土層断面図2	18	第34図	出土遺物実測図17	42
第16図	土層断面図3	19	第35図	出土遺物実測図18	43
第17図	S X02 B 1グリッド遺物出土状況	20	第36図	出土遺物実測図19	44
第18図	出土遺物実測図1	26	第37図	出土遺物実測図20	45
第19図	出土遺物実測図2	27	第38図	出土遺物実測図21	46

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧	7	第6表	出土遺物観察表5	51
第2表	出土遺物観察表1	47	第7表	出土遺物観察表6	52
第3表	出土遺物観察表2	48	第8表	出土遺物観察表7	53
第4表	出土遺物観察表3	49	第9表	出土遺物観察表8	54
第5表	出土遺物観察表4	50	第10表	出土遺物観察表9	54

巻頭図版目次

図版1 遺跡遠景

図版2 S X01・02出土遺物

図版目次

図版 1	遺構 1	調査区北東側(俯瞰) 調査区中央(俯瞰) 調査区南西側(俯瞰)	図版 5	遺構 5	調査区南西側遺構検出状況 (南西から) S D07(西から) S D08(南東から) S X01(南から) S X02(南から) S X01(ウ)トレンチ土層断面 (南から) S X01イ区遺物出土状況(北東から) 調査区壁面土層E地点(東から)
図版 2	遺構 2	竪穴状遺構(南から) 竪穴状遺構土層断面(南から) S D01(南西から) S D01遺物出土状況(東から) S D02・S D03(南から) S D04(北から) S D05(西から) S D06土層断面(西から)	図版 6	出土遺物 1	
図版 3	遺構 3	調査区中央(北から) 柱穴列 I (南から) 柱穴列 I (P07)(南東から) 柱穴列 I (P08)土層断面(南東から) 柱穴列 II (南から) 柱穴列 II (P09)土層断面(北東から) 柱穴列 II (P10)土層断面(南東から) 調査区壁面土層C地点(南東から)	図版 7	出土遺物 2	
図版 4	遺構 4	S K03(南東から) S A01・S A02(北から) S A01(P22)土層断面(東から) S A01(P23)土層断面(東から) S A01(P22)(東から) S A02(P31)(東から) P12遺物出土状況(南から) 作業風景	図版 8	出土遺物 3	
			図版 9	出土遺物 4	
			図版10	出土遺物 5	
			図版11	出土遺物 6	
			図版12	出土遺物 7	
			図版13	出土遺物 8	
			図版14	出土遺物 9	

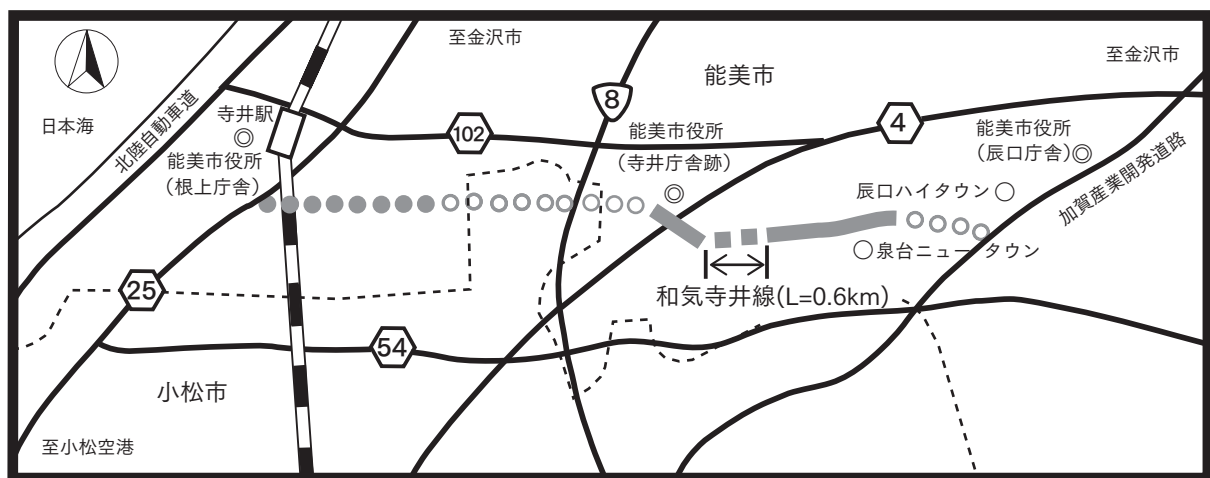
第1章 経 過

第1節 調査の経過

平成23年度の石子町ハサバタ遺跡の発掘調査は、道路改良事業一般県道和気寺井線を調査原因とし、石川県教育委員会(以下、県教育委員会)から委託を受け、財団法人石川県埋蔵文化財センター(平成25年度からは公益財団法人石川県埋蔵文化財センター 以下、県埋蔵文化財センター)が実施したものである。

一般県道和気寺井線は、能美市和気町から寺井町に至る道路で、「能美市合併まちづくり計画」では、同市の東西を結びつける道路に位置づけられ、能美郡根上町、寺井町、辰口町が合併(平成17年2月1日)して誕生した能美市の一体化を助ける重要な路線とされている。石川県は能美市湯谷町から末信町間の1.5kmについて、平成17年度より合併支援道路としてバイパス整備に着手した。この道路改良事業により、山側の泉台ニュータウンや辰口ハイタウンと寺井地区の市街地、さらに海側の工業団地を結び、同市の一体化及び、地域の活性化が図られることが期待されている。

事業に先立ち平成22年10月22日、平成23年1月19日に県教育委員会が試掘調査を実施し、新たに埋蔵文化財包蔵地「石子町ハサバタ遺跡」を確認した。道路改良事業の実施による遺跡への影響が避けられないため、平成23年3月22日付け南加土第5574号で、石川県南加賀土木総合事務所(以下、県南加賀土木総合事務所)から県教育委員会あてに文化財保護法第94条第1項に基づく発掘通知が提出された。これに対し、県教育委員会は平成23年3月23日付け教文第3450号で、県南加賀土木総合事務所に発掘調査が必要とする旨を通知し、平成23年度の発掘調査に至った。



第1図 一般県道 和気寺井線等概略図(石川県土木部ホームページより作図)

第2節 発掘作業の経過

平成23年3月31日付け南加土第5762号で、県南加賀土木総合事務所から県文化財課に発掘調査の依頼があった。調査は県埋文センターへの委託事業として実施することとなり、平成23年6月1日に委託契約を締結した。平成23年9月6日付け財理第358号で、県埋文センターは文化財保護法第92条に基づく発掘届を県教育委員会に提出し、平成23年10月3日から11月9日にかけて現地調査を実施した。

平成23年9月5日に、県南加賀土木総合事務所、県文化財課、県埋文センターの三者で現地打ち合わせを実施し、調査区の範囲、排土置き場、駐車場の場所などについて協議を行った。10月4日にハウスの建て上げ、借り上げ機材の搬入を行い、翌5日から重機による表土除去作業を開始した。12日から遺構の検出・掘削を実施したが、昭和51年に行われたほ場整備事業に係るパイプラインの敷設工事による影響(攪乱)がみられた。27日にはラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。10月31日に借り上げ機材の返却、11月4日にハウスの撤去、8日に埋戻し作業を行った。9日には現地にて県南加賀土木総合事務所、県文化財課、県埋文センターで調査状況などを確認し、現地引き渡しを行い、現地作業を完了した。なお、調査体制は以下の表のとおりである。

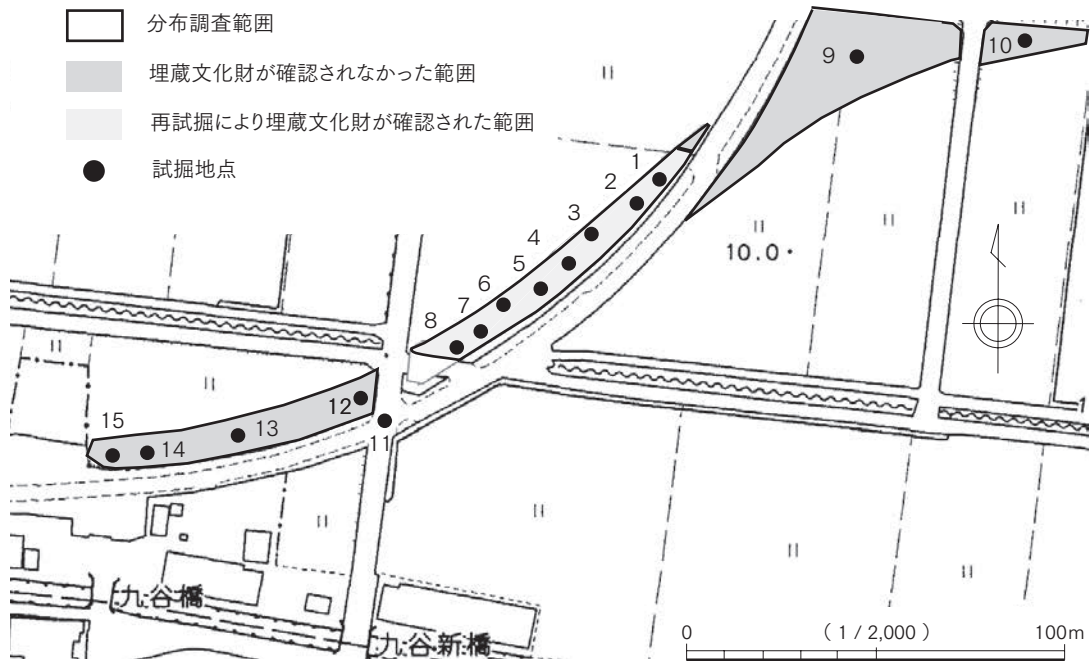
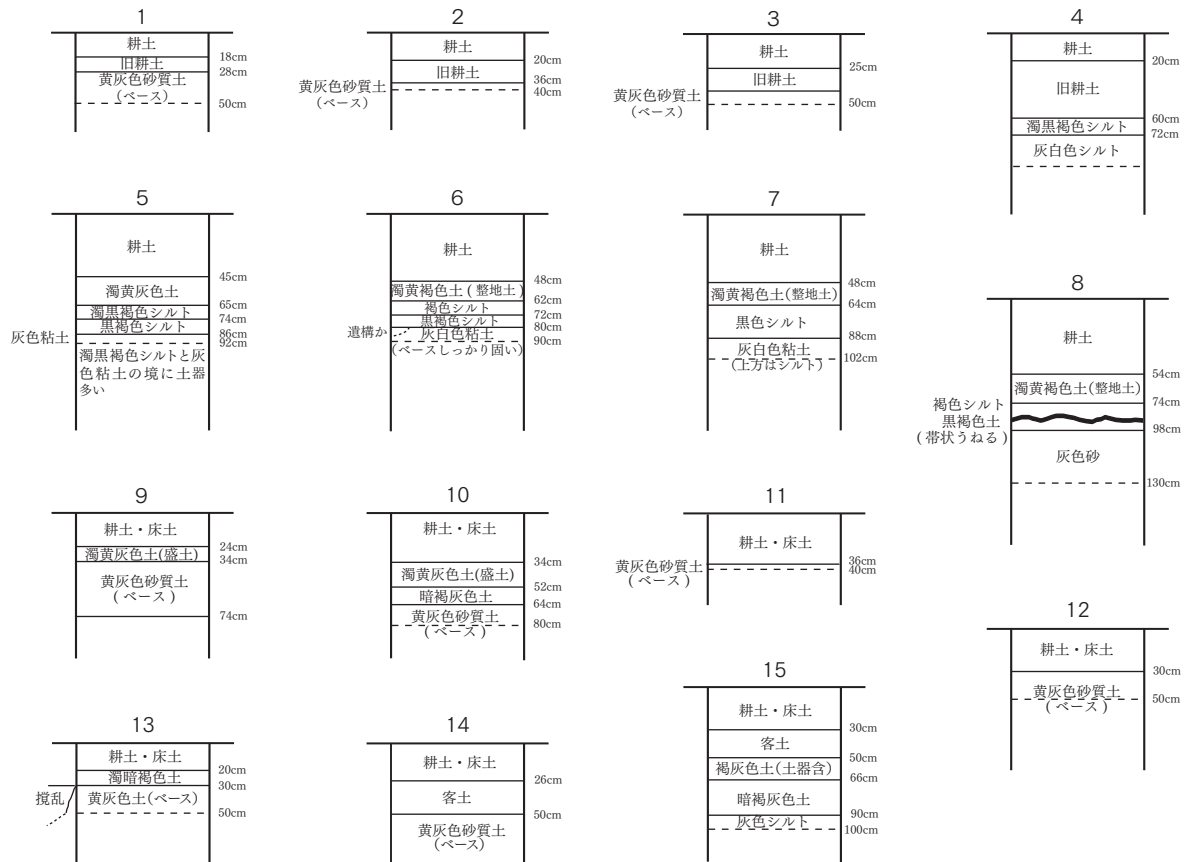
第3節 整理等作業の経過

出土品整理は県教育委員会から県埋文センターへの委託事業として実施した。平成25年度は遺物の記名・分類・接合、遺物の実測・トレース、遺構図のトレース、遺物の写真撮影及び報告書原稿の作成、平成26年度は報告書の編集・刊行を行った。なお、整理等作業の体制は以下の表のとおりである。

調査・整理体制

調査・整理年度	平成23年度	平成25年度	平成26年度
現地調査期間	平成23年10月3日～11月9日		
出土品整理期間		平成25年10月4日～11月29日	
調査・整理主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長 竹中博康)	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下公司)	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下公司)
総括	浜崎 洋(専務理事)	橋本定則(専務理事)	小崎隆司(専務理事)
事務	栗山正文(事務局長)	栗山正文(事務局長)	栗山正文(事務局長)
総務	浅香繁春(総務GL)	山口 登(総務GL)	山口 登(総務GL)
調査・整理	三浦純夫(所長) 福島正実(調査部長) 浜崎悟司(特定事業調査GL)	福島正実(所長) 藤田邦雄(調査部長) 土屋宣雄(特定事業調査GL)	福島正実(所長) 藤田邦雄(調査部長) 松山和彦(県関係調査GL)

第3節 整理等作業の経過



1~8:平成23年1月 再試掘地点 9~15:平成22年10月 試掘地点

第4図 石子町ハサバダ遺跡試掘位置図(S= 1 / 2,000)、柱状図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

石子町ハサバタ遺跡は、石川県能美市石子町地内に所在する。能美市は石川県南部、加賀地方のほぼ中央に位置し、平成17(2005)年2月1日に能美郡の根上町・寺井町・辰口町の3町の合併により誕生した。面積は83.85km²、人口は49,831人(平成26年12月1日現在)である。

市域を概観すると、北部は白山(標高2,702m)に源を発する県下最大河川の手取川が西流し、この川により能美郡川北町とは概ね画されている。東部は白山山系に連なる能美丘陵と呼ばれるなだらかな丘陵地が広がり、白山市と接する。南部は小松市と接し、梯川支流の鍋谷川の一部を小松市との境とする。西部は小松砂丘と呼ばれる海岸砂丘が形成され、日本海に面する。また、能美丘陵と海岸砂丘に挟まれた市域はほとんどが手取川扇状地上の平坦地であり、中央部には海に浮かぶ群島のように寺井山・和田山・末寺山・秋常山・西山の標高30~40mの5つの独立丘陵が点在し、南西部には砂丘背後の後背湿地がみられる。



第5図 遺跡の位置

遺跡のある石子町は、古墳群として全国的にも著名な和田山と能美丘陵の間に開けた手取川扇状地上の平坦部に立地する。標高約11mの位置に立地し、周囲より微かに小高く、1896(明治29)年の手取川出水時にも浮城のようになり、浸水被害から免れたと記録にある。

周辺を流れる得橋用水や大門用水(和田川)には、近年までフナやコイ、ナマズなどの川魚が豊富に生息し、灌漑排水や生活用水の利用だけでなく、重要な蛋白源を得る場でもあった。近年は都市化傾向の中にあるが、市街化区域から離れているため、現在も農村の面影を保っている。

「石子」の名は、確認した資料では、江戸時代の慶長10(1605)から寛永13(1636)年に写されたとされる「加賀国絵図」(古写図)に初めて登場する。「石子」の由来は、石清水八幡宮の神領であったとか、和田山や和田川がかつては石山、石川と呼称されていたことと関連するようだが、具体的には明らかではない。周辺に縄文時代晩期から中世に至る遺跡が確認されており、集落の営みは、文献資料に記載されるよりも遡る。

「ハサバタ」の名も同様に不明であるが、穀物や野菜を刈り取り後に束ねて天日に干せるように木材や竹などで柱を組んだものを「稲木(いなぎ)」と呼び、地方によっては「稲架(ハサ)」ともいわれる。金沢市北部のある地区では、かつて「稲架(ハサ)」を設けた田のことを「ハサバ」と呼んでおり、遺跡周辺でも、かつて「稲架(ハサ)」を設けた田がみられたことが、「ハサバタ」の名称の由来になったと考えられる。

第2節 歴史的環境

能美市は、旧石器時代から近世に至るまで連綿と数多くの遺跡が営まれ、特に旧寺井町から旧辰口町にかけての手取川左岸は遺跡密集地帯である。以下、本遺跡周辺に所在する遺跡を中心に概観する。

能美市で最も古い人類の痕跡は、第6図から外れるが、灯台笹集落背後の台地上で発見された灯台笹遺跡であり、昭和44(1979)年に県内で初めて旧石器時代の遺跡調査が実施された。

能美丘陵とその周辺は、旧石器時代以降も好適な生活環境であったと考えられ、縄文時代の遺物が出土した遺跡が点在する。石子町周辺には、中期の土器片数点が確認された佐野B遺跡(29)、後・晩期の土器がまとまって出土した牛島ウハシ遺跡(27)、同じくわずかに出土した和田山下遺跡(14)などがある。

稲作が始まった弥生時代は、能美市では前・中期まで遡る遺跡は少ないが、牛島ウハシ遺跡からは前期の特徴を有する土器がまとまって出土した。また牛島ウハシ遺跡や和田山下遺跡などからは中期の土器片が報告されている。後期は、遺跡数が飛躍的に増加し、和田山など独立丘陵上や大長野A遺跡(21)や佐野A遺跡(31)など鍋谷川流域の平地上を中心に分布している。その背景には、鉄器の普及による農業技術の向上によって、食料の安定的供給が進み、それを反映した集落の拡大・分村があると考えられる。

古墳群としては、本遺跡北方に点在する低丘陵に築かれた「能美古墳群」が著名である。弥生時代終末期における西山古墳群(6)中の共同墓地的な土壙墓群の段階から寺井山6号墓(15)など有力者の墳墓を経て、前期初頭に和田山14・9号墳(13)などの古墳が登場する。両者とも方墳で和田山9号墳は一辺約24m、また同14号墳(1辺16m程度)の周溝からは特殊な壺形土器が出土している。

やがて能美古墳群の築造は本格化し、前期前半に末寺山5号墳・6号墳(ともに前方後方墳)(11)、さらに中期初頭には加賀地方最大の前方後円墳である秋常山1号墳(全長約140m)(8)が威容を誇る。中期後葉にも和田山5号墳(前方後円墳、全長約55m)や秋常山2号墳(方墳、27×32.5m)が築造され、後者は円筒埴輪、朝顔形埴輪など能美古墳群で唯一埴輪を採用した例として知られる。続く中期末葉から後期前半にかけて円墳の盛行期を迎え、能美古墳群の半数以上がこの時期に属する。和田山6号墳(円墳、直径約25m)では切石積横穴式石室の導入がみられる。終息期にあたる6世紀後半以降には、再び主な舞台を西山に移し西山8号墳・9号墳などが築造される。

奈良・平安時代の遺跡は、本遺跡の周囲半径約3km内に多く確認されている。徳久・荒屋遺跡(4)、第6図から外れるが下開発遺跡は発掘調査の成果などから、東大寺文書に「江沼郡幡生村、四至東比楽河、南岡、西床滑山道並神力良家、北十五条与十六条堺畦、地五十町五段六十四歩」とみえる東大寺領幡生庄域に比定されるとの見方が有力である。小長野C遺跡(20)から多数の墨書土器が出土し、なかでも「野美」の文字が記された墨書土器が出土したことから、能美郡家の所在地を探る有力な手がかりが得られたといえる。第6図から外れるが、能美丘陵には須恵器の窯跡が多く分布し、国指定史跡末松廃寺跡(野々市市)で用いた瓦を生産したことで知られる湯屋窯跡などがある。

12世紀以降、集落の確認例が増加している。当該期の遺跡としては、本遺跡の近くに位置する石子遺跡(10)があげられ、珠洲焼、青磁などが出土している。その他に高堂遺跡(17)、河田館遺跡(33)、上八里中世墓(38)などが確認されている。



第6図 周辺の遺跡(S = 1/25,000)

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	石子町ハサバダ遺跡	弥生・古墳・中世	17	高堂遺跡	弥生・古墳・古代・中世	32	下地割遺跡	不詳
2	湯谷遺跡	古墳	18	小長野遺跡	不詳	33	河田館遺跡	縄文・古代・中世
3	高座遺跡	縄文・古墳・中世	19	小長野B遺跡	弥生	34	河田向山下遺跡	縄文・古代
4	徳久・荒屋遺跡	縄文・弥生・古墳・古代・中世	20	小長野C遺跡	古代	35	向山古墳群	古墳
5	徳久山上郷館遺跡	不詳	21	大長野A遺跡	弥生	36	上八里A遺跡	縄文
6	西山古墳群	弥生・古墳	22	大長野B遺跡	古代	37	上八里2号窯跡	不詳
7	西山横穴群	古墳	23	牛島宮の島遺跡	古代	38	上八里中世墓跡	中世
8	秋常山古墳群	古墳	24	千代テジロA遺跡	弥生・古墳・中世	39	八里向山H遺跡	中世
9	秋常遺跡	古代	25	千代テジロB遺跡	弥生・古墳・古代	40	八里向山F遺跡	縄文・古墳・中世
10	石子遺跡	中世	26	千代テジロC遺跡	古墳・古代	41	八里向山B遺跡	旧石器・縄文・古代
11	末寺山古墳群	古墳	27	牛島ウハシ遺跡	縄文・弥生・古墳・古代・中世	42	八里向山C遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代
12	末寺山下遺跡	古代	28	扶野神社前遺跡	古代	43	八里向山D遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代
13	和田山古墳群	古墳	29	佐野B遺跡	弥生・古墳・古代	44	八里向山J遺跡	古墳
14	和田山下遺跡	縄文・弥生・古墳・古代・中世	30	佐野八反田遺跡	古代	45	八里向山A遺跡	縄文・弥生
15	寺井山古墳群	古墳	31	佐野A遺跡	弥生・古墳・古代	46	八里向山G遺跡	弥生・古代
16	高堂四方堂遺跡	弥生	-			-		

第1表 周辺の遺跡一覧

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査区は、長さ約105m、最大幅約10m、面積750㎡のやや湾曲した細長い形状を呈する。調査区の区割りは公共座標を基準に10m格子のグリッドを設けて、南北軸を南から北方向にA～Hのアルファベット、東西軸を西から東方向に1～8のアラビア数字を振り、これを組み合わせて表した(第7図)。調査区の東から南側はコンクリート製のU字溝が敷設されていたことから、調査区の北側から南西側の壁面で土層を確認し、調査を進めた。遺物は土坑(S K)、小穴(P)、溝(S D)、性格不明遺構(S X)の遺構の種類別に番号を付して取り上げた。性格不明遺構(S X)に関して、基本的には、土層断面を確認するために設けた5箇所のトレンチを境として小区画(S X01ア～エ・S X02ア～エ)を設定し、区画ごとに取り上げた。

第2節 層 序

a～eの5地点で、基本的な土層の確認を行った(第8図)。1層は厚さ約20～30cmの褐色の盛土で、黄褐色シルトが混じる。2層は黄褐色の耕作土であり、d・e地点では最上位に位置し、a・b・c地点では1層の下位層となる。2層は鉄分の有無により土層は細分化され、鉄分を含む層は整地土の可能性もある。3層は暗オリーブ褐色粘質土で、古い時期の耕作土か。5層は暗褐色粘質土で、中世の包含層と考える。5層の下には黄褐色砂質土の6層が堆積する。8層は黒褐色粘質土で、S X01・S X02の覆土である。その下層には、黄褐色シルトが多く混じる12層の暗褐色粘質土、13層・14層の暗褐色砂質土がみられ、後2者はS X01・S X02の覆土である。5層、6層、12層の下層は黄褐色シルトの地山土で遺構検出面となる。調査区北東端からS X01(c地点)以東は、遺構検出面(地山)は地表下約70～100cmを測り、それ以西は北東から南西方向に向かって緩やかに下がっていく。

第3節 遺 構

調査区の概ね北東側では中世の柱穴、柵、竪穴状遺構、土坑、小穴、溝、南西側では弥生時代後期から古墳時代前期の土坑、小穴、溝、S X01・S X02(河道)の遺構を検出した。以下、種類別に記す。

1. 柱 穴 列

D 4・5グリッドで検出した一直線上に配置された柱穴3基を柱穴列I、E 5グリッド、F 5・6グリッドで検出した5基の柱穴を柱穴列IIとする。

柱穴列I(第9・11図) 柱穴P06・P07・P08は平面形が円形を呈し、径と検出面からの深さはP06が約90cmと55cm、P07が約65cmと45cm、P08が約70cmと55cm、柱間の長さはP06－P07間約4.9m、P07－P08間約4.1mを測る。覆土はいずれも暗褐色土を主体とする。これらの柱穴の径・深さ等から、3基は掘立柱建物の一部を構成する可能性が考えられる。P06－P08を建物の長軸方向とすれば、その主軸は(N－30°－E)である。P06から弥生土器(小片で時期不明)、P07・P08から加賀焼、中世の土師器が出土した。遺構の時期は中世である。

柱穴列II(第9・12図) 柱穴群と表現した方が適切であろう。柱穴P02・P04・P09・P10・P11は

平面形が円形を呈し、そのうちP02は断面観察から楕円形を呈する可能性もある。柱穴の径と検出面からの深さはP02が60cm以上と約30cm、P04が共に約60cm、P09が約50cmと60cm、P10が約40cmと65cm、P11が約70cmと60cmを測る。覆土はいずれとも暗褐色粘質土を主体とし、P02・P10は柱痕が認められる。P02は検出面からの深さが他の4基からみて約30cm浅く、P09・P10は他の3基からみて、前者は10～20cm、後者は20～30cm径が小さい。柱穴は5基しか確認されていないが、柱穴の位置と径からみて、複数の掘立柱建物が存在していたと考えられる。P04から加賀焼(越前焼)、胎土が15～16世紀とみられる土師器、P09・P10・P11から中世の土師器が出土した。遺構の時期は中世である。なお、P05は覆土が黄褐色シルトを主体とすることから、他の5基と性格が異なると考えられる。

2. 柵 SA01・SA02(第9・13図)

SA01は柱穴6基、SA02は柱穴7基検出した。柱穴は平面形が約20前後の隅丸方形又は方形を呈し、検出面からの深さ約20～25cmのものが主体をなす。覆土はSA01が暗褐色粘質土あるいは黒褐色粘質土に黄褐色シルトの土が入り、SA02が暗褐色粘質土に黄褐色シルトの土が入るものが主体をなす。柱穴の断面観察から、P20～P22・P24・P26は柱痕が認められ、柱の径は約10cmと想定される。SA01・SA02各々の柱間の長さは前者が1.8～2.1m、後者が2.1～2.3mを測り、後者が前者と同じか、あるいは若干長い。柵の主軸はSA01が(N-32°-E)、SA02が(N-35°-E)で、両者は調査区内で交わっていたことから、柵は作り替えがなされたことがわかる。なお、SA01・SA02は調査区外へ延びる可能性がある。出土遺物はないが、主軸方向が柱穴列Iとほぼ同一であること、覆土に暗褐色粘質土を含むものが多いことから、中世の遺構と考える。

3. 竪穴状遺構 SI01・(第9・14図)

調査区北東側端部に位置する。遺構は一部のみ検出し、検出部分から判断して平面形は方形を呈していると考えられ、規模は5m以上×3m以上を測る。この遺構は検出面からの深さが約10cmと浅く、貼床は認められず、柱穴も検出されなかった。覆土は黒褐色粘質シルトであり、焼土、炭化物が混じっていた。遺構から須恵器や14世紀まで下らないと考えられる中世の土師器が出土した。遺構の時期は中世である。

4. 土 坑

SK01・02・03(第9・14図) SK01・SK02は攪乱により分断されていたために遺構番号は別々に付したが、1つの遺構である。SK03は平面形が台形状を呈する。ともに覆土は暗褐色粘質土を主体とし、弥生土器小片が出土した。土器は混入で、中世の遺構と考える。

SK04(第9図) 調査区南西側の端部で一部検出し、弥生土器(小片で時期不明)が出土した。周囲の遺構の時期から判断し、弥生時代後期後葉から古墳時代前期初頭の遺構であろう。

5. 小 穴(第9図)

P01・P03・P05・P12・P13・P14・P15・P17・P18は、P03(中世?の土師器出土)以外は弥生土器(小片で時期不明のものが主体)が出土した。P01・P03・P15・P18は覆土が調査区北東側の溝などと同じ暗褐色粘質土であり、弥生土器は混入で遺構は中世のものとする。P14は出土遺物から弥生時代終末期の遺構であり、P13・P17は覆土(黒褐色粘質土、灰黄色土主体)や周囲の遺構の時期から判断し、弥生時代後期後葉から古墳時代前期初頭と考える。また、P12はSX01(河道)に注ぐ溝を通じてSX01と繋がり、SX01と同時期に機能していた小穴である。P05は黄褐色シルト主体の

覆土であり、時期は不明である。

6. 溝

S D01(第9・14図) 東から西へやや湾曲しながら流れ、調査区を横切る。幅は約30～45cm、検出面からの深さは約10～20cmを測り、覆土は黒褐色粘質土を主体とする。12～13世紀頃の加賀焼が出土し、中世の遺構である。覆土から竪穴状遺構と同時期の遺構と考える。

S D02・S D03(第9・14図) S D02・S D03はS D01を切り、やや湾曲し、並走しながら南北方向に走る。S D02は幅約50～80cm、深さ約5～15cm、S D03は幅約50～120cm、深さ約10～30cmを測る。両溝の覆土は暗褐色粘質土を主体とし、S D02からは14～15世紀の青磁、S D03から弥生土器(小片で時期不明)、須恵器、中世の土師器が出土した。両溝は中世の溝で、同時期と考えられる。

S D04(第9・14図) 概ね南北方向に走り、調査区を横切る溝で、幅約40～100cm、深さ約10～30cmを測る。E5区では、幅約60cm、長さ約3mにわたる長方形のテラス状を呈する箇所、F6区では、幅が約80cmから約20～30cmに急に変わる箇所がみられた。覆土は暗褐色シルトを主体とする。行火や古瀬戸のおろし皿など中世の遺物が出土し、やや多くの弥生土器小片(古式土師器を含む可能性あり、S D07、S D08も同じ)も出土した。弥生土器は混入で、遺構の時期は中世である。

S D05・06(第9・14図) S D05は南東－北西方向、S D06は東西方向に走り、両溝は検出面からの深さが約5cm程度で浅い。覆土は前者が暗褐色粘質土、後者は暗褐色シルトが主体である。ともに出土遺物はないが、覆土から中世の遺構と考える。

S D07(第9・15図) S X01の南西側を湾曲しながら東から西へ流れる。幅は約40～120cm、検出面からの深さは約15cmを測る。覆土は灰褐から灰色粘質土を主体とし、弥生終末期を中心とする土器が多く出土した。S X01の覆土と異なるが、S X01とS D07出土の土器が接合することから、S X01と同時期の可能性がある。

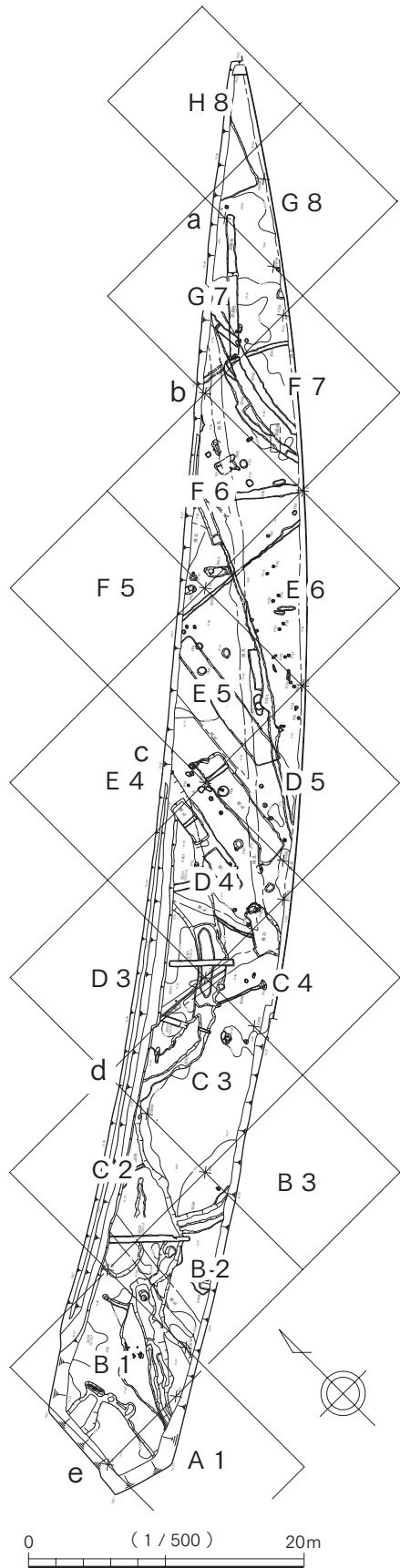
S D08(第9・15図) 東から西へやや湾曲しながら流れ、S X02(河道)に注ぐ。幅は約120～150cm、検出面からの深さは約35～50cmを測る。この溝から弥生終末期を中心とする土器がやや多く出土した。S X02との合流部では、この溝の第1層の上層にS X02の覆土(黒褐色粘質土)が堆積していたことから、S D08は河道が廃絶するまで機能していたと考えられる。

7. S X01・S X02(河道 第9・15～17図)

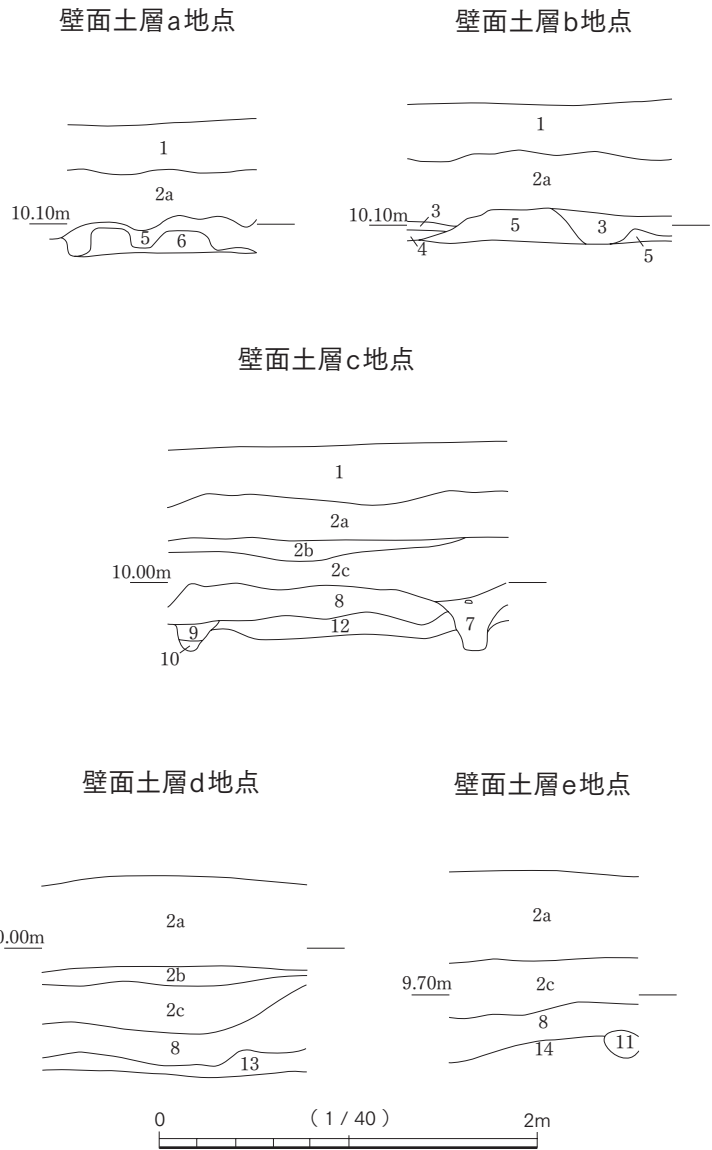
土層の堆積状況や周辺の地形からS X01・S X02は一連の河道で、後者を經由し前者へと流れていたと推定される。S X01(イ)トレンチでは、第6層の黄褐色シルト(地山に近似)を挟んで上下に堆積が認められ、河道は上層の新段階(以下新河道と仮称)と、下層の旧段階(同じく旧河道)に二分できる可能性を有する。

新河道部分は最大幅が5m以上、深さは最も深いところでは約60cmを測る。トレンチ5地点いずれでも新河道の上部で黒褐色粘質土、暗褐色粘質土が確認でき、最上位の黒褐色粘質土からは多量の土器が、加えてS X02(イ)トレンチ近くの新河道底部や、S X02エ区の暗褐色粘質土などからも土器がまとまって出土している。なおS X02(イ)トレンチでは新河道の覆土全般に土器が含まれていた。新河道(河道上層部)における土器の年代は、弥生時代終末頃から古墳時代前期初頭にかけてである。その多くは調査区南側(河道右岸側)に想定される集落域からの廃棄資料と考えられる。

S X02ウ区で土坑状の凹み(S X02内S K01)を確認した。調査区端部にかかり、全容は不明である。東側端部には、凹みの下端とほぼ幅を同じくする、長さで約1mの木が横たえられていた。この付近の黒色粘質土からは多量の土器が出土した。

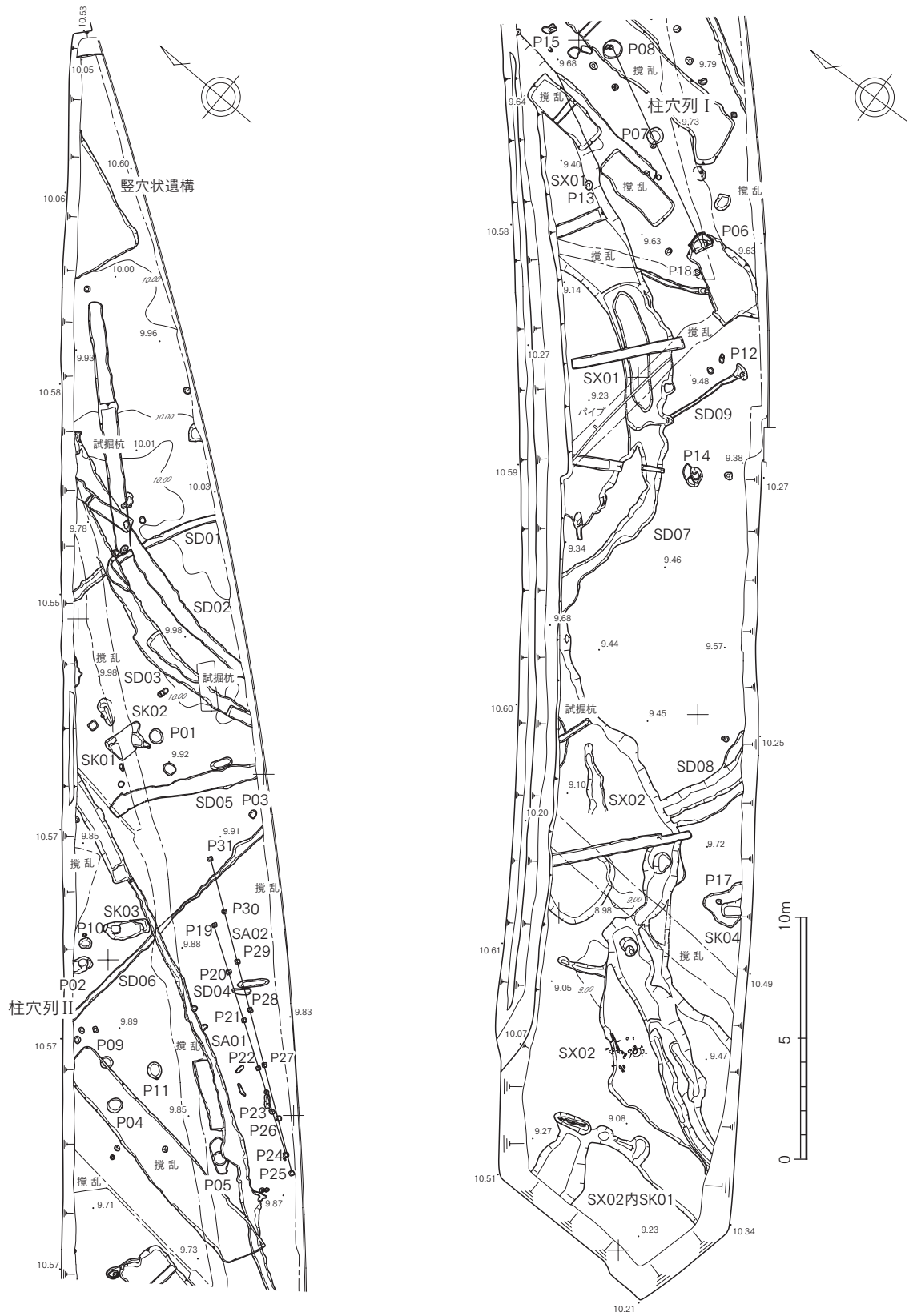


第7図 調査区グリッド図(S=1/500)

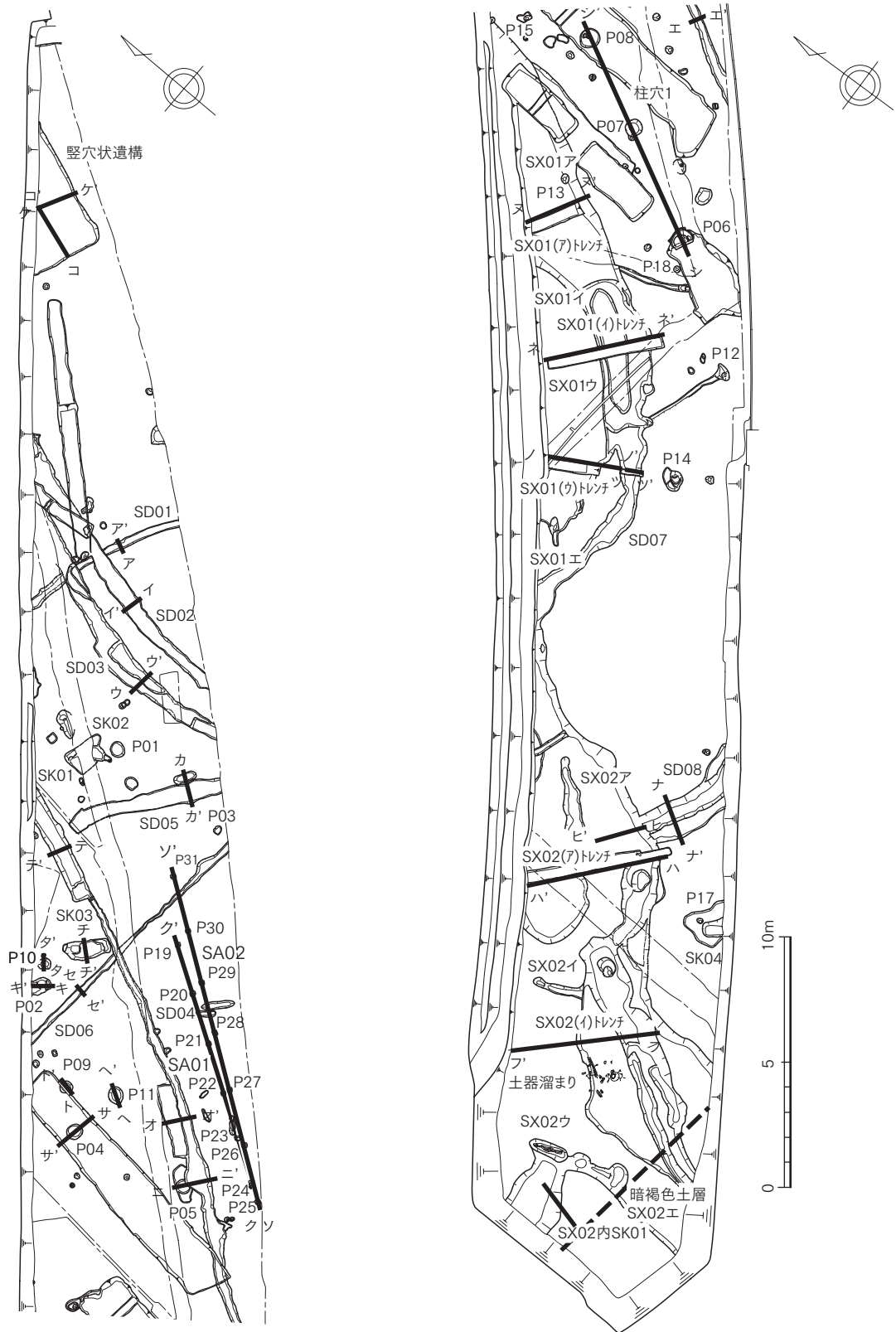


- 1 盛土
- 2a 耕作土
- 2b 2aと同じ土 鉄分沈着強い 整地土の可能性もあり
- 2c 2aと同じ土 鉄分沈着 整地土の可能性もあり
- 3 暗オリーブ褐色粘質土(2.5Y3/3) 黄褐色シルト少し混じる
鉄分の沈着弱い 古い時期の耕作土?
- 4 暗褐色シルト(10YR3/4) 遺構覆土
- 5 暗褐色粘質土(10YR3/4) 中世の遺物包含層
- 6 黄褐色砂質土(2.5Y3/2)
- 7 黒褐色粘質土(10YR3/2) 黄褐色シルト少し混じる ピット
- 8 黒褐色粘質土(10YR3/1) SX01・SX02の覆土
- 9 暗褐色粘質土(10YR3/4) 黄褐色シルト混じる、ピット覆土
- 10 暗褐色粘質土(10YR3/4) ピット 柱痕
- 11 暗褐色砂質土(10YR3/4) 11層より粘質 暗い土色
- 12 暗褐色粘質土(10YR3/4) 黄褐色シルト多く混じる
- 13 暗褐色砂質土(10YR3/4) 鉄分沈着 SX01の覆土
- 14 暗褐色砂質土(10YR3/4) SX02の覆土

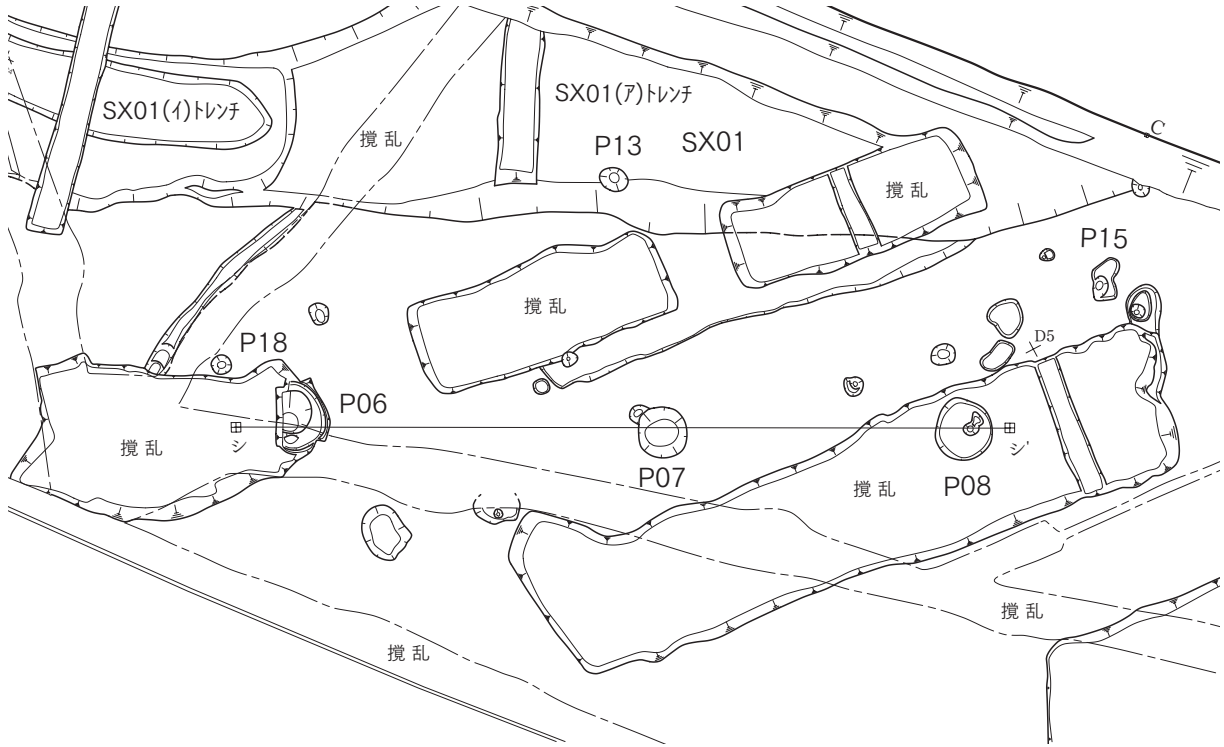
第8図 調査区壁面土層図(S=1/40)



第9図 調査区全体図(S= 1/250)



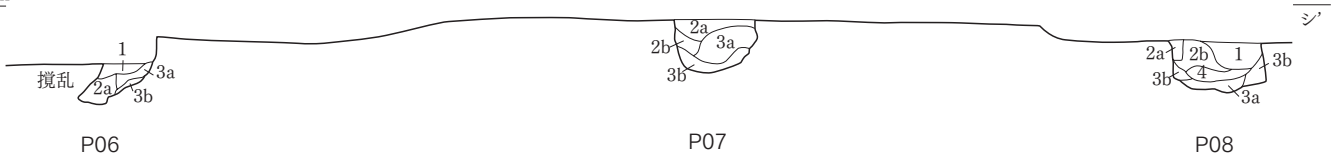
第10図 土層断面位置図(S=1/250)



0 (1/100) 5m

0 (1/60) 2m

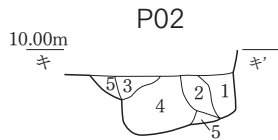
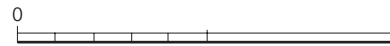
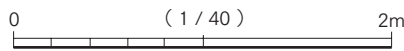
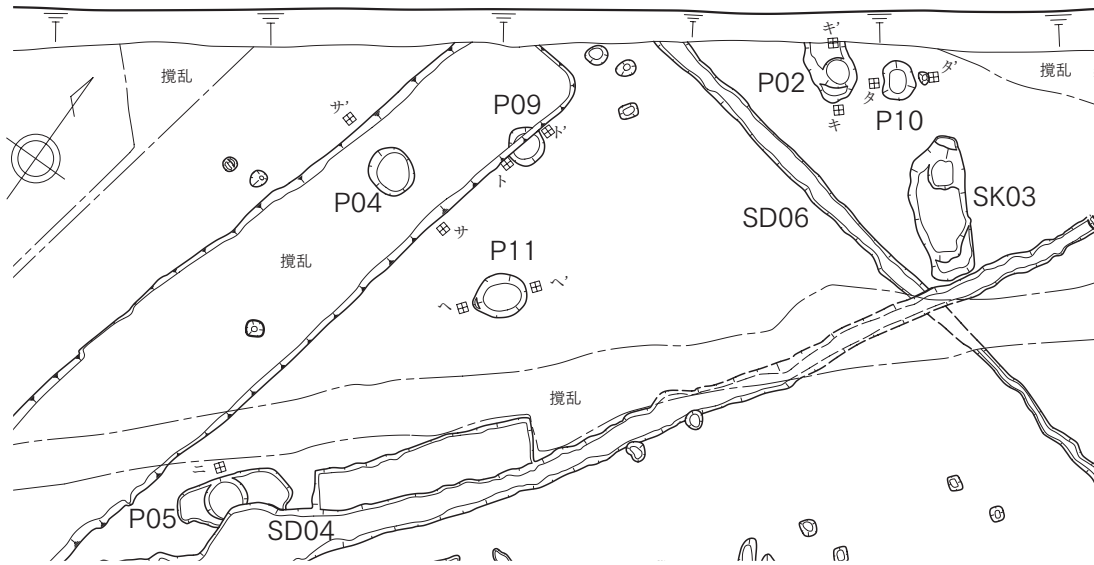
9.90m
シ



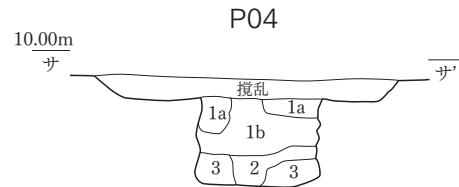
- 1 暗褐色土 黄褐色シルト多く混じる
- 2a 暗褐色土 黄褐色シルト混じる
- 2b 暗褐色土 2aより暗い

- 3a 暗褐色土
- 3b 暗褐色土 黄褐色シルト少し混じる
- 4 暗褐色粘質土 3aより明るく、粘質性強い

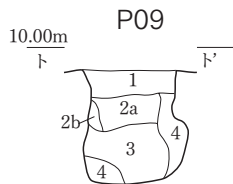
第11図 柱穴列 I (平面 S = 1/100 断面 S = 1/60)



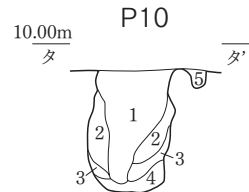
- 1 暗褐色粘質土 (10YR3/3) 黄褐色シルト (地山) 含む
- 2 暗褐色粘質土 (10YR3/3)
※ 1・2層は別ピット? もしくはブロック状に混入?
- 3 暗褐色粘質土 (10YR3/3)
- 4 暗褐色粘質シルト (10YR3/3) 黄褐色シルト (地山) 含む
1層より粘質性弱い 柱痕
- 5 暗褐色粘質シルト (10YR3/3) 黄褐色シルト (地山) 多く混じる



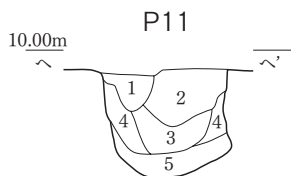
- 1a 暗褐色粘質土 黄褐色シルト (地山) 僅かに含む
- 1b 暗褐色粘質土 黄褐色シルト (地山) 多く含む
- 2 暗褐色粘質土 柱痕か?
- 3 暗褐色粘質土 黄褐色シルト (地山) 含む



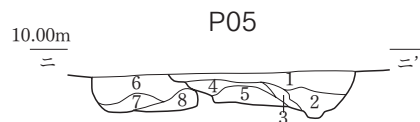
- 1 暗褐色土
- 2a 暗褐色粘質土 黄褐色シルト (地山) 僅かに含む
- 2b 暗褐色粘質土 黄褐色シルト (地山) 多く混じる
- 3 暗褐色粘質土 黄褐色シルト (地山) 含む
- 4 暗褐色粘質土 3層より明るく、粘質性強い



- 1 暗褐色粘質土 黄褐色シルト少し混じる 柱痕
- 2 暗褐色粘質土 黄褐色シルト多く混じる
- 3 暗褐色粘質土
- 4 黄褐色シルト 暗褐色粘質土混じる
- 5 暗褐色シルト ピット

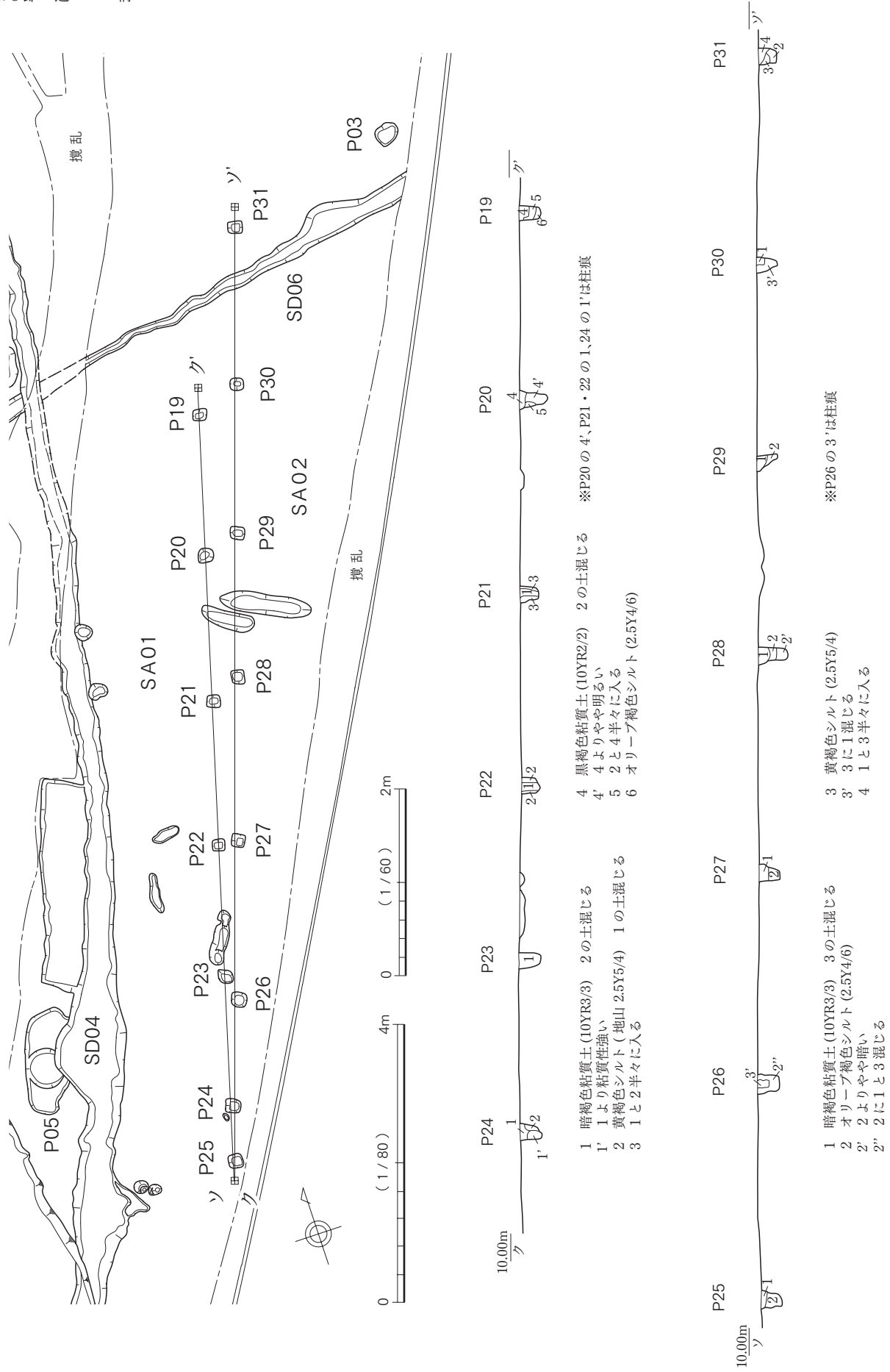


- 1 暗褐色土
- 2 層より明るい ピット?
- 2 暗褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土 黄褐色シルト (地山) 含む
- 4 暗褐色粘質土
- 5 黒褐色シルト

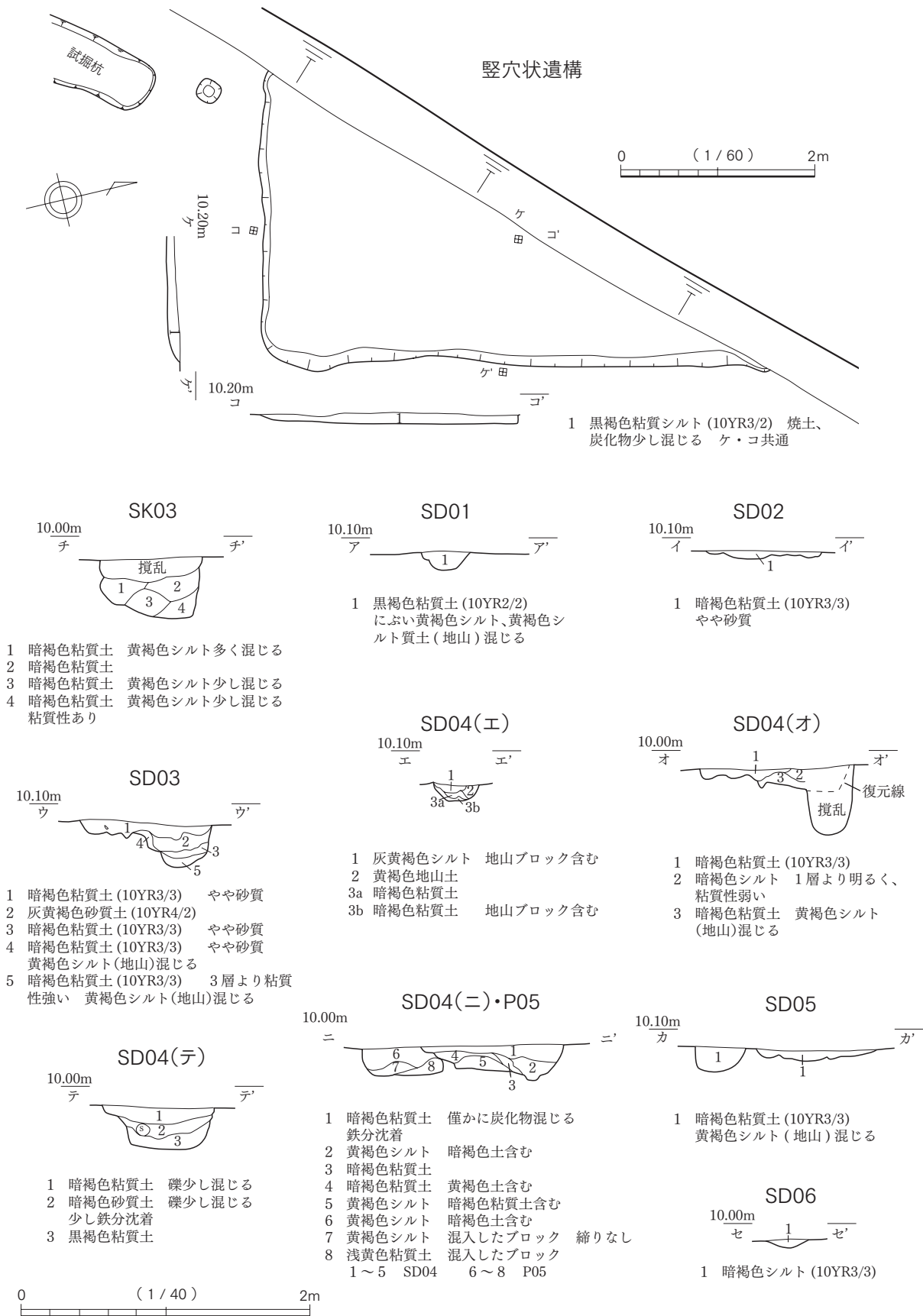


- 1~5 SD04 覆土 6~8 P5 覆土
- 6 黄褐色シルト 暗褐色土含む
- 7 黄褐色シルト 混入したブロック 締りなし
- 8 浅黄色粘質土 混入したブロック

第12図 柱穴列II (平面 S = 1/100 断面 S = 1/40)

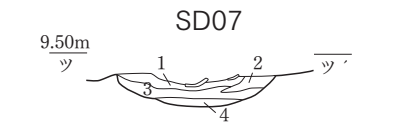


第13図 SA01・SA02(平面S = 1 / 80 断面S = 1 / 60)

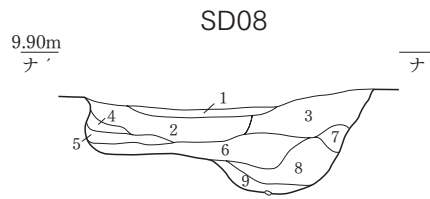


第14図 縦穴状遺構 (S=1/60)・土層断面図1 (S=1/40)

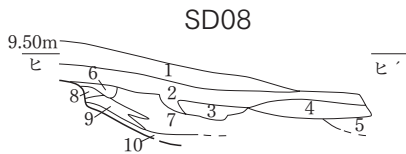
第3節 遺 構



- 1 灰褐色粘質土
- 2 淡灰褐色粘質土 黄褐色シルト少し混じる
- 3 灰色粘質土 黄褐色シルト少し混じる
- 4 濁灰黄色砂 黄褐色シルト少し混じる

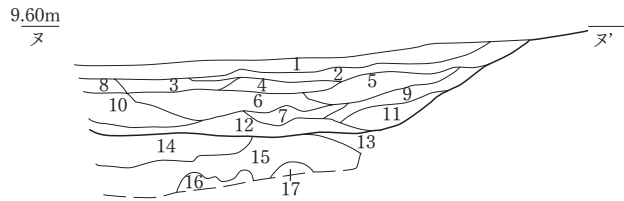


- 1 黒褐色粘質土 (10YR2/1)
- 2 暗褐色砂質土 (10YR3/3) 黄褐色シルト、暗褐色粘質土混じる
- 3 暗褐色砂質土 (10YR3/3)
- 4 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 黄褐色シルト混じる
- 5 暗褐色粘質土 (10YR3/3) と黄褐色シルト半々に入る
- 6 褐色砂質土 (10YR4/4) 黄褐色シルト、黄褐色砂混じる
- 7 暗褐色粘質土 (10YR3/4) 黄褐色砂混じる
- 8 黄褐色砂 (2.5Y5/3) 褐色砂混じる
- 9 暗褐色粘質土 (10YR3/3) 黄褐色シルト、黄褐色砂混じる



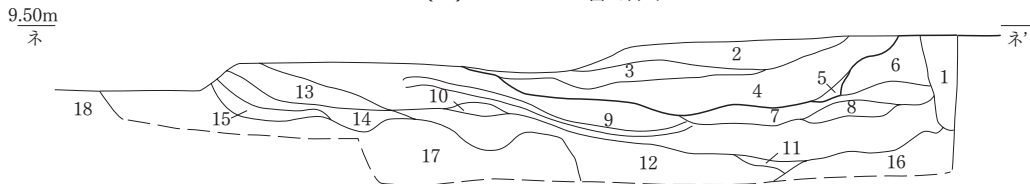
- 1 黒褐色粘質土(10YR2/1) SD08の1
- 2 暗褐色砂質土(10YR3/3) SD08の2
- 3 暗褐色粘質土 (10YR3/3) SX02(ア)トレンチの5
- 4 暗褐色砂(10YR3/3) 砂はやや細かい
- 5 褐色シルト(10YT4/1)
- 6 黄褐色シルト(2.5Y5/4) SX02(ア)トレンチの12
- 7 褐色シルト(10YR4/1) SX02(ア)トレンチの14
- 8 7層と同じ
- 9 褐色粘質土(10YR4/1) 黄褐色シルト混じる
- 10 褐色粘質土(10YR5/1)

SX01(ア)トレンチ土層断面



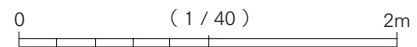
- 1 黒褐色粘質土 (10YR3/1) 弥生土器多量に入る
- 2 褐色粘質土 (10YR4/1) やや粘質
- 3 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 黄灰色砂混じる
- 4 におい黄色砂 (2.5Y6/3) 腐植物入る
- 5 におい黄色砂 (2.5Y6/3) ラミナ入る 砂は細かい
- 6 におい黄色砂質土 (2.5Y6/3) 腐植物・ラミナ入る
- 7 におい黄色砂 (2.5Y6/3) 腐植物入る
- 4層～7層同一層
- 8 黄褐色砂(2.5Y5/3) 褐色粘質土混じる
- 9 暗褐色粘質土 (10YR3/3)
- 10 褐色砂質土 (10YR4/1) やや粘質
- 11 10層と同じ 黄灰色砂混じる
- 12 黄褐色砂 (2.5Y5/4) 褐色粘質土混じる 腐食植物入る
- 13 黄褐色シルト (2.5Y5/3)
- 14 黄褐色砂質土 (2.5Y5/4) 砂はやや細かい やや粘質 鉄分沈着
- 15 黄灰色粘質土 (2.5Y5/1) 鉄分沈着
- 16 黄褐色砂(2.5Y5/1) 鉄分沈着
- 17 16層と同じ

SX01(イ)トレンチ土層断面

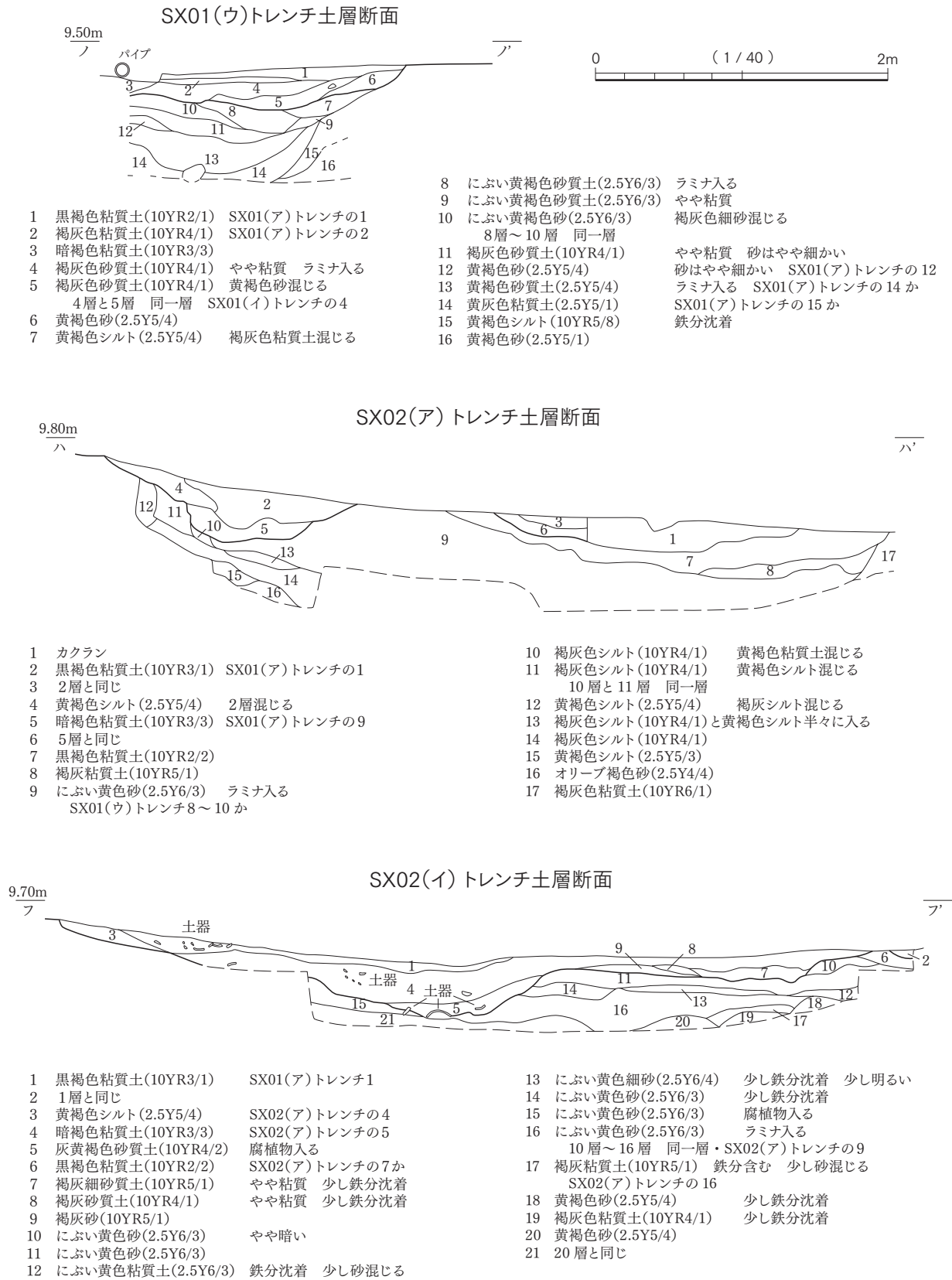


- 1 カクラン
- 2 黒褐色粘質土 (10YR3/1) SX01(ア)トレンチの1
- 3 褐色粘質土 (10YR4/1) SX01(ア)トレンチの2
- 4 褐色砂質土 (10YR4/1) ラミナ入る におい黄色砂混じる
- 5 暗褐色粘質土 (10YR3/3) SX01(ア)トレンチの9
- 6 黄褐色シルト (2.5Y5/3) SX01(ア)トレンチの13
- 7 褐色粘質土 (10YR4/1) やや砂質 ラミナ入る におい黄色砂混じる
- 8 褐色砂 (10YR4/1) におい黄色砂混じる
- 9 褐色粘質土 (10YR4/1) ラミナ入る におい黄色砂混じる
- 10 褐色砂 (10YR4/1) 腐食物入る
- 11 褐色粘質土 (10YR5/1) やや砂質
- 12 褐色砂質土 (10YR5/1) ラミナ入る におい黄色砂混じる
- 13 褐色細砂土 (10YR5/1) 7層～13層 同一層 SX01(イ)トレンチの10・11か
- 14 黄褐色シルト質土 (2.5Y5/3)
- 15 褐色砂質土 (10YR5/1) やや粘質 鉄分沈着
- 16 におい黄色シルト (2.5Y6/3)
- 17 黄灰色砂 (2.5Y5/1) SX01(ア)トレンチの16
- 18 17層と同じ 鉄分沈着

※SX01・SX02トレンチ土層断面の太線は新河道を表す

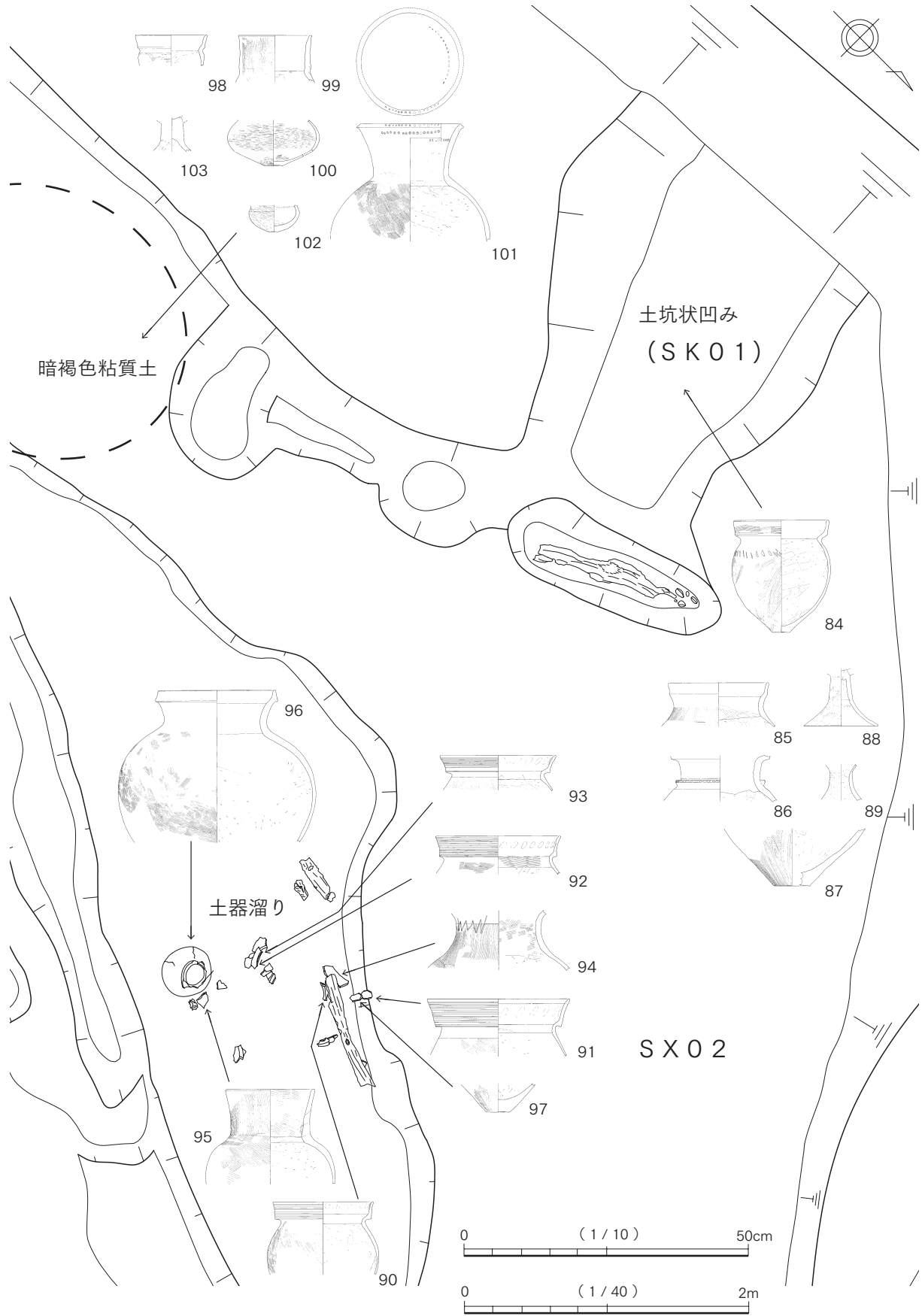


第15図 土層断面図2 (S=1/40)



※SX01・SX02トレンチ土層断面の大線は新河道を表す

第16図 土層断面図3 (S=1/40)



第17図 SX02 B1グリッド遺物出土状況(平面図 S=1/40 土器実測図 S=1/10)

第4節 遺物

1. 土器

出土土器はパンケースにして29箱あり、そのほとんどがS X01・S X02の河道から出土した弥生土器・古式土師器で、弥生時代後期後葉から古墳時代前期初頭のもものが主体を占める。その他、縄文土器、須恵器、中世土師器、陶磁器が少量出土した。遺物は、基本的には遺構別に掲載し、S X01とS X02は同一の河道であるが、別々に掲載した。弥生土器・古式土師器については器種別に記述する。

柱穴列 I ・ 竪穴状遺構 ・ 小穴 ・ 溝出土土器

- 1 (第18図)は柱穴列 I のP07から出土した。口径12.1cmを測る土師器皿で、時期は14世紀後半である。
- 2 (第18図)は竪穴状遺構から出土した。須恵器の甕で、頸部にハケが施される。
- 3 (第18図)はP14から出土した口縁部に擬凹線が施された有段口縁をもつ甕。口縁部が外反し、端部を先細りさせる。口縁部内面に指頭圧痕が巡らされ、筒状を呈した頸部内面にハケが施される。
- 4 (第18図)はS D01出土の加賀焼の甕の体部で、12～13世紀の遺物である。
- 5 (第18図)はS D03出土の須恵器の坏蓋である。口径15.6cmを測り、端部に降灰がみられる。
- 6 (第18図)はS D04出土の瀬戸のおろし皿で、14世紀後半の遺物である。
- 7～14(第18・19図)はS D07から出土した。7～12は甕である。7から11は口縁部に擬凹線が施された有段口縁をもち、口縁部が外反する。7の口縁端部は丸縁となる。8の頸部内面には明瞭な屈曲がみられる。7は口径30cm以上を測る大型の甕である。8・10は口縁部内面に指頭圧痕が巡らされ、10・11は頸部内面にハケが施される。12は無文の「く」の字口縁を有する。13は壺で、頸部に突帯を付してキザミが巡らさる。14は鉢。屈曲する体部から伸びる口縁部は直立し、端部を先細りさせる。
- 15・16(第19図)はS D08から出土した。15は口縁部に擬凹線が施された有段口縁を有する甕で、口縁部は外反し、端部を先細りさせ、口縁部内面に指頭圧痕が施される。16は壺で、13と同様、頸部に突帯を付してキザミが巡らされる。キザミの間隔は13より大きい。

S X01出土土器

17～82(第19～24図)はS X01から出土した。17～20(第19図)は縄文土器で、17～19は深鉢の体部、20は深鉢の底部である。17は渦巻状(?)の文様、18は斜方向の縄文、19は斜方向の条痕が外面に施され、それぞれ中期、後期中葉、晩期の遺物である。20は外面に1本超え・1本潜り・1本送りの網代圧痕がみられる。

21～37(第19・20図)は甕である。21～31は擬凹線が施された有段口縁を有し、27～31は口縁部が外反し、端部を先細りさせ、頸部内面が筒状を呈する。21～26は、口縁部が直立もしくは外傾する(21～23)、端部を丸く収める(22・24)、頸部内面が屈曲する(25・26)ものである。また27～30は口縁部内面に指頭圧痕が巡らされ、頸部内面にハケが施される。21の外面のハケ調整は単位が約2cmと1.5cmのものがみられ、異なる工具が使用されている。23・24は口径が30cm以上を測る大型の甕で、24は内外面の色調が黒褐色を呈し、体部上方の内外面にミガキが施され、様相は他と異なる。26は小型の甕のほぼ完形品で、外面は反時計回りのハケが施される。28は図上復元であるが、体部中央あたりの器壁は薄くつくられる。32～37は無文の有段口縁を有する。32～35は口縁部が外反し、32・33は端部を先細りさせ、34・35は端部を丸く収める。33は口縁部外面にハケ、ケズリが施され、他と異なる調整であ

る。35は頸部内外面には工具によるヨコナデが施される。37は口縁部がほぼ同じ厚さで外傾し、端部は面をもつ。

38~47(第21・22図)は壺。38~40・44~47は口縁部が外反もしくは外傾する有段状の口縁をもつ。38・39は「八」の字状の脚を有し、38は平面三角形に近い体部、39は下膨れの体部をもつ。また39の内面は口縁部から頸部がミガキ、体部上方が工具によるヨコナデ、同下方がナデ、底部がハケと、多様な調整法がみられる。41・42は算盤玉状、43はやや潰れた球状を呈する体部で、40のような有段口縁をもつとみられる。42・43は体部内面がケズリによる調整で、41と比べ雑である。44・45は二重口縁壺で、頸部に突帯を付す。44は突帯と口縁部両端に計3列のキザミが巡らされ、45は大型で口縁部に擬凹線が施される。46は口縁部が中程から屈曲・外傾して広がり、端部を先細りさせる。中膨れする体部は左右対称となっていない。47は上膨れの体部を有し、口縁部に擬凹線が施され、その下端にキザミが巡らされる。

48~53(第22図)は鉢である。48は「く」の字状に屈曲する口縁を有し、外面から内面口縁部上方はミガキ・赤彩が施される。49は体部中央が膨らむ器形で、焼成は並である。50~52は「ハ」の字状の脚をもつ鉢である。50は体部上方が欠損しているが、体部は塊状を呈していると思われる。脚内面も含め内外面に赤彩が施される。51も塊状を呈する体部を有し、口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、内面はヘラ状工具によるナデが施される。52は体部が内湾ぎみに立ち上がる。内外面に凹凸や全体的にゆがみがみられ、雑なつくりである。53は口径8.2cmを測る小型の鉢であり、体部は塊状を呈する。

54~58(第22図)は底部である。54は内外面とも磨耗により調整が不明であるが、甕の底部であろう。55は内外面の調整や器形から甕の底部とみられる。焼成前に孔が両側から穿たれ、甕として使用されていたと考えられる。56は底径7.2cmと大きいことから大型の甕の底部と考えられる。底部内面のケズリ、同外面のハケは時計回りに施される。57は脚端部が跳ね上がって面を有し、58は上げ底状の底部で、台付壺か台付鉢である。

59~68(第22・23図)は高坏である。59~62は全容がわかる、あるいは概ねわかるものである。坏部は段を有し、屈曲部から外反しながら開く。59は坏部が大きく外反し、口径30cm以上を測る大型品で、60・61は坏部が有段鉢に類似し、62は坏部が浅い。脚部は、脚柱部から脚裾部にかけて「八」の字状に開き、60は緩やかに、59・61・62は大きく開く。前者は脚柱部径が脚裾部に近づくにしながら徐々に大きくなり、後者は脚柱部径が一定である。61の脚柱部と脚裾部間にみられるハケは両者の接合強化を目的として施されたものと考えられる。63~66も段部を有する坏部で、屈曲部から外反しながら開く。63は器壁が肥厚し、65・66の坏部も有段鉢状である。また66は段部直上で凹線3条を挟み、上下交互に斜方向のキザミ4列が巡らされ、その直下にさらに1列キザミが巡らされる。67は脚柱部から脚裾部にかけて、「八」の字状に緩やかにカーブするタイプの脚部である。68は段を有する脚部で、段部に凹線4条が巡らされる。高坏か。

69~79(第23・24図)は器台である。69・70は全容がわかるもの。69は受部の口縁にやや広めの垂直な面をもち、受部径より裾部径が少し小さめの脚部をもつ。脚柱部は内側に湾曲するような形状を呈する。70は有段の受部で、外面下端に稜が発達し、キザミ1列が巡らされる。脚部も有段であり、段部に巡らされた2条の凹線直下に斜方向のキザミが1列ずつ、さらに上方の端部にキザミ1列が巡らされる。また2個1対の透かし孔が3カ所穿たれる。脚柱部は径が一定で円筒状である。71・72は受部で、71は69、72は70と類似する。また71は色調が黒褐色を呈し、72は受部内面のミガキには縦方向と横方向の2種がみられる。73~75は装飾器台の受部である。73は涙滴型透かし孔が穿たれ、74にも同様な透かし孔が穿たれているとみられる。口縁帯は73が外傾、74・75が外反する。76~79は脚部であ

る。器形や装飾から、76は69、77・78は70と同タイプの脚部と考えられる。76は脚柱部と脚裾部の境に粘土を貼り付けた痕がみられ、粘土は脚柱部と脚裾部の接合を強化するためのものとも推測される。79は裾端部が屈曲し、端部に斜方向の帯状の面を有する。面の上方は9割に面取りがなされる。

80～82(第24図)は蓋である。80は頂部がレンズ状に凹み、摘みが直立する。81は頂部がレンズ状に凹み、摘みが若干左右に張り出す形状を呈する。82は頂部が凹むものの、レンズ状の凹みではなく、摘みは直立する。3者とも「ハ」の字状に開く笠部を有する。

S X02出土土器

83～242はS X02から出土した。83(第24図)は縄文土器で、深鉢の体部である。外面は「j」字状の渦巻き文(?)が施され、また器表面に凹凸がみられる。中期末葉の遺物か。

84～103は土器がやや集中的に出土した箇所のもを配置した。84～89(第24図)はS X02ウ区に位置する土坑状の凹み(S K01)から出土した。84と85は有段口縁をもつ甕である。84は口縁部に施された擬凹線が途切れ、繋がってはいない。また肩部に斜位の列点文が1列巡らされる。85は無文の口縁部を有し、器壁は体部上方で急に薄くなる。86は二重口縁壺で、頸部に貼り付けられた突帯にキザミ1列が巡らされる。87は甕の底部である。底部の厚さは2cm以上と厚く、底部からの立ち上がり方から推測して、大型の甕と考えられる。88・89は脚部で、88は高坏、89は器台である。89は受部につながる器壁が急に薄くなる。

90～97(第24・25図)はS X02の上層下部の土器溜りから出土した。90～93は擬凹線を有する有段口縁をもつ甕である。91～93は口縁部が外反し、端部を先細りさせ、筒状の頸部内面にハケが施される。また口縁部内面に指頭圧痕が巡らされる。口縁部が直立する90は、頸部内面以外は91～93の口縁部と同じ特色を有する。94～96は壺である。95は頸部に鋸歯状の文様がヘラ描きされる。95は口縁部が筒状を呈し、口縁部外面にみられるハケは下方から上方に向かって施される。96は口径約20cm、体部径約35cmを測る大型の壺で、口縁上端に内傾する面をもち、体部はやや潰れた球状を呈する。97は甕の底部である。

98～103(第25・26図)はS X02エ区の暗褐色粘質土から出土した。この層はS X02(イ)トレンチの土層断面4に対応する。98は無文の有段口縁をもつ小型の甕で、頸部外面は強いヨコナデが施され凹む。99～102は壺である。99は直立する口縁部を有し、端部に面をもつ。口縁部内面のナデは粗く、また口縁部外面に接合痕も残り、やや雑なつくりである。100は算盤玉状を呈する体部をもち、底部は若干上げ底みである。外面は赤彩が施され、煤が付着する。101は外反して開く口縁を有し、端部に面をもつ。端部とその直下の内外面に、それぞれ15、17、16個の円形スタンプ文が施される。102は小型の壺で、外面と体部内面上方に赤彩が施され、外面に煤が付着する。体部外面は上方がミガキ、下方がケズリによる調整がなされている。103は高坏の脚部。脚柱部は中実で脚裾部が、「ハ」の字状に緩やかに開く。

104～134(第26～28図)は甕である。104～124は擬凹線が施された有段口縁を有し、113～124は口縁部が外反し、端部を先細りさせ、頸部内面が筒状を呈する。104～112では口縁部が短い(104)、口縁端部を丸く収める(105～108)、口縁部が直立する(109～112)、頸部内面の屈曲が明瞭(104・106・110・111)などの特徴がみられる。114～124は指頭圧痕が巡らされる(113・120・121・124は間隔が疎で、他は密)。120～123は頸部内面にハケが施される。104と105は外面体部に装飾が施され、104は列点文、105は波状文3段とその直下に廉状の波状文が巡らされる。106・107・109・118・119は口径約10～12cmを測る小型の甕、112・124は口径30cm以上を測る大型の甕である。また124は頸部内面にミガキが施

され、やや特異である。120は底部に焼成前に穿たれた孔がみられ、甕として使用されていたと考えられる。また体部外面下方で、斜方向の細かいケズリ状の調整が残る。125～131は口縁部が無文の有段口縁を有する。125・126は口縁部が直立する。127は口縁端部に向かうにしたがって器壁が薄くなり、体部中央の器壁も薄い。128は肩部が大きく張り、129は口縁部が大きく開き、頸部は鋭く屈曲する。130は外傾する口縁端部に面をもつ。131は口径12cmを測る小型甕で、体部下方の器壁は薄い。132は「く」の字口縁を有する甕で、頸部が強く屈曲する。無文の口縁部が外反しつつ長くのびる133は壺とすべきか。134は小型の甕で、口縁部内面にミガキが施される。あるいは鉢とすべきか。

135～163(第29・30図)は壺である。135は台付長頸壺で、体部外面中央に突帯を付し、突帯には2条の凹線が巡らされる。136・137は無頸台付壺である。136は体部内底が平らで、そこから鋭く屈曲して内傾する。137は体部下方で屈曲し、口縁部は緩やかに内傾する。138は細長い体部、139は口縁端面に内傾する面をもつ。140は頸部内面の稜がシャープに成形され、底部が厚く仕上げられる。141は短頸壺で、頸部は粘土が貼り付けられ肥厚する。140と同様、底部は厚く仕上げられる。142・143は頸部から直立する口縁部を有し、口縁部外面に142は斜方向(左上がり)、143は上から下へのハケ調整がみられる。144は口縁上部がやや外傾し、口縁端部直下にナデによる凹みが巡らされる。142～144の口縁端部は面をもつ。145～157は口縁が有段であり、145では直立、146～157では外反もしくは外傾する。145・146は口縁部に擬凹線が施される。147は口縁部下端、152は頸部にキザミが巡らされる。154・155の口縁部は受口状を呈する。156は全面ミガキ調整による精製壺で、外面に赤彩が施され、算盤玉状を呈する体部をもつ。157は肩が張る体部、上げ底の底部を有する。158～161は有段の口縁部を有すると考えられる。161の内面には工具によるナデと指によるナデがみられる。162は口縁下端部に稜が発達し、算盤玉状を呈する体部を有する。煤が体部中央を巡るように厚く付着し、甕のように使用されていたと考えられる。163は口縁部が「ハ」の字状を呈し、口縁端部内面に面をもつ。

164～177(第30・31図)は鉢である。164は有段鉢である。165～170は碗状を呈し、168・169は扁平な器形で、170は口縁部が直立する。166～168は精製品で、167では内面上方のミガキの単位がやや広く、異なる工具が使用されたとみられ、168では内外面に赤彩が施される。171は有段口縁をもち、体部上方から口縁部にかけて把手が付く鉢である。内外面にミガキが施された頸部より上方で赤彩が施される。172・173も有段口縁をもつ。172は底部が厚く仕上げられ、173は内外面に赤彩が施された半球状を呈する体部で、底部は欠損している。形状から推して脚が付いていたと考えられる。174は壺である可能性が考えられる。175・176は体部が碗形、あるいはそう推定されるもので、底部はともに有脚で後者には上げ底風の短い脚が伴う。177は外面に粘土を貼り付けた部分や、凹凸がみられ、また器高も一定せず、雑なつくりの小型鉢である。

178～197(第31図)は底部(脚部)である。178～184は外面がハケ、内面がケズリによる調整を主体とする甕と考えられる。底部外面は178～180が平らで、181～184が凹んでいる。また底部外面にはハケによる調整(178・181・184)とナデによる調整(179・180・182・183)がみられ、183の凹みはやや大きく、工具使用のナデによるものである。179は内面に炭化物が付着していた。184は底部が楕円形を呈し、やや歪である。185～187では孔が両側から穿たれ、185・186が焼成前、187が焼成後に穿たれたものである。187の孔径は内面約1cm・外面約1.5cmを測り他より大きく、また孔の中程には鋭い稜がみられる。内外面の調整や器形から、185～187は甕と考えられるが、187は底部からの立ち上がりが他と比べて緩いことから、鉢の可能性もある。188・189は外面にミガキやナデが施され、壺の底部であろう。190～196は脚である。190は底径13.5cmを測り、内面にケズリが施され、大型でしっかりとしており、恐らく壺に伴うものであろう。191は歪みや内面に凹凸がみられるやや雑なつくりで、脚裾端部に擬凹

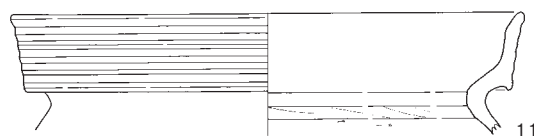
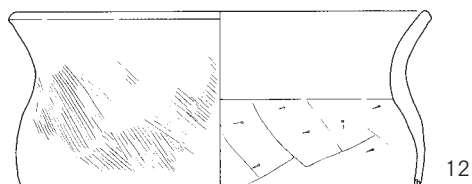
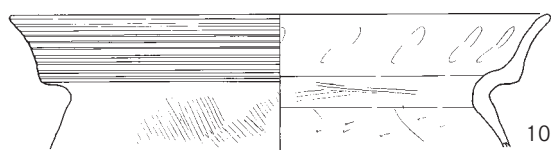
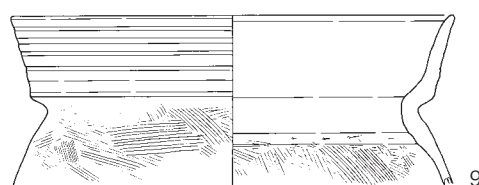
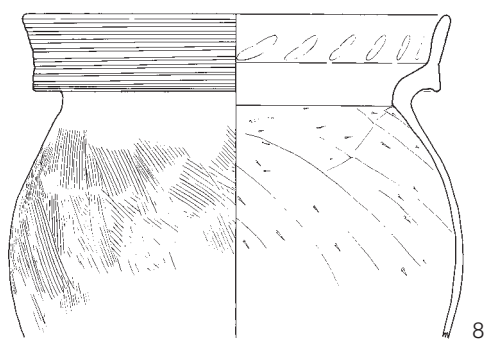
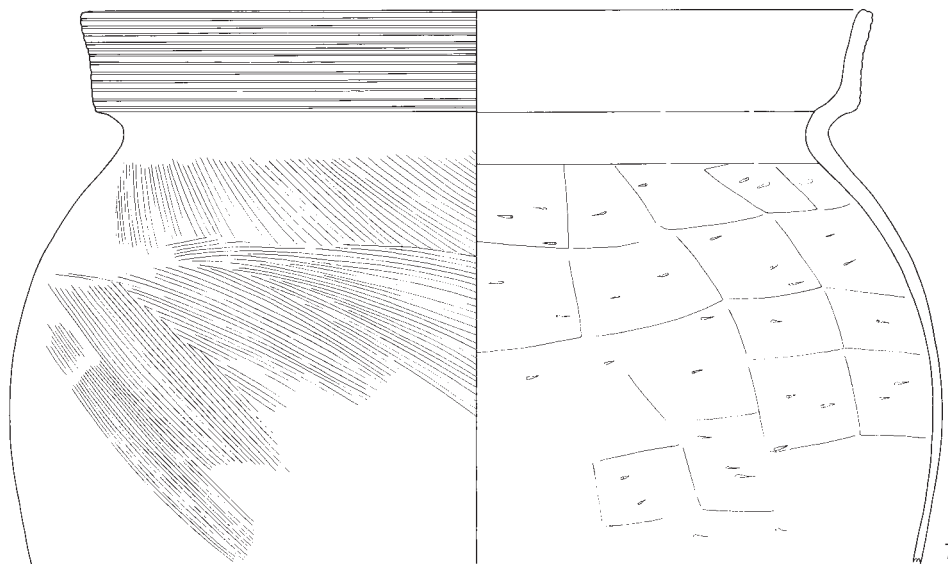
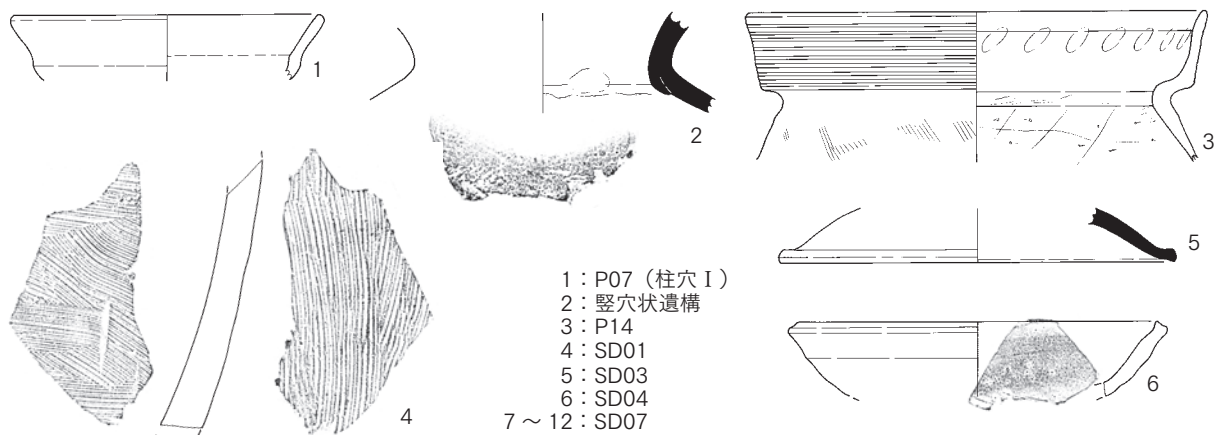
線3条が巡らされる。192は重厚で、内底中央が凹む。192～194は「ハ」の字状の脚であり、195～197は小さい脚で、197は上げ底風である。191～193は壺、194～197は壺か鉢であろう。

198～219(第32・33図)は高坏である。198～201はほぼ全容がわかるものである。198は口径約10cmの小さな坏部で、199は198に類似した坏部と考えられ、200・201は有段鉢状の坏部である。脚部は脚柱部から脚裾部にかけて「八」の字状に開くものが多く、198～200では緩やかに開き、201では一気に開く。前者は脚柱部の長さが短い。198は脚裾部径が口径より大きい。200は内外面に赤彩が施され、脚内部はしぼり目の後に反時計回りのナデが施される。201は坏部のミガキが内面は下方から上方へ、外面は左上がりの斜方向で施される。202～207は坏部である。202は坏部が浅く、端部でやや幅広の水平な面をもち、内側に肥厚する。203～205は段部から外反しながら開く。206は口径が17.7cmとやや小さく、深身の有段鉢状、207は口径12.1cmを測る小さな碗状の坏部である。208～219は脚部であり、217～219は段を有し、脚柱部から脚裾部にかけて「八」の字状に開く。208～213・217～219は214～216とは異なり脚柱部が明瞭である。208～213・217～219は棒状の脚柱部を有し、その長さが5cm以上のものが主体を占める。また透かし孔が穿たれたものが多くみられる(208・210～212・217～219)。219は透かし孔が上下2段で、上段には4カ所、下段には2個1対で4カ所みられる。208・217・218は脚裾端部が跳ね上がり、斜位の面をもつ。208は面が幅広で、端部外面に擬凹線12条が巡らされる。219は裾端部に垂直な面をもつ。

220～234(第33・34図)は器台。220～222は受部である。220・221は大きく開く受部で、220は稜、221は突帯を有する。受部、脚柱部外面はミガキを主体とした調整がなされ、221は脚柱部内面上方にもミガキが施され、丁寧に仕上げられている。222は口縁部からほぼ直角に屈曲し、水平な面を有する器台受部か。223～234は脚部で、223～227は段を有し、脚柱部から「八」の字状に開く脚部。230は円筒状の脚柱部を有する。231は79に類似し、裾端部は欠損しているが、面をもつと考えられる。224は脚柱部中央で横方向にミガキが施され、脚裾部に巡らされたキザミ1列の直上に凹線6条を有する。また外面は赤彩され、煤が付着する。232・233は脚裾部である。232は擬凹線31条を有し、裾部径は26.2cmを測る大型品である。233は内面に凹線2～3条施され、器台としたが高坏の可能性もある。234は小型器台で、内外面に赤彩が施される。

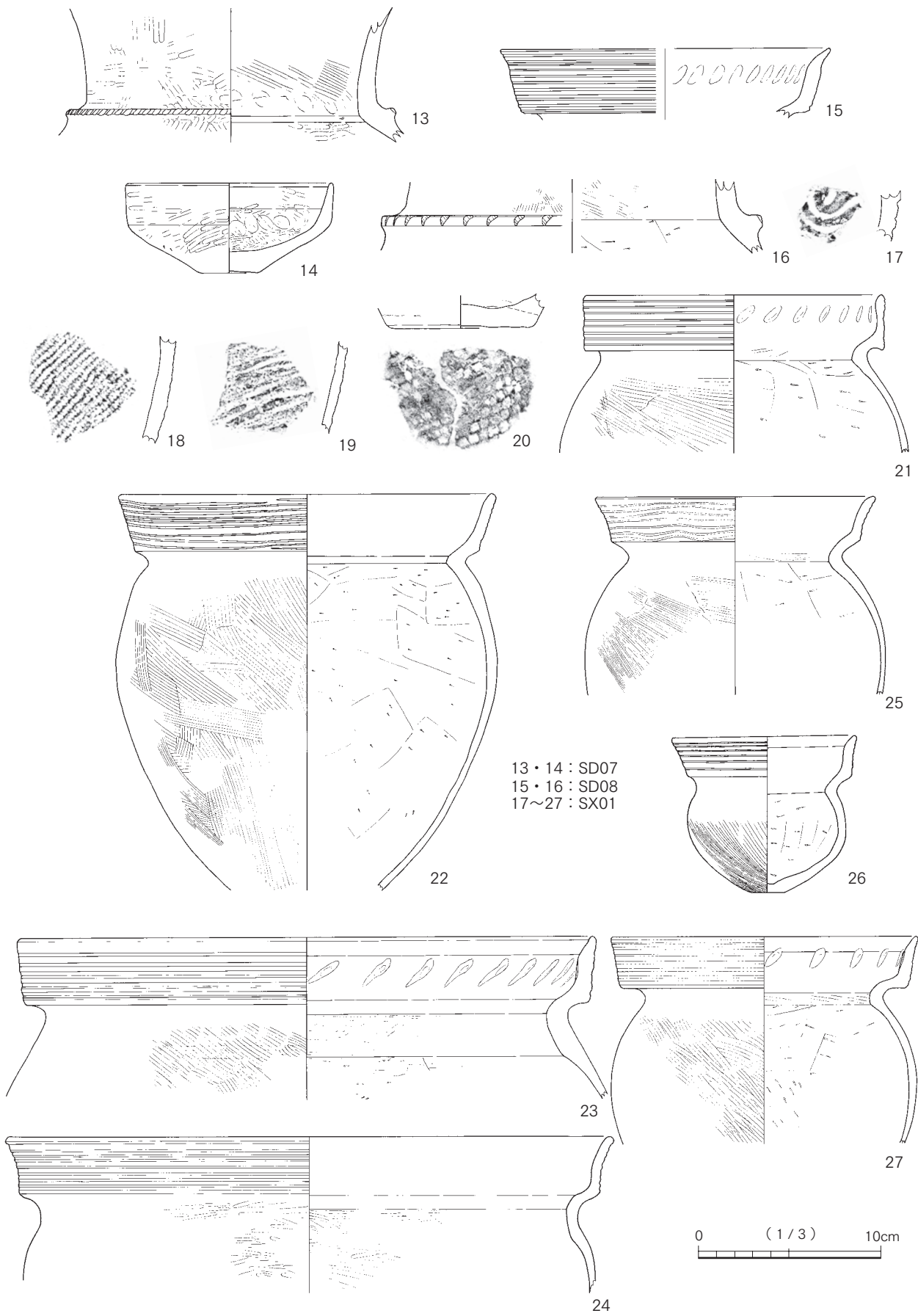
235～241(第34図)は蓋である。235は頂部の摘みが直立するもので、頂部上端がほとんど凹まない。236～240は頂部が凹み、左右に張り出す摘みであり、239は外面に赤彩が施される。いずれも「ハ」の字の笠部をもつ。241は把手をもつ。内外面にミガキ調整が施された精製品である。

また242は鉢か壺の把手。

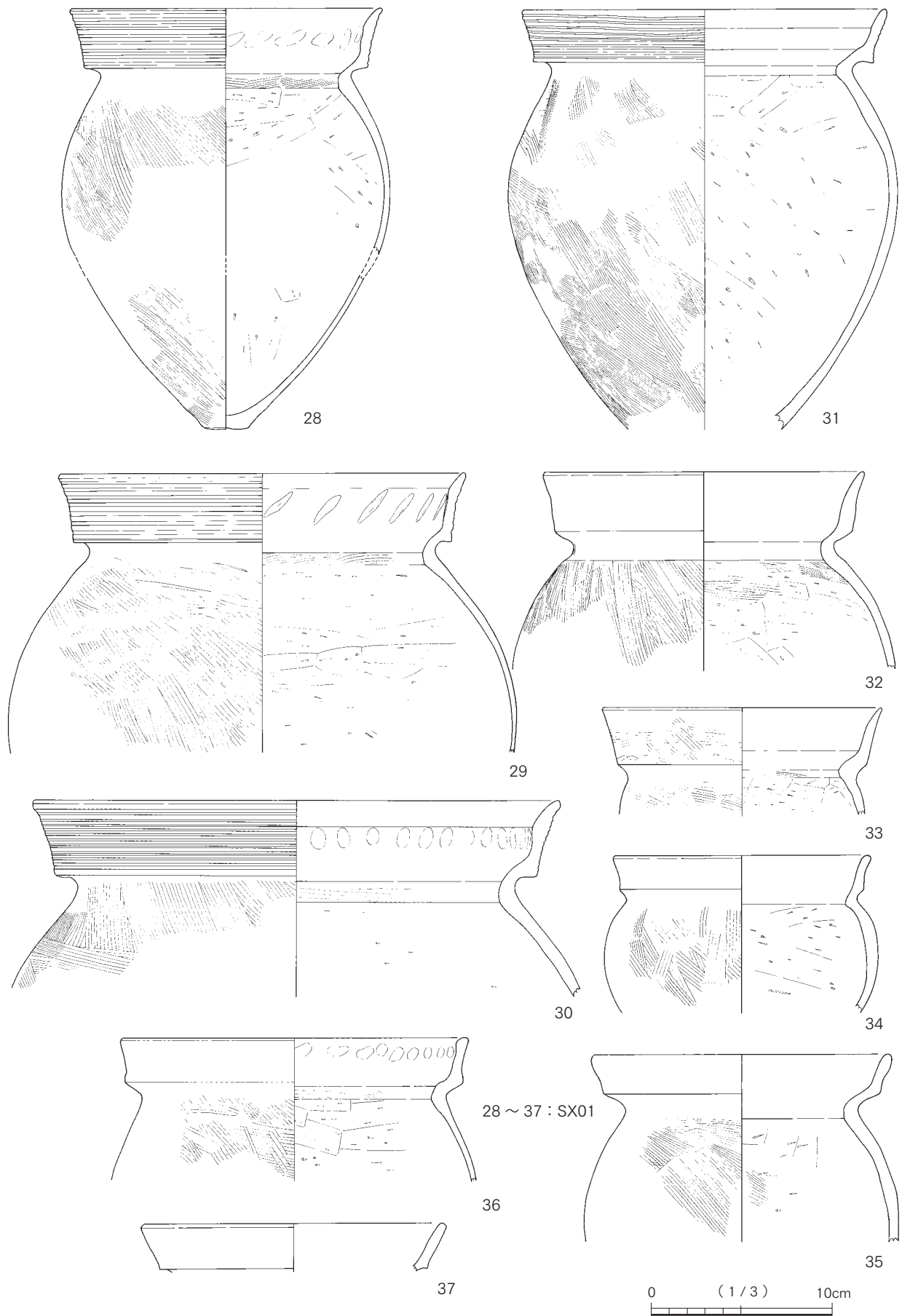


0 (1/3) 10cm

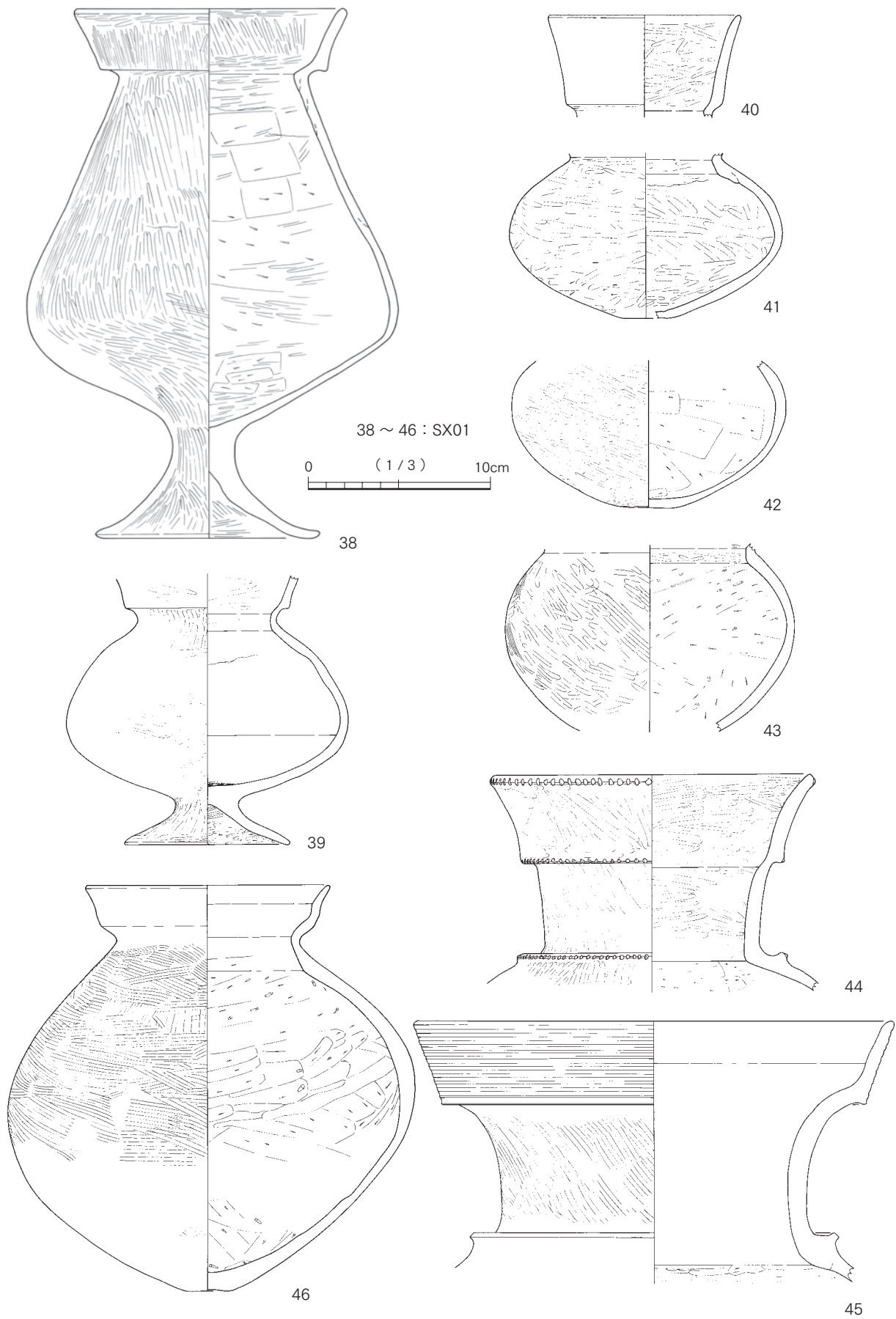
第18図 出土遺物実測図1 (S=1/3)



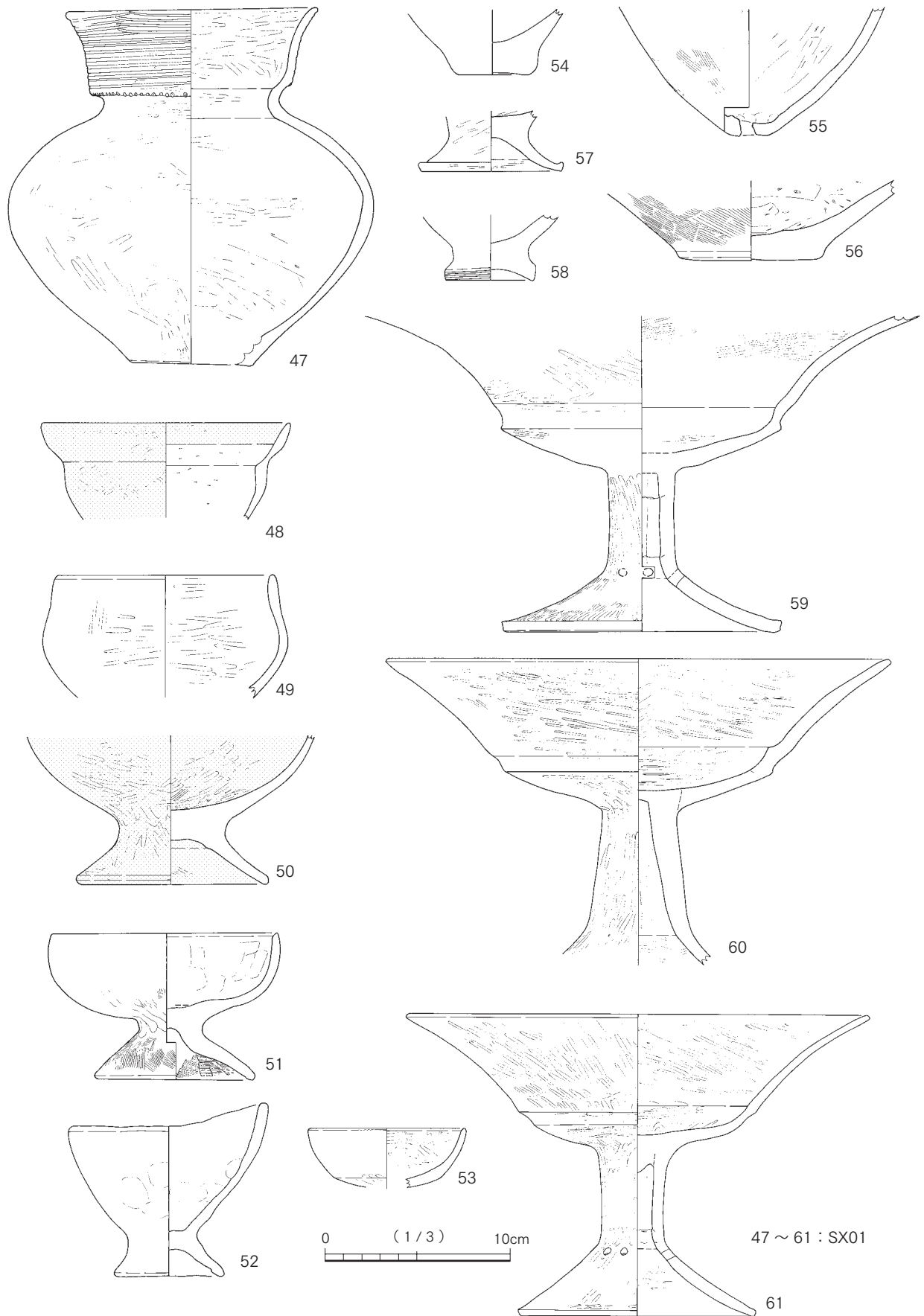
第19図 出土遺物実測図2 (S=1/3)



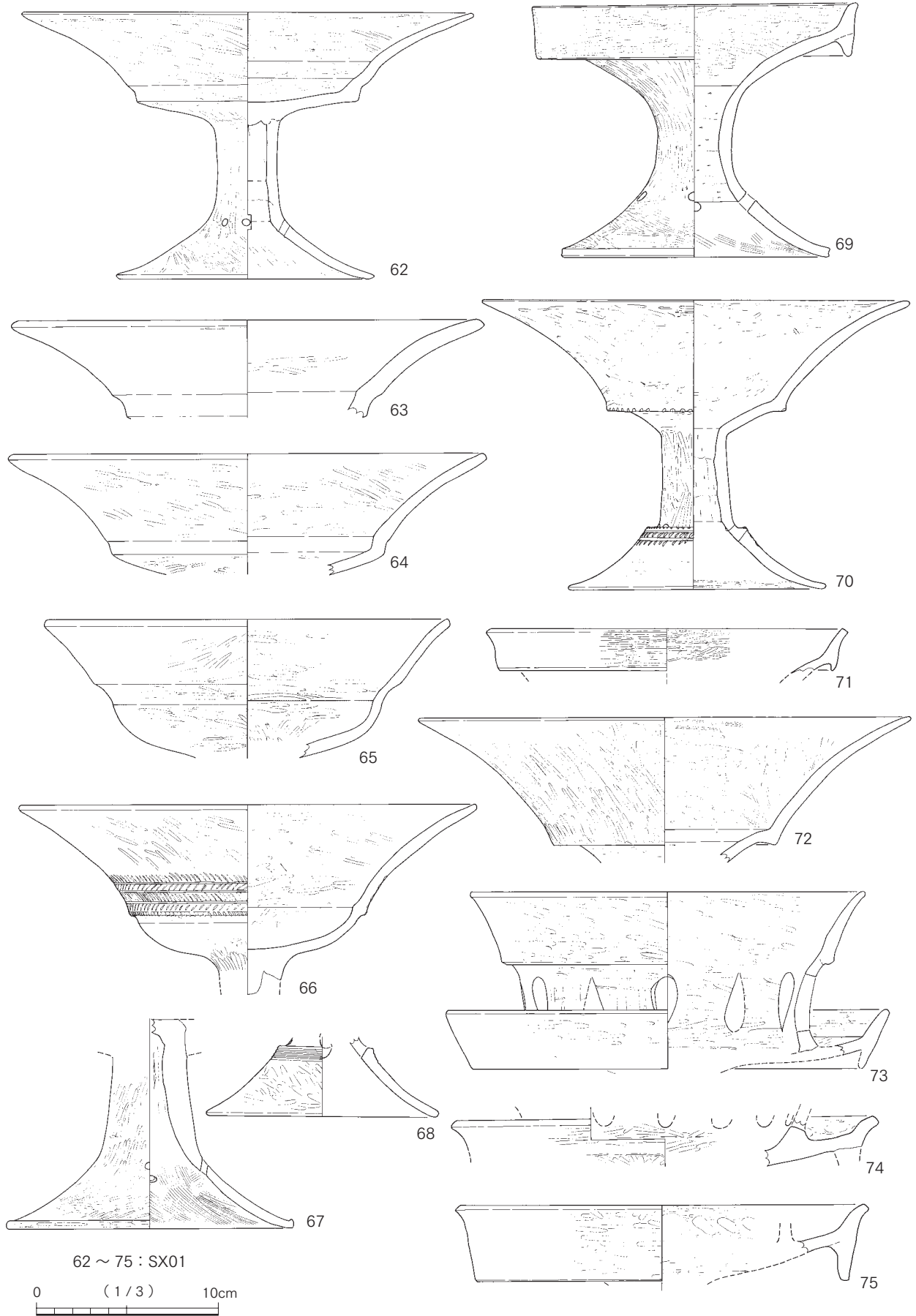
第20図 出土遺物実測図3(S=1/3)



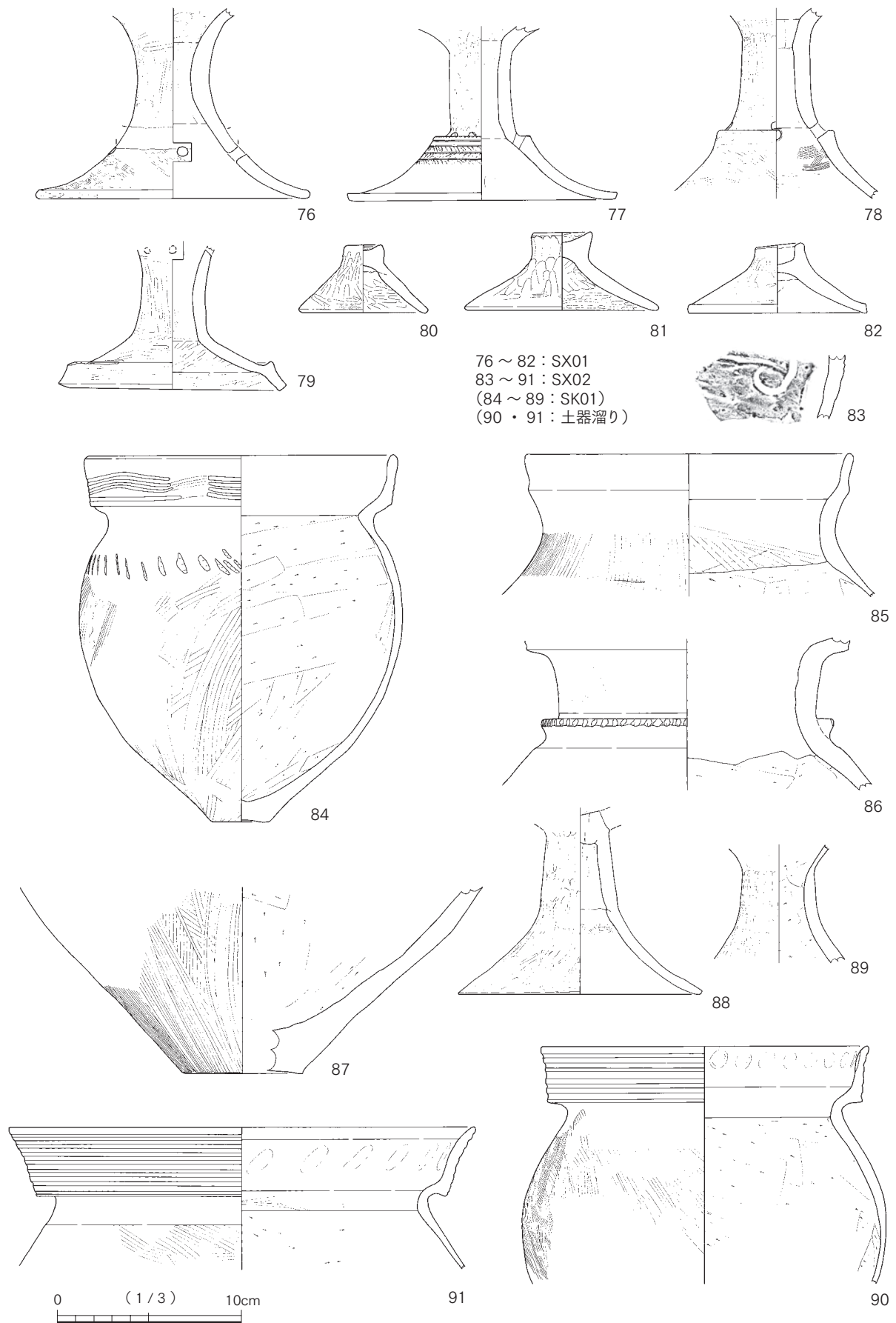
第21図 出土遺物実測図4(S=1/3)



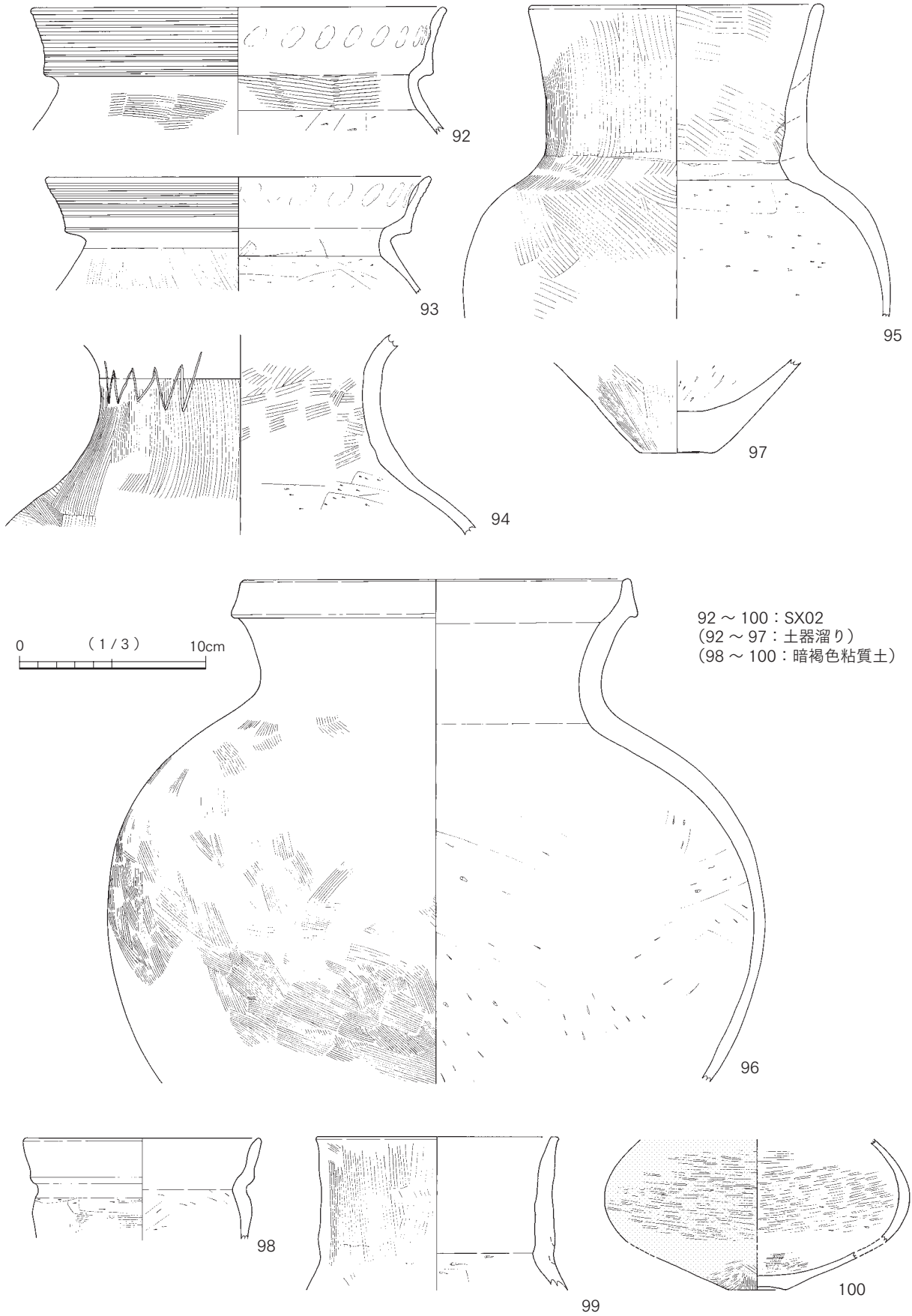
第22図 出土遺物実測図5 (S=1/3)



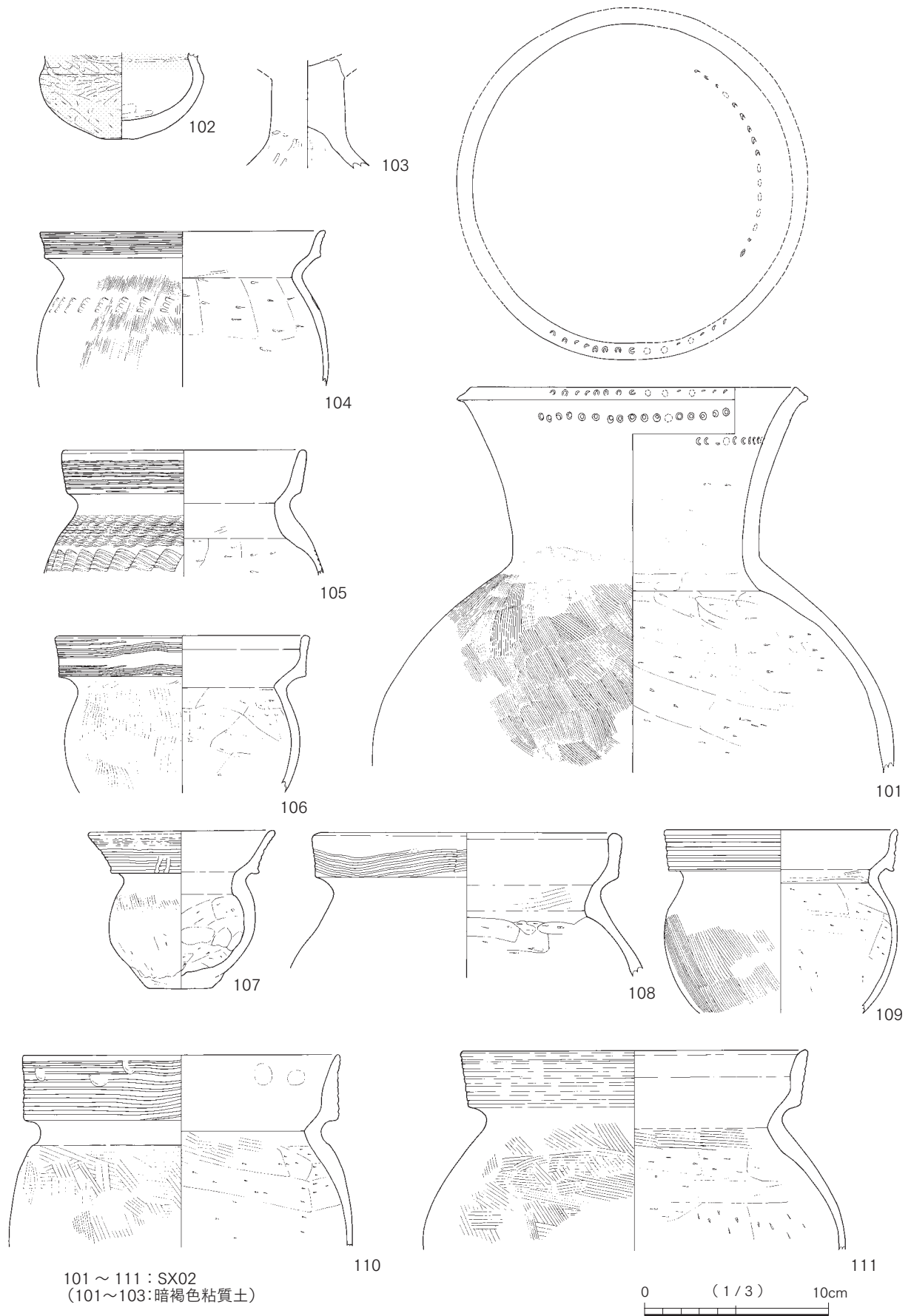
第23図 出土遺物実測図6 (S=1/3)



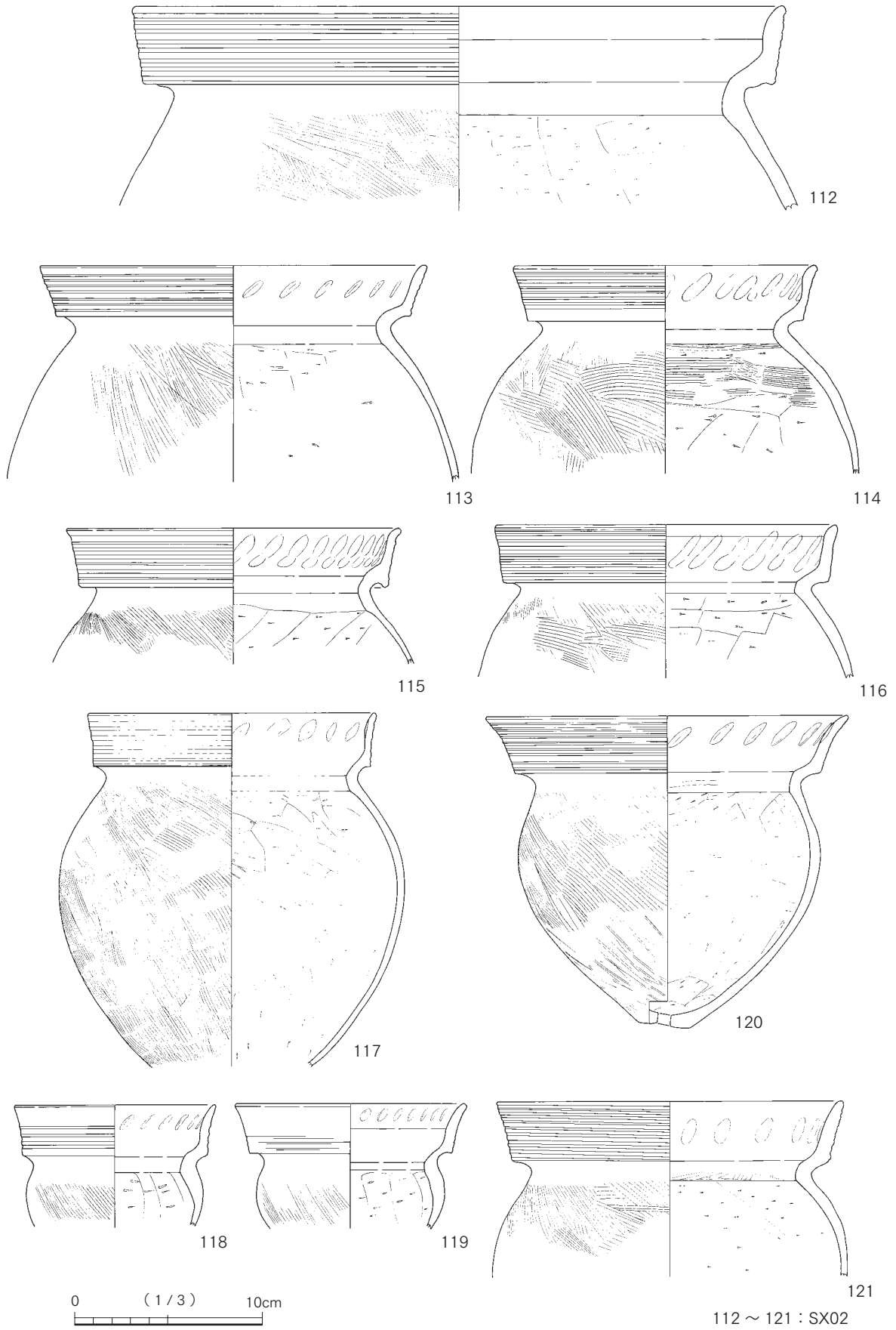
第24図 出土遺物実測図7(S=1/3)



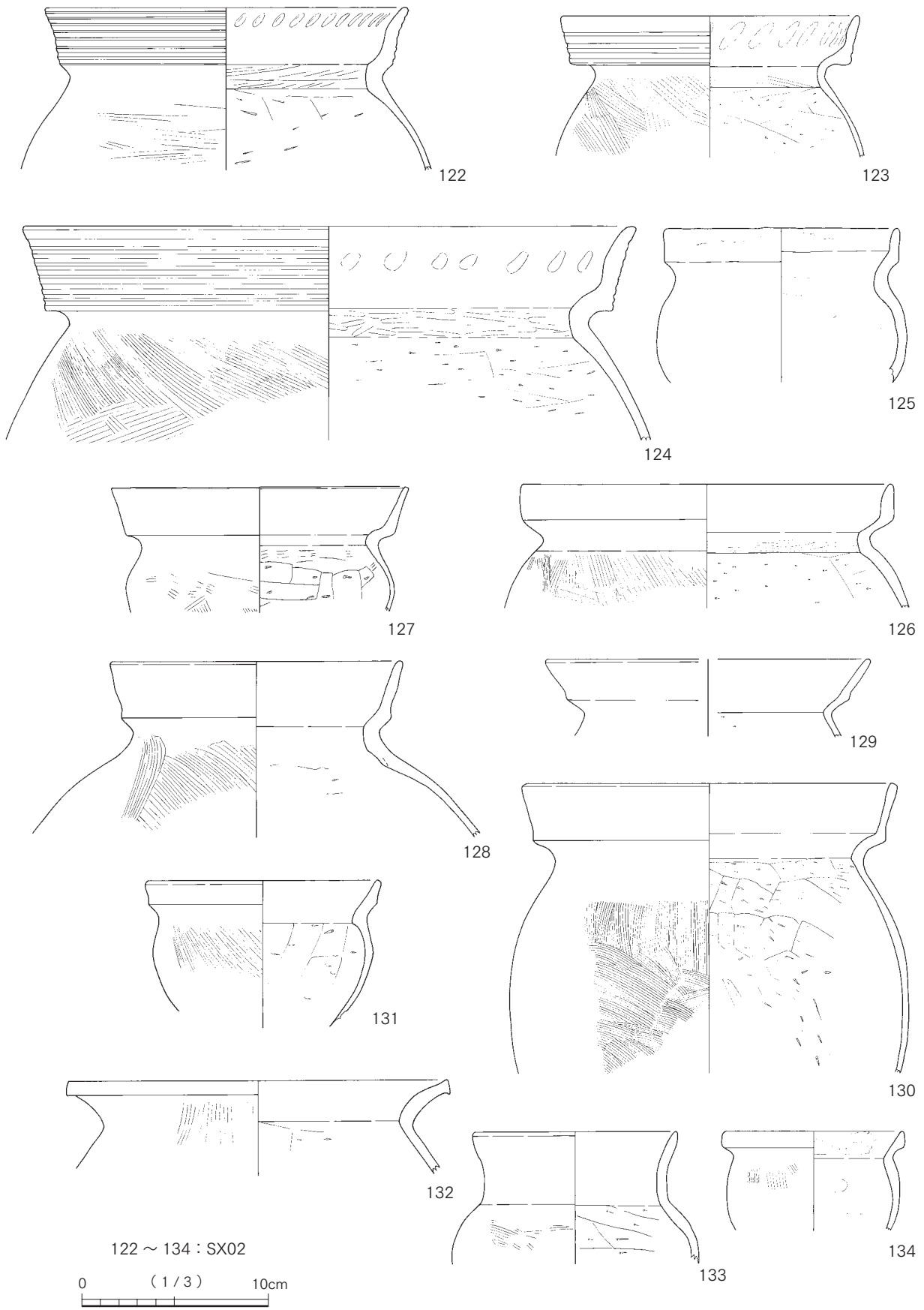
第25図 出土遺物実測図8 (S=1/3)



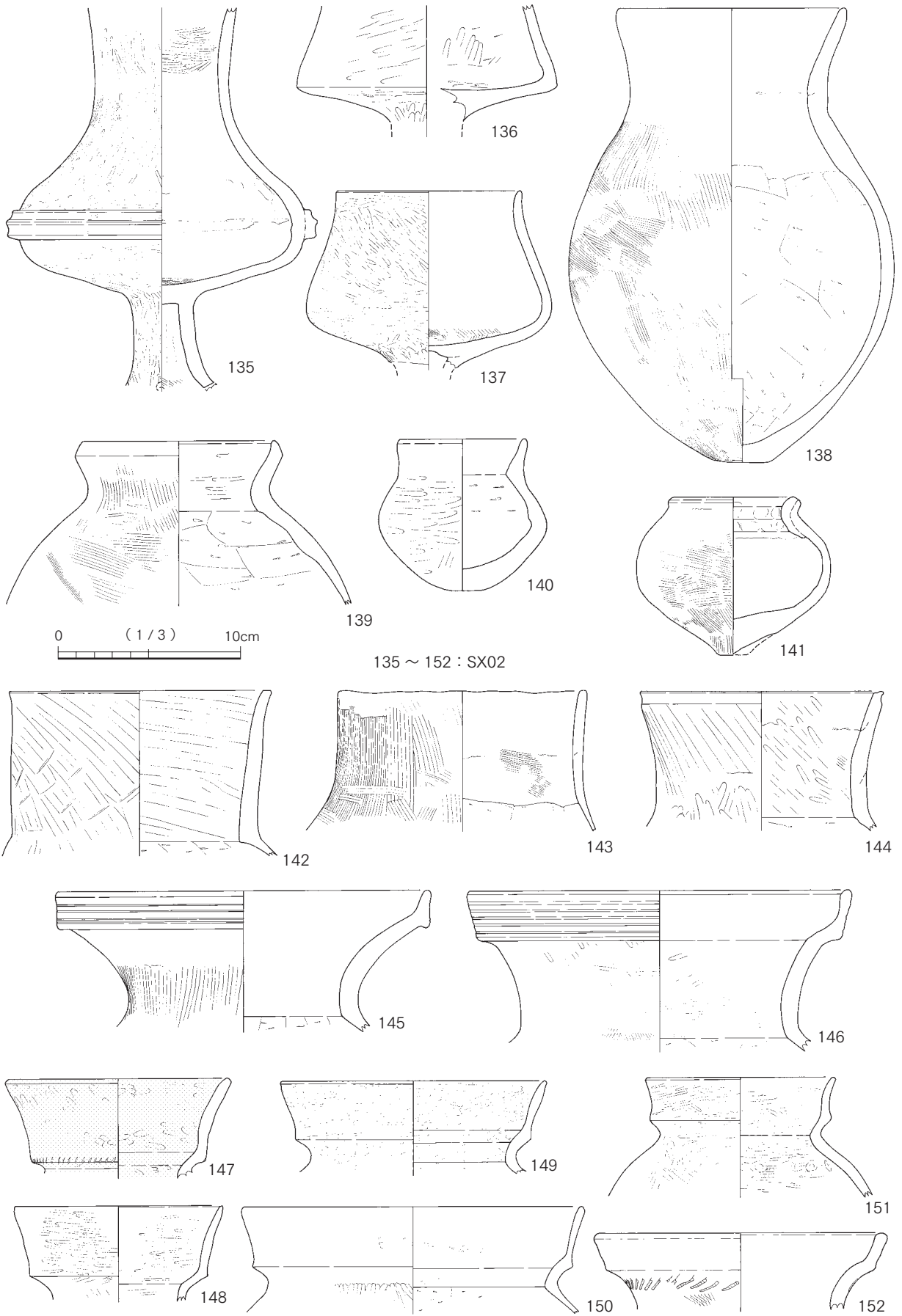
第26図 出土遺物実測図9(S=1/3)



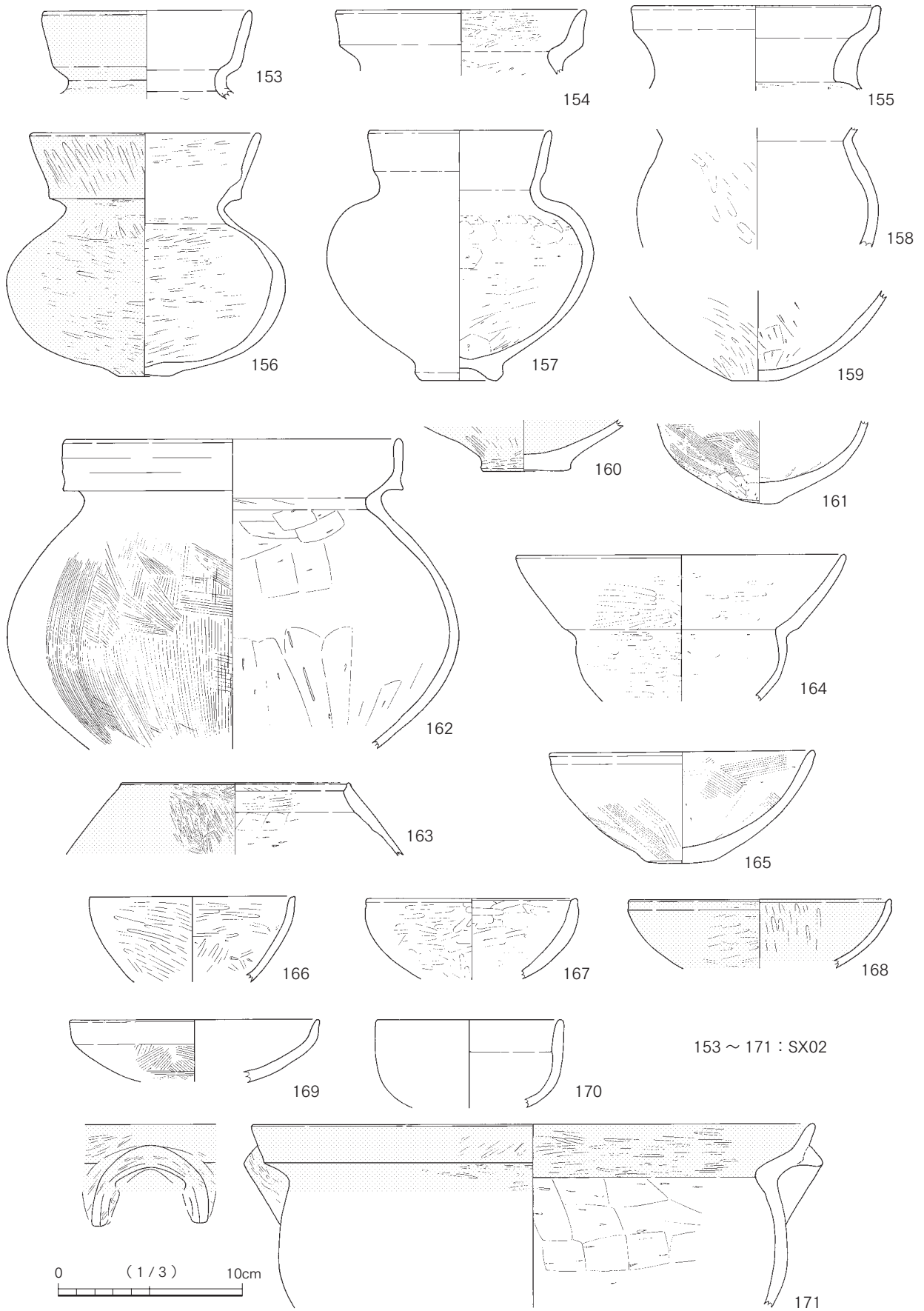
第27図 出土遺物実測図10(S=1/3)



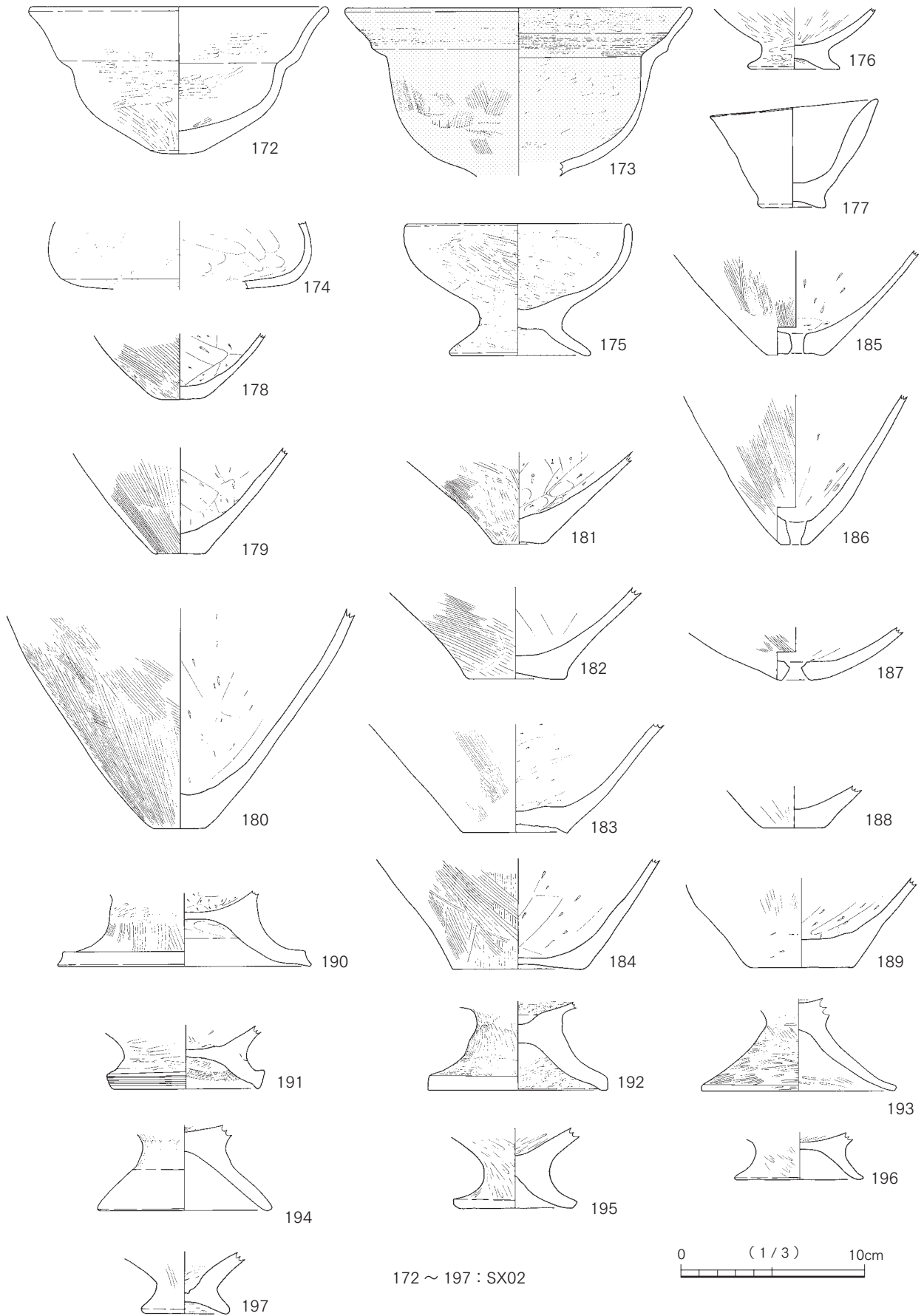
第28図 出土遺物実測図11(S=1/3)



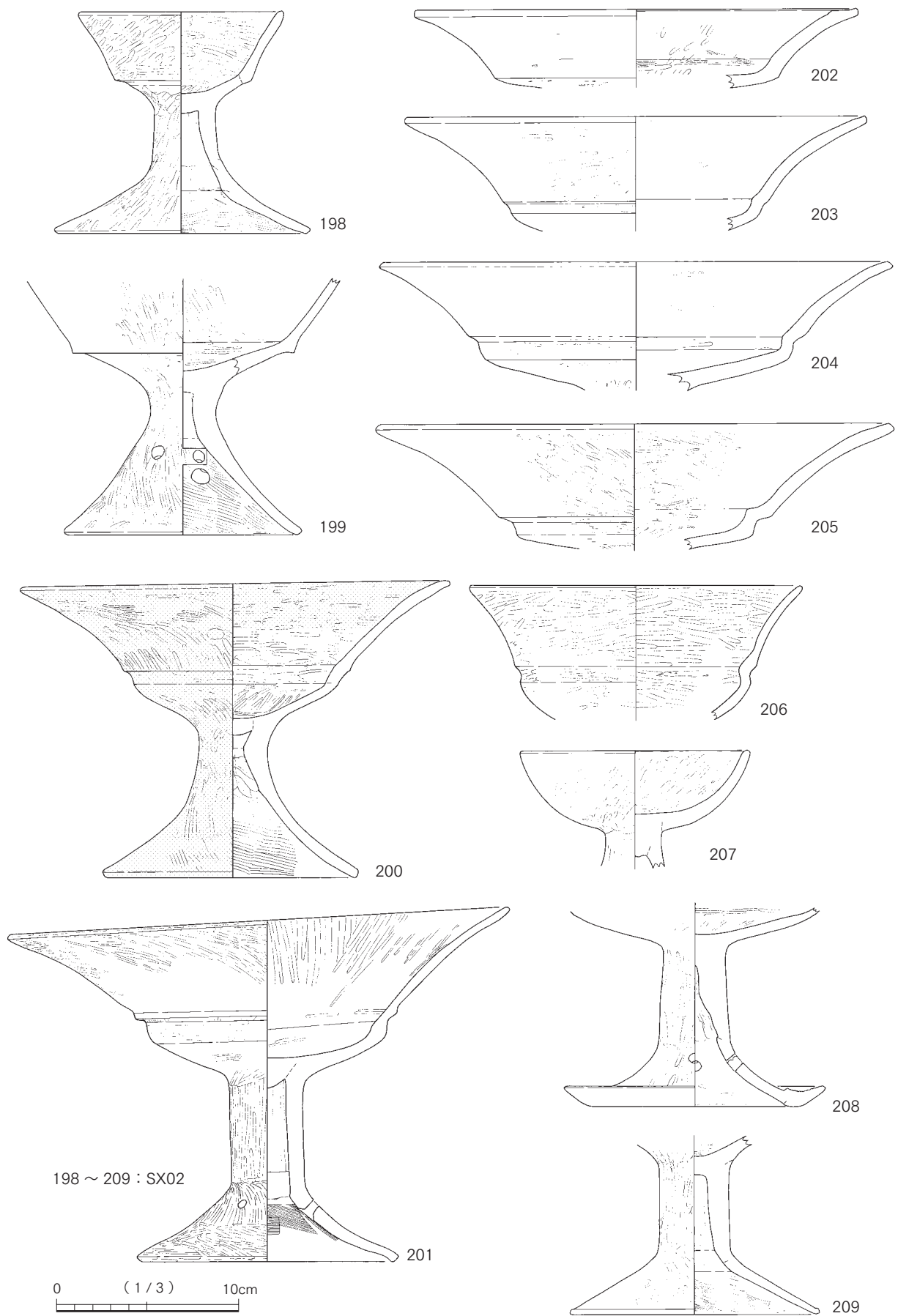
第29図 出土遺物実測図12(S=1/3)



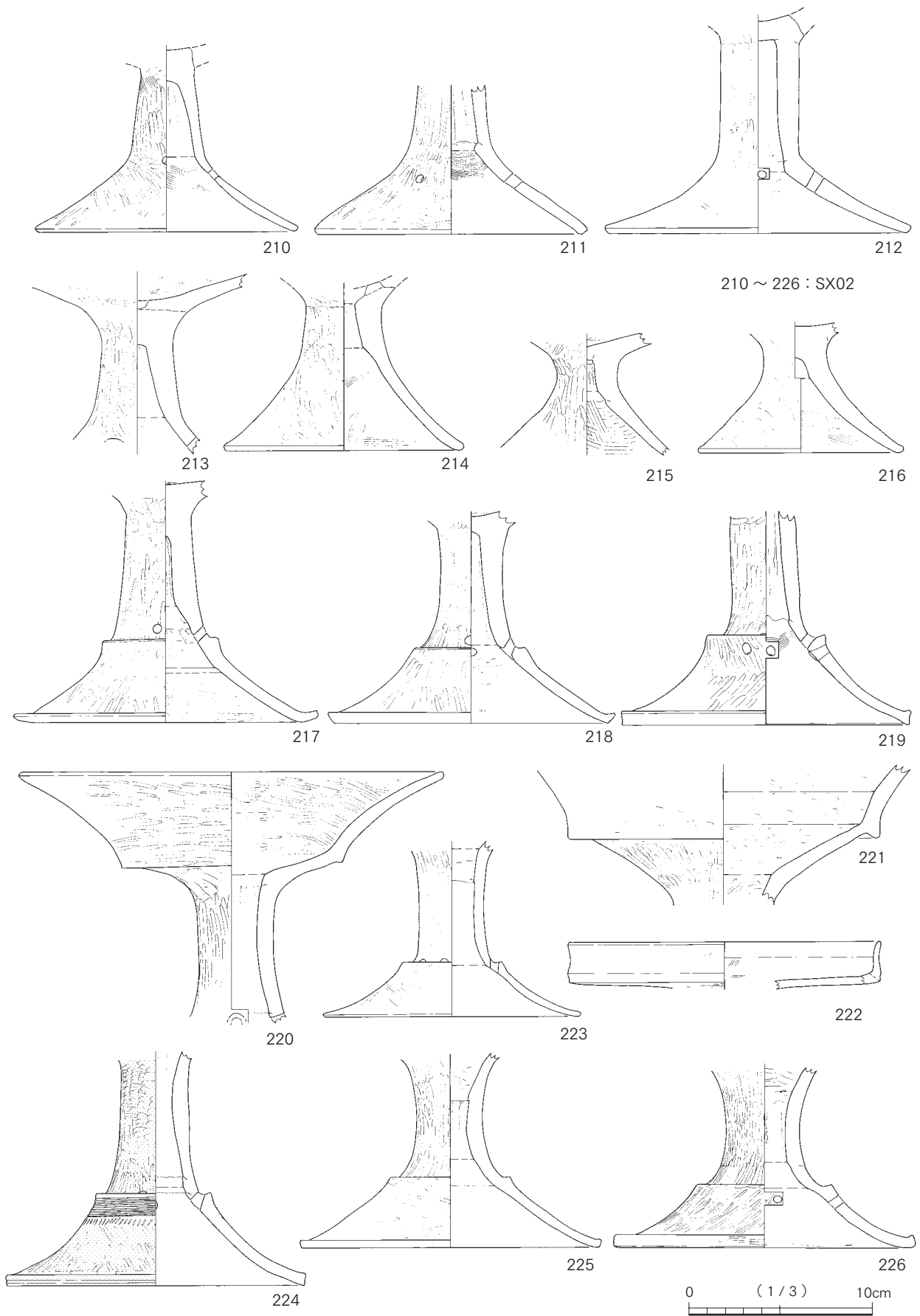
第30図 出土遺物実測図13(S=1/3)



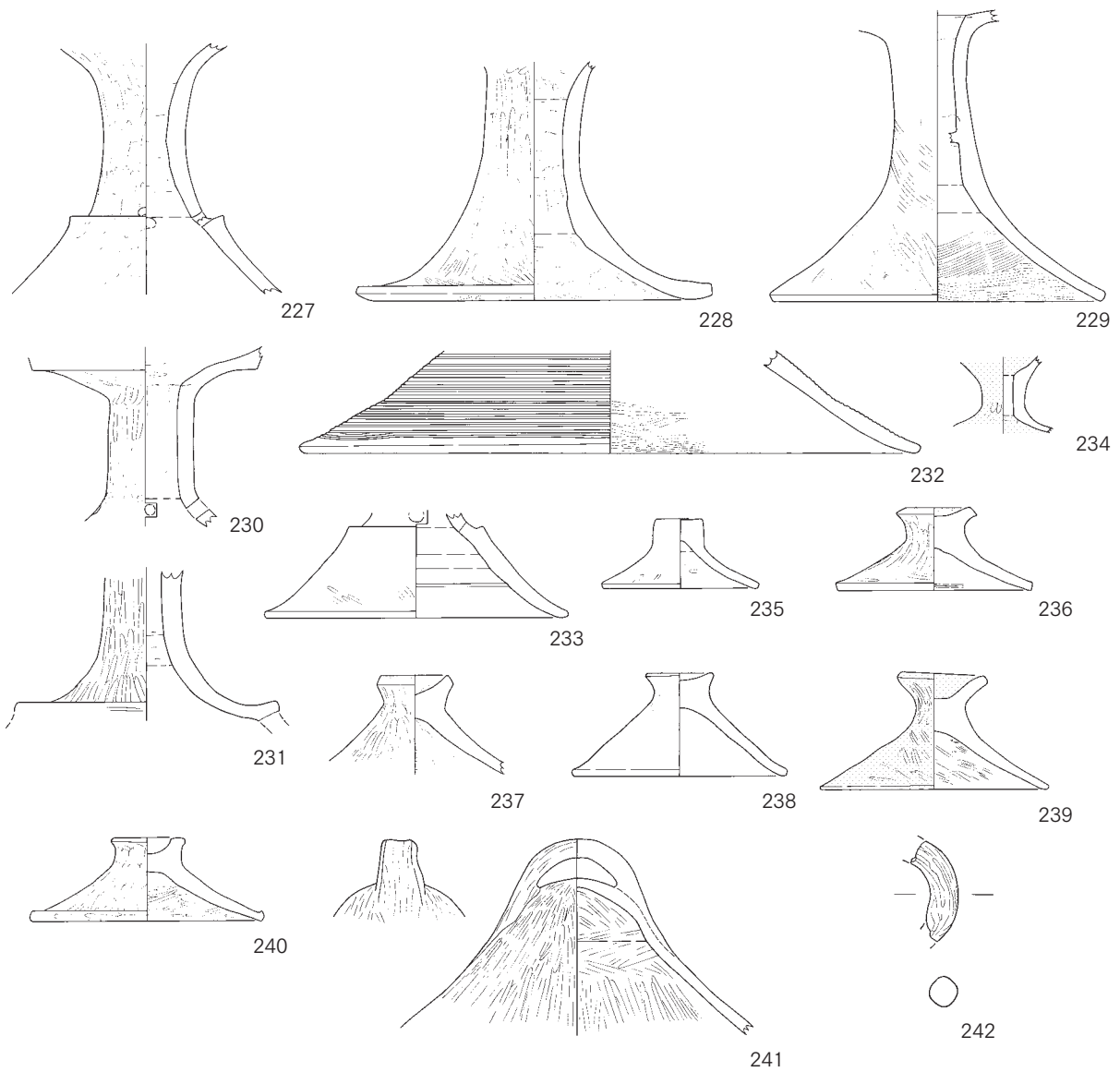
第31図 出土遺物実測図14(S=1/3)



第32図 出土遺物実測図15(S=1/3)



第33図 出土遺物実測図16(S=1/3)



227 ~ 242 : SX02

第34図 出土遺物実測図17(S=1/3)

2. 石 器

石器は、器種別に掲載した。243は石錐。先端より2cm程から基部にかけ、片面に細長く平坦な面がみられる。装着のためのものか。最大長は7.2cmを測る。

244はスクレイパーで、刃部に鋸歯状の部分とそうでない部分が概ね半分ずつを占める。

245は二次加工のある剥片。

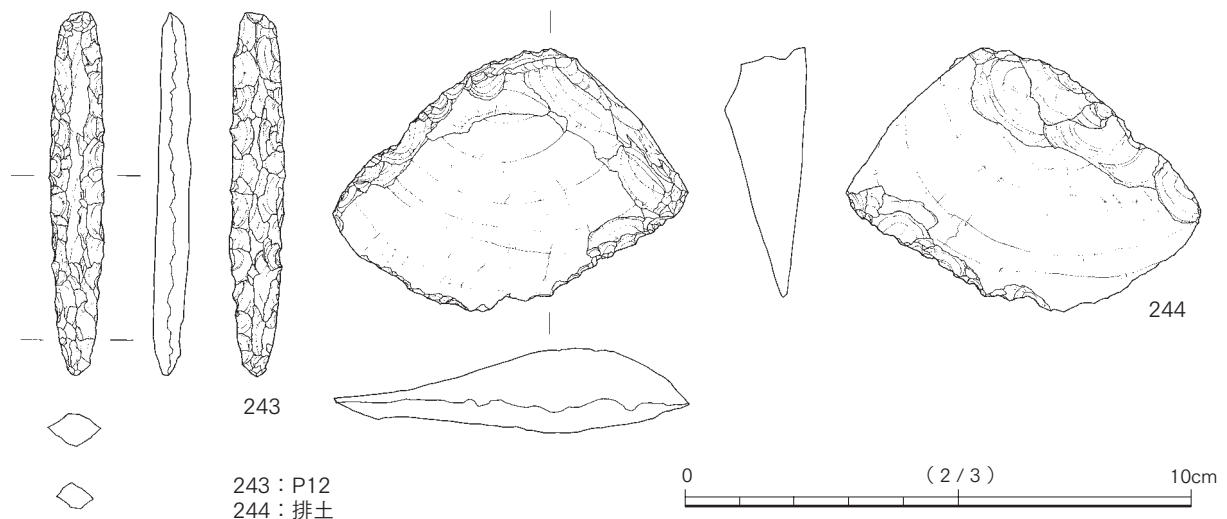
246～251は打製石斧(打製土掘り具)で、246は最大長14.9cmを測る。247～250は基部、251は基部・刃部の両方が欠損している。248は刃部先端に抉れた部分がみられ、249は同部が丸みを帯びる。250は刃部に使用痕とみられる剥離が明瞭に認められる。246～248は一面に自然面が残り、249と251は自然面の占める割合は小さい。246は分銅形、247は短冊形、248～251は撥形を呈する。

252～255は敲石である。敲打痕は252が主面の一面と両側面、253・254が図の上端、255が上下両端にみられる。253は平らな両側面にも敲打痕がみられ、これは側面を平らに作り出すための敲打痕と考えられる。254は火を受けて煤が付着し、割れ面は平らとなっている。252・254・255は磨痕が認められ、磨石としての使用も考慮される。形状は252が丸みを帯びた直方体、253・254が棒状、255が卵形を呈する。

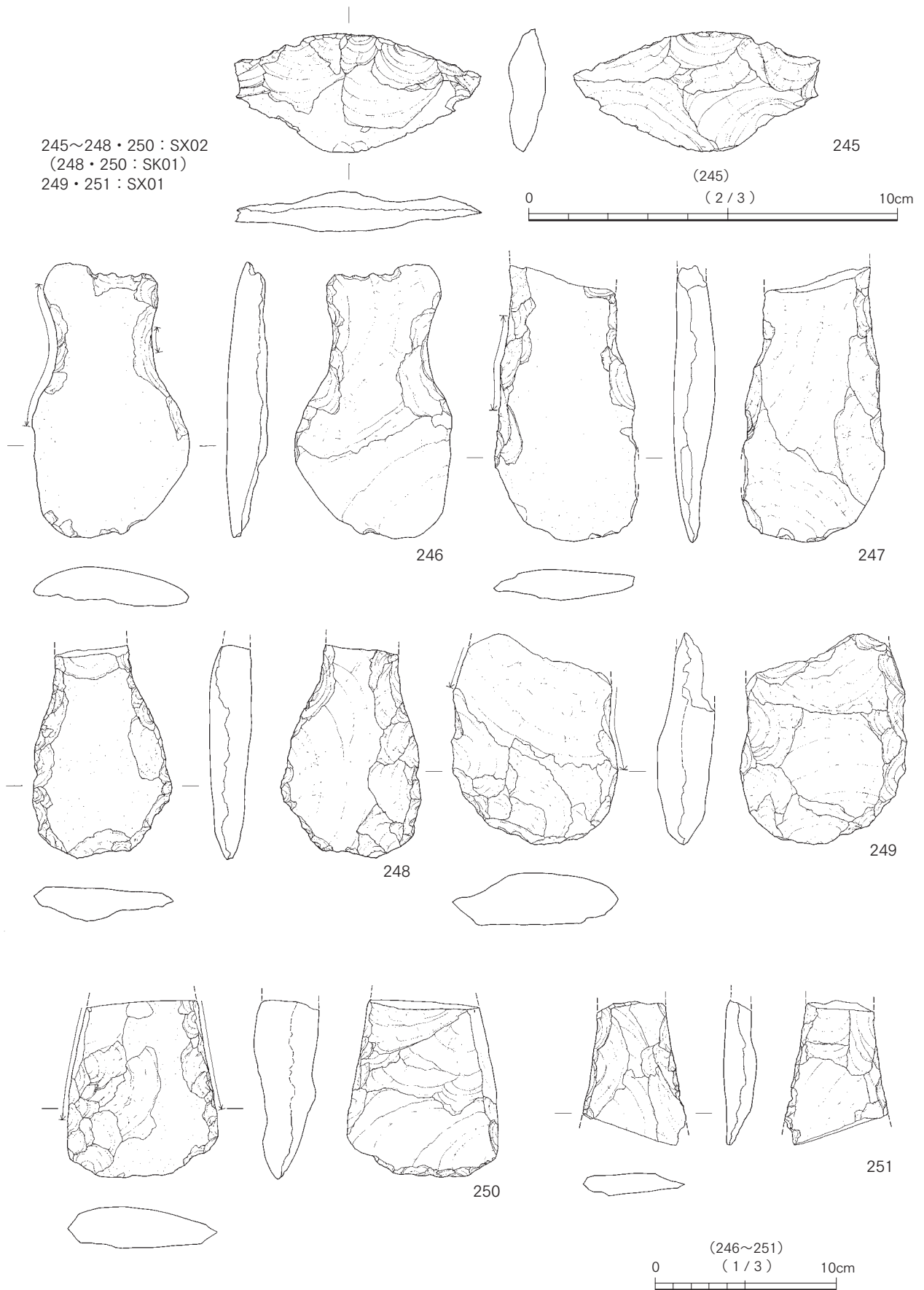
256・257は台石である。256は主面の一面、257は主面の両面に敲打痕がみられる。また前者は敲打痕がみられない面で細長い半円状の非常に平滑な磨面がみられ、後者は欠損部分の端部が磨耗しており、欠損してからも使用されていたと考えられる。

258～261は砥石である。258は概ね平らで滑らかな面に研磨痕がみられる。259は元々は直方体を呈していたような形状で、両面と側面に研磨痕がみられ、主面(研磨痕が多くみられる面)は非常に平滑になっている。260・261は軽石の砥石で、不定形な形状を呈する。研磨痕は260の全面、261でもほぼ全面にみられ、261はそれが明瞭である。

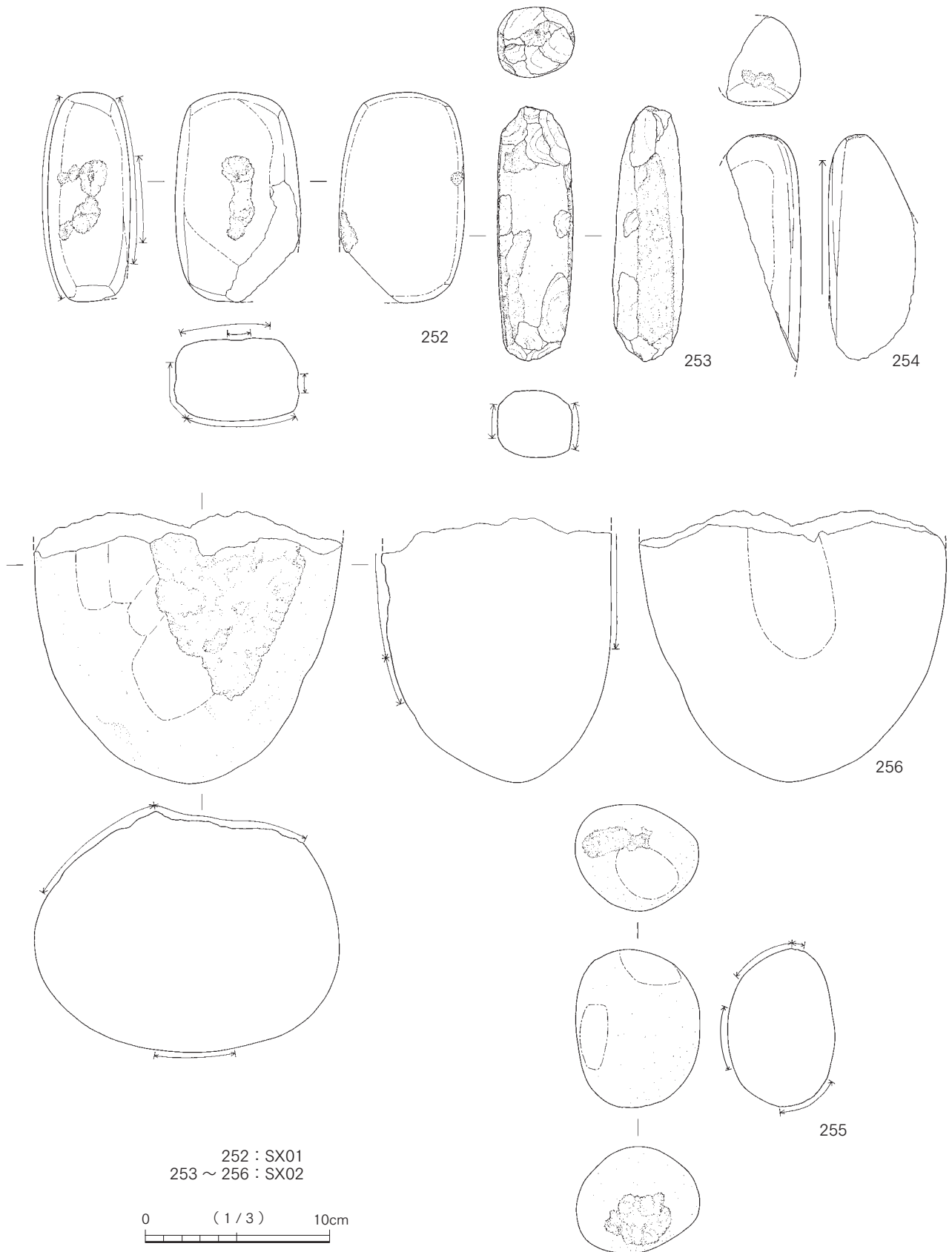
262は行火で、15世紀前半の所産である。前面と側面形は台形を呈するとみられ、前面にやや上向きの口が大きく開き、内部に火室を削り貫き、前面に堤を削りだしたものである(垣内1990)。凝灰岩製で、石材は金沢市南部に産する額谷石と考えられる。



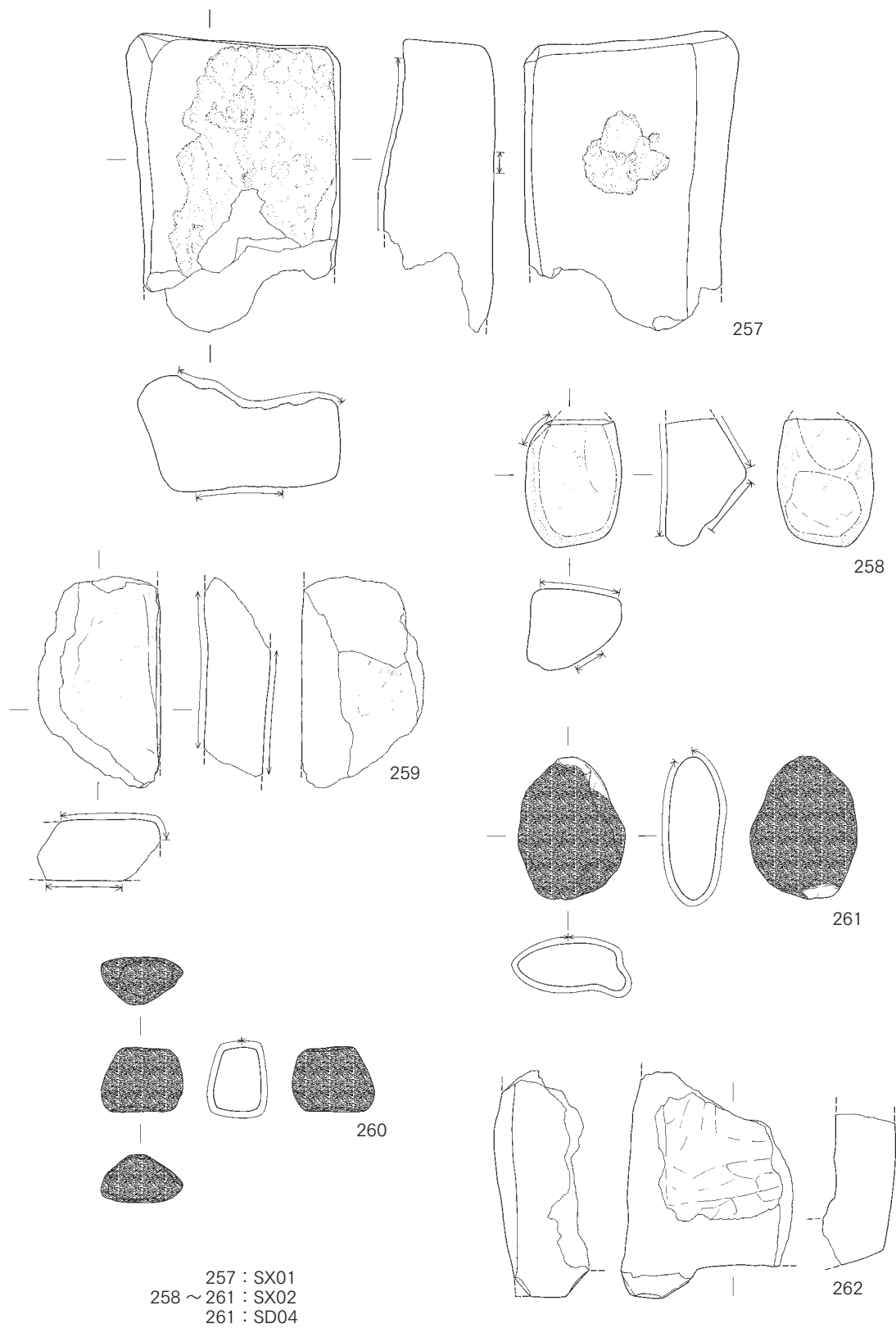
第35図 出土遺物実測図18(S=2/3)



第36図 出土遺物実測図19(S=1/3、2/3)



第37図 出土遺物実測図20(S=1/3)



0 (1/3) 10cm

第38図 出土遺物実測図21(S=1/3)

第2表 出土遺物観察表1

報告 番号	遺構	遺構 詳細	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 (内)	色調 (外)	胎 土	焼成	調整(内)	調整(外)	遺存率	実測 番号	備 考
1	P 7		皿	12.1	—	(2.55)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	粗砂少含	良	ヨコナデ	ヨコナデ	口1/12	D- 4	
2	S I 01	ア	甃	—	—	(3.9)	灰	灰	粗砂並含	良	ロクロナデ、指頭圧 痕	ロクロナデ、タタキ、 ハケ	頸3/12	D- 5	
3	P 14		甃	18.0	—	(5.95)	浅黄～ にぶい 黄橙	にぶい 黄橙 ～ 灰黄褐	礫少、粗砂多、 赤色粒多含	良	ヨコナデ、指頭圧 痕、ハケ後ヨコナ デ、ケズリ	擬凹線8条、ヨコナ デ、ハケ	口2/12	C-211	外面煤付着
4	S D 01		甃	—	—	(9.2)	灰黄	灰	粗砂少含	良	ハケ	ハケ	小片	D- 1	
5	S D 03		蓋	15.6	—	(2.2)	灰	灰	粗砂少含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12	D- 2	降灰有
6	S D 04	D 5 グリット	おろし 皿	14.2	—	(2.9)			緻密、硬い	良			口1/12	D- 3	釉:灰釉、薄く 施釉、ムラ有
7	S D 07 S X 01	イ、ウ	甃	30.8	—	(22.0)	にぶい 黄橙	にぶい 橙	礫並、粗砂多、 赤色粒少含	良	ヨコナデ、ケズリ	擬凹線12条、ヨコナ デ、ハケ	口4/12	C-99	内外面煤付着
8	S D 07		甃	16.7	—	(12.8)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	礫少、粗砂多、 赤色粒少含	良	ヨコナデ、指頭圧 痕、ケズリ	擬凹線9条、ヨコナ デ、ハケ	口縁完	C-11	外面煤付着
9	S D 07 S X 01	エ	甃	17.4	—	(6.7)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	粗砂並、赤色粒 少含	良	ヨコナデ、工具によ るナデ、ハケ	擬凹線4条、ヨコナ デ、ハケ、工具によ るナデ	口2/12	C- 9	外面煤付着
10	S D 07 S X 01	エ	甃	20.2	—	(4.8)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	礫少、粗砂並、 赤色粒少含	良	ヨコナデ、工具によ るナデ、ケズリ	擬凹線5条、ヨコナ デ	口1/12	C- 8	外面煤付着
11	S D 07 S X 01	エ	甃	21.2	—	(5.3)	浅黄橙	浅黄橙	粗砂多、赤色粒 少含	良	ヨコナデ、指頭圧 痕、ハケ、ケズリ	擬凹線9条、ヨコナ デ、ハケ	口1/12	C- 7	
12	S D 07 S X 01	エ	甃	16.2	—	(6.9)	灰黄褐	にぶい 黄橙	礫少、粗砂多、 赤色粒少含	並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口5/12	C-10	外面煤付着
13	S D 07 S X 01	エ	壺	15.6	—	(7.2)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	粗砂多、赤色粒 少含	良	ハケ後ナデ、ハケ、 指頭圧痕、ケズリ か、ミガキ	ミガキ、キザミ1列	頸4/12	C-12	
14	S D 07		鉢	11.0	3.0	4.8	にぶい 黄橙 ～ にぶい 橙	にぶい 黄橙 ～ にぶい 橙	礫並、粗砂並含	良	ミガキ、指頭圧痕	ケズリ後ミガキ	口1/12 底完	C-14	
15	S D 08		甃	17.7?	—	(3.8)	明黄褐 ～ 黄褐	浅黄～ 明黄褐	粗砂並、赤色粒 含	良	ヨコナデ、指頭圧痕	擬凹線11条、ヨコナ デ	口1/12	C-16	外面煤付着
16	S D 08		壺	17.5	—	(4.0)	にぶい 橙	にぶい 黄橙	粗砂多含	良	ハケ、ケズリ	ハケ後ヨコナデ、キ ザミ1列、ヨコナデ	頸1/12	C-15	
17	S X 01	ウ	深鉢	—	—	(2.7)	灰黄	暗灰黄	礫少、粗砂並含	良	ナデ	渦巻状文様か	小片	D- 9	
18	S X 01	イ	深鉢	—	—	(5.8)	灰	灰黄褐	礫並、粗砂並、 赤色粒少含	良	ナデ	縄文	小片	D- 8	外面煤付着
19	S X 01	ウ-砂層	深鉢	—	—	(5.0)	灰黄	灰黄～ 灰	礫多、粗砂並、 赤色粒少含	並か	摩耗の為調整不明	条痕	小片	D-10	
20	S X 01 S X 02	ウ	深鉢	—	8.0	(1.8)	浅黄	にぶい 黄橙	礫少、粗砂少含	良	ナデ	ナデ、底部網状圧痕	底4/12	D- 6	
21	S X 01	エ	甃	16.0	—	(8.6)	浅黄橙	浅黄橙	礫多、粗砂並、 赤色粒少含	良	ヨコナデ、指頭圧痕、 ハケ、ケズリ後ナデ	擬凹線8条、ヨコナ デ、ハケ	口3/12	C-232	外面煤付着
22	S X 01	ア	甃	20.0	—	(21.4)	灰黄～ にぶい 黄橙	にぶい 黄～ にぶい 橙	礫少、粗砂多、 赤色粒並含	良	ヨコナデ、ケズリ	擬凹線9～10条、ヨ コナデ、ハケ	口7/12	C-98	内外面煤付着
23	S X 01	イ	甃	30.8	—	(8.8)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	粗砂並含	良	ヨコナデ、指頭圧 痕、ハケ、ケズリ	擬凹線5条、ヨコナ デ、ハケ	口1/12	C-116	
24	S X 01	イ	甃	32.4	—	(8.4)	黒褐	黒褐	粗砂少含	良	ヨコナデ、ハケ、ミ ガキ	ヨコナデ、擬凹線8 条、ミガキ	口1/12	C-187	
25	S X 01	ウ	甃	15.0	—	(10.7)	にぶい 褐	にぶい 黄褐	礫少、粗砂多含	良	ヨコナデ、ハケ、ケ ズリ	擬凹線7条、ヨコナ デ、ハケ	口5/12	C-103	外面煤付着
26	S X 01	エ	小型甃	9.8	1.7	8.5	にぶい 黄橙	浅黄橙	礫並、粗砂多、 赤色粒少含	良	ヨコナデ、ケズリ	擬凹線6条、ヨコナ デ、ハケ、ナデ	口8/12 底完	C-93	外面煤付着
27	S X 01	イ	甃	16.0	—	(11.2)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	礫少、粗砂多含	良	ヨコナデ、指頭圧 痕、ハケ、ケズリ	擬凹線7条、ヨコナ デ、ハケ	口3/12	C-217	外面煤付着
28	S X 01	イ	甃	16.8	2.4	(13.4) (8.4)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙～ 灰黄褐	粗砂多、赤色粒 含	良	ヨコナデ、指頭圧 痕、ハケ、ケズリ	擬凹線8条、ヨコナ デ、ハケ、ナデ、工 具によるナデ	口10/12 底5/12	C-106	内面炭化物付 着か、外面煤付 着
29	S X 01	イ	甃	21.9	—	(15.2)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	礫少、粗砂多含	良	ヨコナデ、指頭圧 痕、ハケ、ケズリ	擬凹線8条、ヨコナ デ、ハケ	口3/12	C-160	内面炭化物・外 面煤付着
30	S X 01	ア	甃	28.5	—	(10.7)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	粗砂並、赤色粒 少含	良	ヨコナデ、指頭圧 痕、ハケ、ケズリ	擬凹線12条、ヨコナ デ、ハケ	口5/12	C-101	外面煤付着
31	S X 01	ア	甃	19.8	—	(22.9)	にぶい 黄橙	褐灰	礫少、粗砂並、 赤色粒少含	良	ヨコナデ、ナデ、ケ ズリ	擬凹線9条、擬凹線 後ナデ、ヨコナデ、 ハケ	9/12	C-74	外面煤付着
32	S X 01	イ	甃	17.4	—	(10.7)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	粗砂多、赤色粒 含	良	ヨコナデ、ケズリ後 ハケ	ヨコナデ、ハケ	口9/12	C-105	外面煤付着
33	S X 01	イ	甃	15.1	—	(5.8)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	粗砂並含	良	ヨコナデ、ハケ後ヨ コナデ、ケズリ	ケズリ後ハケ後ヨ コナデ、ヨコナデ、 ハケ	口5/12	C-115	
34	S X 01	ウ	甃	13.7	—	(8.5)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	礫少、粗砂多含	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口2/12	C-22	外面煤付着

第3表 出土遺物観察表2

報告番号	遺構	遺構詳細	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 (内)	色調 (外)	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	遺存率	実測番号	備考
35	S X01 S X02	ウ	甃	16.0	—	(10.2)	にぶい 橙	灰黄褐	礫多、粗砂多含	良	ヨコナデ、工具によるヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、工具によるヨコナデ、ハケ	口2/12	C-113	外面煤付着
36	S X01	ウ-畦 (セク-ノ)	甃	18.6	—	(7.8)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙～ にぶい 黄褐	粗砂並含	良	ヨコナデ、指頭圧痕、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口2/12	C-110	外面煤付着
37	S X01	エ	甃	16.2	—	(2.6)	にぶい 黄橙	黄灰	粗砂並含	良	ヨコナデ	ヨコナデ	口1/12	C-111	外面煤付着
38	S X01 S X02	1-ウ 2-イ、ウ	台付壺	14.5	11.5	29.0	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	礫少、粗砂多、 赤色粒少含	良	ミガキ、ケズリ後ミガキ、ナデ、ヨコナデ後ミガキ	ミガキ、ナデ	口7/12 底10/12	C-24	
39	S X01 S X02	ア ウ	台付壺	—	8.9	(14.6)	にぶい 黄橙 黄灰	にぶい 黄橙	礫少、粗砂少、 赤色粒少含	良	ミガキ、ハケ状工具によるヨコナデ、ナデ、ハケ、ケズリ後ミガキ	ミガキ	底9/12	C-150	
40	S X01	ア	壺	10.2	—	(5.5)	にぶい 黄橙	灰白～ にぶい 黄橙	粗砂多、赤色粒 少含	良	ミガキ	ミガキ	口5/12	C-142	
41	S X01	エ	壺	—	2.3	(8.9)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	礫並、粗砂並含	良	ミガキ	ミガキ、ケズリ後ミガキ	底1/12 胴6/12	C-208	
42	S X01	ウ	壺	—	3.2	(7.9)	灰	浅黄	礫少、粗砂多、 赤色粒並含	良	ケズリ	ミガキ、ケズリ後ミガキ	底完	C-143	
43	S X01	イ	壺	—	—	(10.2)	にぶい 橙	にぶい 黄橙	粗砂多、赤色粒 少含	良	ハケ、ミガキ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ後ミガキ	頸3/12	C-167	外面煤付着
44	S X01	イ、ウ	壺	17.0	—	(11.7)	にぶい 黄橙	灰黄	礫少、粗砂並含	良	ミガキ、ケズリ	ヨコナデ、ミガキ、 キザミ3列	口5/12	C-20	
45	S X01	ア	壺	25.6	—	(14.1)	にぶい 褐	浅黄橙	礫少、粗砂並含	良	ヨコナデ後ナデか、 ケズリ	擬凹線11条、ヨコナ デ、ハケ	口2/12	C-135	内面煤付着、外面 煤付着か
46	S X01	イ	壺	13.0	2.2	(22.0)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	礫少、粗砂多、 赤色粒少含	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ、工 具によるナデ	口小片 底完	C-188	外面煤付着・黒 斑有、ゆがみ有
47	S X01	イ、ウ	壺	13.25	6.2	19.1	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	粗砂並、赤色粒 少含	良	ミガキ、ケズリ後ミガキ	ミガキ後擬凹線12 条、キザミ1列、ミ ガキ	口11/12 底1/12	C-17	
48	S X01 S X02	ウ	鉢	13.0	—	(5.1)	浅黄	にぶい 黄橙	粗砂並含	良	ミガキ、ケズリ	ミガキ	口4/12	C-145	内外面赤彩、外面 黒斑有
49	S X01	イ、ウ	鉢	11.4	—	(6.5)	橙	にぶい 橙	礫少、粗砂並、 赤色粒少含	並	ミガキ	ミガキ	口2/12	C-189	
50	S X01	ア、 ア-畦 (セク-ヌ)	台付鉢	—	9.8	7.9	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙～ にぶい 橙	礫少、粗砂多、 赤色粒少含	良	ケズリ後ミガキ、ハ ケ後ミガキ、ヨコナ デ、ハケ後ナデ	ミガキ、ヨコナデ	底完	C-1	内外面赤彩
51	S X01	ウ	台付鉢	12.1	8.2	7.8	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	礫並、粗砂並、 赤色粒少含	良	ヘラ状工具による ナデ、ナデ、ハケ	ハケ後ミガキ、ナ デ、ハケ	6/12	C-21	
52	S X01 S X02	ウ	台付鉢	「10.2」	「5.4」	9.25	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	礫少、粗砂並含	良	ナデ、	ナデ、指頭圧痕、ハ ケか	口6/12 底7/12	C-78	全体にゆがみ 有
53	S X01	イ	鉢	8.2	—	(3.1)	にぶい 橙	灰黄褐	粗砂並含	良	ケズリ後ミガキ	ナデ、ヨコナデ、ミ ガキ	口2/12 底2/12	C-198	
54	S X01	ア-畦 (セク-ネ)	底部	—	3.7	(3.4)	淡黄	淡黄	礫少、粗砂多含	良	磨耗の為調整不明	磨耗の為調整不明	底完	C-201	外面黒斑有
55	S X01	イ	底部	—	2.1	(6.8)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	粗砂並、赤色粒 少、海面骨針少含	良	ケズリ、指頭圧痕	ハケ	底完	C-148	外面黒斑有
56	S X01	ウ	底部	—	7.5	(4.2)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	礫少、粗砂多、 赤色粒少含	良	ケズリ	ハケ、ナデ	底完	C-155	外面煤付着
57	S X01	エ	底部	—	7.4	(3.2)	浅黄橙	にぶい 黄橙	粗砂並含	良	ミガキ	ミガキ	底4/12	C-206	
58	S X01	ウ	底部	—	4.7	(3.45)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	粗砂並、赤色粒 少含	良	磨耗の為調整不明	ヨコナデ、凹線3 条、ナデ	底8/12	C-199	外面煤付着
59	S X01	ア	高坏	—	裾部 14.8	(16.8)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	粗砂少含	良	ミガキ、ナデ、ヨコ ナデ	ミガキ、ヨコナデ	裾5/12	C-13	ゆがみ有、透かし 孔2個1組 3カ所有
60	S X01	ア、イ	高坏	26.6	—	(16.2)	にぶい 橙	にぶい 橙	礫少、粗砂並含	良	ケズリ後ミガキ、シ ボリ目、ハケ後ナデ	ケズリ後ハケ後ミ ガキ	口2/12	C-89	
61	S X01	ア	高坏	24.4	裾部 12.4	16.0	にぶい 橙	にぶい 黄橙	粗砂並含	良	ケズリ後ミガキ、シ ボリ目後ケズリ、ナ デ、ミガキ、ヨコナ デ	ケズリ後ミガキ、ミ ガキ、ハケ後ミガキ	口2/12 裾1/12	C-28	内面黒斑有、透かし 孔2個1 組3カ所有
62	S X01	ア	高坏	24.2	裾部 (13.9)	17.05	にぶい 橙	にぶい 橙	粗砂並含	良	ミガキ、シボリ目、 ヨコナデ	ミガキ、ハケ後ミガ キ	口7/12 裾3/12	C-29	外面煤付着、透かし 孔2個1 組3カ所有
63	S X01	イ	高坏	24.9	—	(5.3)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	礫少、粗砂多、 赤色粒多含	良	ミガキ	ミガキ	口4/12	C-128	外面黒斑有
64	S X01	ウ	高坏	25.4	—	(6.5)	にぶい 黄橙	浅黄橙	礫並、粗砂並、 赤色粒少含	良	ミガキ、ヨコナデ	ケズリ後ミガキ、ヨ コナデ、ミガキ	口2/12	C-192	外面黒斑有
65	S X01	イ	高坏	21.6	—	(7.5)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙～ 褐灰	粗砂少含	良	ケズリ後ミガキ	ミガキ	口1/12	C-6	外面煤付着か
66	S X01	ア	高坏	24.6	—	(10.3)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	粗砂並含	良	ケズリ後ミガキ	ミガキ、凹線3条、 キザミ5列、ケズリ 後ミガキ	口縁 2/12	C-27	

第4表 出土遺物観察表3

報告番号	遺構	遺構詳細	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 (内)	色調 (外)	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	遺存率	実測番号	備考
67	S X01	イ	高坏	-	裾部 15.4	(16.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並含	良	ミガキ、シボリ目、ナデ、ハケ、ヨコナデ	ミガキ	裾4/12	C-5	
68	S X01	イ-No.1	脚部	-	裾部 12.2	(4.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並、赤色粒少含	良	ヨコナデ	ミガキ、擬凹線4条、ヨコナデ	裾10/12	C-195	透かし孔4カ所有
69	S X01	イ	器台	17.4	裾部 14.0	13.75	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂並、赤色粒少含	良	ミガキ、ケズリ、ハケ後ヨコナデ	ミガキ、ケズリ後ミガキ、ヨコナデ	口10/12底7/12	C-19	透かし孔2個1組3カ所有
70	S X01	ア	器台	22.8	裾部 14.0	15.7	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並、赤色粒並含	良	ミガキ、ケズリ、ナデ	ケズリ後ミガキ、キザミ3列、凹線2条	口7/12裾9/12	C-30	内外面煤付着、透かし孔2個1組3カ所有
71	S X01	イ	器台	19.0	-	(2.4)	黒褐	黒	粗砂少含	良	ミガキ	ミガキ	口1/12	C-4	
72	S X01	エ	器台	26.6	-	(7.85)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂並含	良	ハケ後ミガキ、ケズリ後ミガキ、ミガキ	ケズリ後ミガキ	口1/12	C-25	
73	S X01	イ-No.4、ウ、ウ-畦(セク-ノ)	装飾器台	21.2	-	(8.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並含	良	ミガキ	ミガキ	口2/12	C-94	
74	S X01	ア-畦(セク-ネ)	装飾器台	-	-	(2.6)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂少、赤色粒少含	良	ミガキ	ミガキ、指頭圧痕	小片	C-173	透かし孔12~13カ所有
75	S X01	ア-畦(セク-ヌ)	装飾器台	21.8	-	(4.1)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂少、赤色粒少含	良	ミガキ、指頭圧痕	ミガキ	小片	C-2	
76	S X01	ウ-畦(セク-ノ)	器台	-	裾部 14.2	(10.2)	浅黄	浅黄	礫並、粗砂並、赤色粒並含	良	ミガキ、シボリ目、ヨコナデ	ミガキ	底2/12	C-227	透かし孔4カ所有
77	S X01	イ	器台	-	裾部 14.2	(9.35)	灰黄褐	にぶい黄橙	粗砂並、赤色粒並含	良	ケズリ後ミガキ、ケズリ、ナデ、ミガキ	ハケ後ミガキ、キザミ4列、凹線4条、ミガキ、ヨコナデか	裾1/12	C-18	透かし孔2個1組3カ所有
78	S X01	ウ	器台	-	-	(10.2)	灰黄	浅黄	粗砂少、赤色粒含	良	ヨコナデ、シボリ目、ナデ、ハケ	ミガキ	脚完	C-88	透かし孔4カ所
79	S X01	イ	器台	-	裾部 11.3	(7.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並、赤色粒含	良	ナデ、ミガキ	ミガキ、ナデ	裾完	C-90	裾肩部9割面取り
80	S X01	ア-畦(セク-ヌ)	蓋	1.85	6.6	3.6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂少、赤色粒少含	良	ナデ、ミガキ	ハケ後ミガキ	ほぼ完形	C-3	
81	S X01	ウ	蓋	摘み 3.0	10.0	4.15	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並、赤色粒少含	良	ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ	完形	C-23	
82	S X01	ア-畦(セク-ヌ)	蓋	9.6	2.6	3.75	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並含	良	ナデ	ナデ、ケズリ、ミガキ、工具によるヨコナデ	口完底11/12	C-26	
83	S X02	ウ	深鉢	-	-	(3.4)	にぶい黄橙	灰黄褐	粗砂少含	良	ナデ	「j」状の渦巻き文様か	小片	D-7	
84	S X02	ウ-S K01他	甃	16.3	3.0	19.65	にぶい黄	にぶい黄橙~褐灰	礫少、粗砂並含	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、擬凹線4条、列点文、ハケ、粗いナデ	口10/12底完	C-34	外面煤付着
85	S X02	ウ-S K01ウ	甃	17.2	-	(7.6)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂多、赤色粒並含	良	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口縁6/12	C-32	
86	S X02	ウ-S K01	壺	-	-	(8.1)	にぶい黄橙	橙~にぶい黄橙	礫多、粗砂並、赤色粒少含	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ後ヨコナデ、キザミ1列	頸11/12	C-33	
87	S X02	ウ-S K01他	底部	-	6.4	(10.0)	にぶい黄橙~灰	浅黄~黄褐	礫多、粗砂多、赤色粒少含	良	ケズリ	ハケ、ハケ状工具によるナデ	底7/12	C-31	内面黒斑有、外面煤付着
88	S X02	ウ-S K01	高坏	-	裾部 12.8	(9.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂少含	良	ミガキ、シボリ目、ナデ、ハケ、工具によるヨコナデ	ハケ後ミガキ	裾9/12	C-122	外面黒斑有
89	S X02	ウ-S K01	器台	-	-	(6.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂少含	良	ケズリ	ミガキ	脚完	C-209	
90	S X02	ウ-土器溜りNo.5他	甃	17.4	-	(12.7)	浅黄	浅黄~にぶい黄	礫多、粗砂多、赤色粒少含	良	ケズリ、指頭圧痕、ヨコナデ	擬凹線5条、ヨコナデ、ハケ	口完	C-37	外面煤付着
91	S X02	ウ-土器溜りNo.6	甃	24.9	-	(7.6)	浅黄	浅黄	粗砂多、赤色粒少含	良	ヨコナデ、指頭圧痕、ハケ後ヨコナデ、ケズリ	擬凹線8条、ヨコナデ、ハケ	口1/12	C-35	外面煤付着
92	S X02	ウ-土器溜りNo.1	甃	21.6	-	(6.7)	明黄褐~にぶい黄褐	浅黄橙	粗砂多、赤色粒少含	良	ヨコナデ、指頭圧痕、ハケ、ケズリ	擬凹線9条、ヨコナデ、ハケ	口1/12	C-114	
93	S X02	ウ-土器溜りNo.1	甃	20.2	-	(6.2)	浅黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂並、赤色粒多含	良	ヨコナデ、指東圧痕、ハケ、ケズリ	擬凹線8条後ヨコナデ、ヨコナデ、ハケ	口3/12	C-38	外面煤付着
94	S X02	ウ-土器溜りNo.5	壺	-	-	(10.5)	にぶい黄橙~黒	浅黄~にぶい黄橙	礫多、粗砂並、赤色粒少含	良	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	頸5/12	C-36	内面黒斑有、頸部に「V」字5連続で刻まれている
95	S X02	ウ-土器溜りNo.3他	壺	15.3	-	(16.6)	灰黄	浅黄~灰黄	礫多、粗砂多、赤色粒少含	良	ハケ、ナデ、ケズリ	ハケ	口1/12頸8/12	C-50	外面煤付着

第5表 出土遺物観察表4

報告番号	遺構	遺構詳細	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 (内)	色調 (外)	胎土	焼成	調整 (内)	調整 (外)	遺存率	実測番号	備考
96	S X02	ウ-土器溜り他	壺	20.2	-	(26.6)	にぶい黄橙~灰	淡黄	礫少、粗砂多、赤色粒少含	良	ヨコナデ、ケズリ後ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口3/12	C-73	外面黒斑有
97	S X02	ウ-土器溜りNo.6他	底部	-	3.9	(4.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂多含	良	ケズリ	ハケ	底完	C-205	外面煤付着
98	S X02	エ-暗褐色粘質土他	甕	12.3	-	(5.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂並含	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ケズリ後ハケ	口8/12	C-95	
99	S X02	エ-暗褐色粘質土他	壺	12.7	-	(8.1)	浅黄橙~にぶい黄橙	浅黄橙	礫少、粗砂並、細砂多含	良	ナデ、ケズリ	ナデ、工具によるハケ	口3/12	C-166	外面黒斑有
100	S X02	エ-暗褐色粘質土他	壺	-	3.0	(8.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂並含	良	ミガキ、ケズリ後ミガキ	ミガキ	底完	C-182	外面煤付着・赤彩
101	S X02	エ-暗褐色粘質土他	壺	17.5	-	(20.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂多含	良	ヨコナデ、ケズリ後ハケ後ヨコナデ、シボリ目、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口9/12	C-164	口縁端部15カ所・口縁内部16カ所・口縁外面17カ所円形スタンプ文有り
102	S X02	エ-暗褐色粘質土	小型壺	-	2.0	(4.6)	にぶい黄橙	橙~明褐灰	礫多、粗砂並含	良	ミガキ、ナデ、指頭圧痕	ミガキ、ケズリ、ナデ	頸~底完	C-144	内外面赤彩、外面煤付着
103	S X02	エ-暗褐色粘質土	高坏	-	-	(5.85)	にぶい黄橙	にぶい黄褐	粗砂並含	良	ナデ、シボリ目後ナデ	ハケ後ミガキ	脚完	C-230	外面へラ状工具痕有
104	S X02	ウ-畦(セク-フ)	甕	15.2	-	(8.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並含	良	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	擬凹線6条、ヨコナデ、列点文、ハケ	口4/12	C-213	外面煤付着
105	S X02	ウ	甕	12.8	-	(6.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫多、粗砂並、赤色粒少含	良	ヨコナデ、ハケ後ナデ、ケズリ	擬凹線9条、ヨコナデ、波条文	口2/12	C-119	外面煤付着
106	S X02	イ	甕	13.0	-	(8.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫並、粗砂並、ガラス質のもの多含	良	ヨコナデ、ケズリ	擬凹線10~11条、ヨコナデ、工具痕、ハケ	口3/12	C-49	外面煤付着
107	S X02	ウ	小型甕	9.8	3.5	8.5	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂多、赤色粒少含	良	ヨコナデ、ケズリ後ナデ、指頭圧痕	擬凹線7条、ヨコナデ、ハケ、ケズリ、工具によるナデ	口5/12底完	C-71	内外面煤付着、外面口縁部縦に2本の線2組有
108	S X02	ウ	甕	15.7	2.8		浅黄橙	灰白	礫多、粗砂少、赤色粒少含	良	ヨコナデ、ハケ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、擬凹線5~6条、ハケ	口3/12	C-219	
109	S X02	(ア)トレンチ砂層	甕	12.4	-	(9.8)	浅黄	浅黄	礫少、粗砂並、赤色粒少含	良	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	擬凹線5条、ヨコナデ、ハケ	口1/12	C-45	内面煤付着か、外面煤付着
110	S X02	ウ	甕	16.8	-	(10.2)	にぶい黄	浅黄	礫並、粗砂並、赤色粒少含	良	ヨコナデ、指頭圧痕、ハケ、ケズリ	擬凹線8条、指頭圧痕、ヨコナデ、ハケ	口3/12	C-215	外面煤付着
111	S X02	ウ	甕	18.4	-	(10.7)	淡黄	にぶい黄橙	礫少、粗砂多、赤色粒少含	良	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ、擬凹線7条、ハケ	口1/12	C-220	外面煤付着
112	S X02	イ	甕	34.0	-	(10.7)	浅黄	にぶい黄橙~灰黄	礫少、粗砂多、赤色粒少含	良	ヨコナデ、ケズリ	擬凹線8条、ヨコナデ、ハケ	口1/12	C-161	外面煤付着
113	S X02	ウ	甕	20.0	-	(11.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並含	良	ヨコナデ、指頭圧痕、ケズリ	擬凹線7条、ヨコナデ、ハケ	口2/12	C-221	
114	S X02	イ	甕	15.7	-	(10.9)	浅黄	浅黄	礫少、粗砂並含	良	ヨコナデ、指頭圧痕、ケズリ後ハケ	擬凹線7条、ヨコナデ、ハケ	口3/12	C-102	外面煤付着
115	S X02	イ、イ-Pit	甕	17.4	-	(7.1)	にぶい黄橙	浅黄	粗砂並、赤色粒少含	良	ヨコナデ、指頭圧痕、ケズリ	擬凹線7条、ヨコナデ、ハケ	口4/12	C-121	外面煤付着
116	S X02	イ	甕	17.8	-	(8.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫並、粗砂多含	良	ヨコナデ、指頭圧痕、ケズリ	擬凹線9条、ヨコナデ、ハケ	口3/12	C-109	外面煤付着
117	S X02	ウ	甕	15.0	-	(18.6)	にぶい黄橙	浅黄橙	礫少、粗砂並含	良	ヨコナデ、指頭圧痕、ケズリ後ナデか	擬凹線6条、ヨコナデ、ハケ	口6/12	C-97	内面炭化物・外面煤付着
118	S X01	イ	小型甕	10.4	-	(6.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂並含	良	ヨコナデ、指頭圧痕、ケズリ	凹線3条、ヨコナデ、ハケ	口1/12	C-204	外面煤付着
119	S X02	イ	小型甕	12.0	-	(6.5)	淡黄	淡黄	礫少、粗砂多含	良	ナデ、指頭圧痕、ケズリ	擬凹線(3条残存)、ナデ、ハケ	口2/12	C-55	
120	S X02	イ、ウ	有孔甕	18.8	2.7	16.4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂多含	良	ヨコナデ、指頭圧痕、ハケ、ケズリ	擬凹線10条、ヨコナデ、ハケ、ケズリか	口5/12底完	C-92	
121	S X02	イ	甕	18.0	-	(9.2)	灰黄	灰黄	礫少、粗砂並、赤色粒少含	良	ヨコナデ、指頭圧痕、ハケ、ケズリ	擬凹線9条、ヨコナデ、ハケ	口完	C-104	外面黒斑有
122	S X02	イ	甕	19.0	2.4	(8.6)(9.6)	にぶい黄橙	にぶい黄橙褐灰	礫少、粗砂多、赤色粒少含	良	ヨコナデ、指頭圧痕、ハケ、ケズリ	擬凹線8条、ヨコナデ、ハケ	口2/12底完	C-53	外面煤・炭化物付着
123	S X02	イ	甕	15.5	-	(7.5)	にぶい黄橙	浅黄橙	礫少、粗砂多、赤色粒少含	良	ヨコナデ、指頭圧痕、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、擬凹線3条、ハケ	口4/12	C-216	外面煤付着か
124	S X02	ウ	甕	32.2	-	(11.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂多、赤色粒少含	良	ヨコナデ、指頭圧痕、ミガキ、ケズリ	擬凹線8条、ヨコナデ、ハケ	口3/12	C-96	
125	S X02	イ	甕	12.2	-	(8.15)	灰黄	灰黄~暗灰黄	粗砂少、赤色粒含	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	口1/12	C-137	口縁部ゆがみ有
126	S X02	ウ	甕	19.4	-	(6.5)	浅黄	浅黄	礫少、粗砂並、赤色粒並含	良	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口完	C-214	外面煤付着
127	S X02	イ	甕	15.4	-	(6.6)	浅黄橙	淡橙	礫少、粗砂並含	良	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口2/12	C-52	外面煤付着・黒斑有

第6表 出土遺物観察表5

報告番号	遺構	遺構詳細	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 (内)	色調 (外)	胎土	焼成	調整 (内)	調整 (外)	遺存率	実測番号	備考
128	S X 02	ア	甃	15.2	—	(9.3)	にぶい黄橙	浅黄橙	礫少、粗砂多、赤色粒少含	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口2/12	C-100	
129	S X 02	イ、ウ	甃	「17.0」	—	(4.1)	浅黄	浅黄	礫少、粗砂並、赤色粒少含	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	口3/12	C-170	
130	S X 02	イ	甃	19.3	—	(15.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫多、粗砂多、赤色粒多含	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ、ハケ	口1/12	C-112	外面煤付着
131	S X 02	ウ	甃	12.0	—	(7.8)	にぶい黄橙	浅黄	礫少、粗砂並、赤色粒少含	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ後ナデ	口6/12	C-117	外面煤付着
132	S X 02	ウ	甃	20.0	—	(5.0)	灰黄褐	灰黄褐	礫少、粗砂並含	良	ヨコナデ、ケズリ後ナデ	ヨコナデ、ハケ後ヨコナデ、ハケ	口1/12	C-163	
133	S X 02	イ	甃?	10.6	—	(6.9)	にぶい黄橙～にぶい褐	にぶい黄橙～にぶい褐	粗砂多含	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口1/12	C-138	外面黒斑有
134	S X 02	イ	小型甃?	9.2	—	(5.2)	にぶい黄橙	にぶい橙	粗砂少含	良	ミガキ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	口3/12	C-210	内外面煤付着
135	S X 02	イ	台付壺	—	—	(20.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並、赤色粒少含	良	ミガキ、ナデ、指頭圧痕、ヨコナデ、工具による強いナデ、ハケ、シボリ目	ミガキ、突帯	胴4/12	C-140	外面煤付着か、外面黒斑有、透かし孔4カ所有
136	S X 02	(イ)トレンチ	台付壺	—	—	(6.3)	黄灰	黄灰	粗砂並含	良	ケズリ後ミガキ、ナデ	ケズリ後ミガキ		C-46	
137	S X 02	ウ	台付壺	9.8	—	(9.6)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂並含	良	ヨコナデ、ナデ、ハケ	ミガキ	口4/12	C-84	
138	S X 02	ウ	壺	12.2	(3.0)	24.55	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫多、粗砂並含	良	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口7/12 底8/12	C-76	内面炭化物付着か、外面煤付着・黒斑有
139	S X 02	ウ-畦(セク-フ)	壺	10.2	—	(8.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂多、赤色粒少含	良	ミガキ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ後ミガキ	口3/12	C-152	
140	S X 02	ウ-東イ-畦(セク-ハ)	小型壺	6.7	1.6	8.2	褐灰	褐灰	礫少、粗砂並含	良	ヨコナデ、ケズリ、ナデ	ヨコナデ、ミガキ	口3/12 底完	C-63	
141	S X 02	イ	短頸壺	6.4	1.6	8.5	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫並、粗砂多含	良	ヨコナデ、指頭圧痕、ナデ	ヨコナデ、ハケ	口6/12 底10/12	C-139	外面赤彩
142	S X 02	ア、イ	壺	14.0	—	(8.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂並含	良	ハケ、ケズリ	ナデ、工具によるハケ	口完	C-47	
143	S X 02	ア	壺	13.2	—	(7.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙～黄灰	粗砂少、細砂並、赤色粒少含	良	ナデ、ハケ、ケズリ	ハケ	口8/12	C-40	ゆがみ有
144	S X 02	イ	壺	13.0	—	(7.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂並含	良	ハケ後ミガキ、ケズリ	ナデ、ハケ、ミガキ	口4/12	C-48	
145	S X 02	ウ	壺	20.0	—	(7.6)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並含	良	ヨコナデ、ケズリ	擬凹線4条、ヨコナデ、ハケ	口1/12	C-153	外面黒斑有
146	S X 02	イ	壺	20.5	—	(8.7)	浅黄橙	浅黄橙	粗砂並、赤色粒少含	良	工具によるヨコナデ、ハケ後ミガキ、ケズリ	擬凹線5条、ミガキ後ヨコナデ、ハケ後ミガキ、ハケ	口2/12	C-51	
147	S X 02	イ	壺	11.8	—	(5.4)	浅黄	浅黄	粗砂並含	良	ミガキ	ミガキ、キサミ1列	口3/12	C-54	内外面赤彩
148	S X 02	イ	壺	11.2	—	(5.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並含	良	ミガキ	ミガキ	口1/12	C-130	
149	S X 02	イ、ウ	壺	14.2	—	(5.0)	にぶい黄橙	浅黄	礫少、粗砂少、赤色粒少含	良	ミガキ、ケズリ	ミガキ	口3/12	C-168	
150	S X 02	ウ	壺	18.2	—	(5.75)	灰黄～にぶい黄橙	灰黄～にぶい黄橙	礫少、粗砂少含	良	工具によるヨコナデ、ミガキ、ケズリ	工具によるヨコナデ、ミガキ	頸1/12	C-185	
151	S X 02	ウ	壺	10.0	—	(6.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並、赤色粒少含	良	ヨコナデ、ミガキ、ケズリ後ミガキ、指頭圧痕	ミガキ、ヨコナデ後ミガキ	口3/12	C-108	外面煤付着
152	S X 02	エ	壺	15.3	—	(4.1)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂並、赤色粒少含	良	ヨコナデ	ヨコナデ、列点紋、ハケ	口2/12	C-179	
153	S X 02	イ	壺	11.0	—	(4.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂多、赤色粒少含	良	ヨコナデ	ヨコナデ	口3/12	C-141	外面赤彩
154	S X 02	ウ	壺	13.2	—	(3.5)	褐灰	にぶい橙	礫多、粗砂多、赤色粒少含	良	ミガキ、ケズリ	ヨコナデ	口1/12	C-183	
155	S X 02	ウ	壺	13.0	—	(4.5)	にぶい黄橙	灰黄	礫少、粗砂並含	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	口3/12	C-184	
156	S X 02	イ	壺	12.0	2.7	13.0	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂並含	良	ミガキ、ケズリ後ミガキ	ミガキ	口1/12 底完	C-136	内外面赤彩、内面黒斑有
157	S X 02	ウ	壺	9.6	4.0	13.4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂多、赤色粒多含	良	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	口4/12	C-146	外面黒斑有
158	S X 02	ウ	壺	—	—	(6.4)	にぶい黄橙	にぶい褐、灰褐	粗砂少含	良	ナデ	ナデ、指頭圧痕、ミガキ		C-231	
159	S X 02	ウ	壺	—	2.9	(4.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂多、赤色粒少含	良	ケズリ	ミガキ、ナデ	底10/12	C-107	
160	S X 02	ウ	壺	—	4.3	(2.7)	にぶい橙	にぶい橙	礫少、粗砂少、細砂並、赤色粒多含	良	磨耗の為調整不明	ミガキ	底完	C-218	内外面赤彩

第7表 出土遺物観察表6

報告番号	遺構	遺構詳細	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 (内)	色調 (外)	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	遺存率	実測番号	備考
161	S X 02	ア	壺	-	2.2	(4.4)	灰黄	灰黄	礫少、粗砂並含	良	ヨコナデ、工具によるナデ、	ハケ、ケズリ	底完	C-44	外面煤付着、底部ゆがみ有
162	S X 02	ア-砂層	壺	17.8	-	(16.6)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂多、赤色粒少含	良	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口4/12	C-41	外面煤付着
163	S X 02	ウ	壺	12.0	-	(3.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂少、赤色粒少含	良	ミガキ、ケズリ	ミガキ	口4/12	C-165	外面黒斑有、外面赤彩
164	S X 02	ア	鉢	17.4	-	(7.8)	淡黄	淡黄～灰	礫少、細砂並、赤色粒少含	良	ミガキ、ケズリ後ナデ	ミガキ	口3/12	C-43	
165	S X 02	ア	鉢	14.0	3.7	6.0	淡黄	淡黄～にぶい黄橙	礫少、粗砂並、細砂少含	良	ケズリ後ハケ、ケズリ後ナデ、指頭圧痕	ヨコナデ、ハケ	口6/12底完	C-39	
166	S X 02	ウ	鉢	10.9	-	(4.5)	にぶい黄橙	浅黄橙	礫少、粗砂少、赤色粒多含	良	ミガキ、ケズリ後ミガキ	ミガキ	口2/12	C-175	
167	S X 02	ウ	鉢	11.1	-	(4.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫多、粗砂多、赤色粒少含	良	ミガキ	ミガキ	口2/12	C-172	
168	S X 02	ウ	鉢	13.8	-	(3.7)	浅黄橙	にぶい黄橙	粗砂並、赤色粒少含	良	ミガキ	ミガキ	口1/12	C-176	内外面赤彩
169	S X 02	ウ	鉢	13.2	-	(3.3)	灰黄褐	灰黄褐	粗砂少含	良	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ	口1/12	C-174	内外面煤付着
170	S X 02	イ-畦(セク-ハ)	鉢	9.7	-	(4.65)	淡黄	淡黄	礫少、粗砂並、細砂少含	良	ミガキ	ミガキか	口2/12	C-171	
171	S X 02	ウ	鉢	30.0	-	(9.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂多含	良	ミガキ、ケズリ	ミガキ、ナデか	口1/12	C-72	内外面赤彩、外面煤付着
172	S X 02	ウ、ウ-東	鉢	15.6	3.15	7.9	にぶい黄橙	浅黄～黄灰	礫少、粗砂多含	良	ミガキ	ミガキ	口1/12底完	C-151	
173	S X 02	イ	鉢	18.4	-	(9.0)	浅黄	浅黄	礫少、粗砂多、赤色粒並含	良	ミガキ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口7/12	C-70	内外面赤彩
174	S X 02	ウ	鉢か	-	-	(3.6)	灰黄	浅黄	粗砂並含	良	ナデ、ハケ	ミガキ	胴2/12	C-169	
175	S X 02	ウ	台付鉢	11.8	7.3	7.1	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫並、粗砂並、赤色粒並含	良	ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、ヨコナデ	口2/12底完	C-77	
176	S X 02	イ	台付鉢	-	4.7	(3.3)	浅黄橙	浅黄橙	礫少、粗砂並、赤色粒多含	良	ミガキ	ミガキ、ナデ	底完	C-60	
177	S X 02	イ	鉢	8.9	3.3	5.8	にぶい黄橙～明黄褐	褐灰～灰黄褐	礫少、粗砂並含	良	ナデ	ナデ	ほぼ完形	C-58	外面黒斑有、底部にゆがみ有
178	S X 02	ア、イ	底部	-	2.7	(3.4)	にぶい黄橙	灰黄	粗砂並含	良	ケズリ	ハケ	底完	C-203	外面煤付着
179	S X 02	ウ	底部	-	2.6	(5.7)	にぶい黄橙	黄灰	礫並、粗砂多含	良	ケズリ	ハケ、ナデ	底部完	C-158	内面炭化物付着、外面煤付着
180	S X 02	イ-Pit	底部	-	2.8	(11.8)	黄灰	にぶい黄橙	礫少、粗砂多含	良	ケズリ	ハケ、ナデ	底完	C-69	
181	S X 02	イ	底部	-	3.0	(4.9)	灰黄	にぶい黄橙	粗砂多、赤色粒少含	良	ケズリ、指頭圧痕	ハケ	底完	C-207	外面煤付着
182	S X 02	イ、ウ	底部	-	5.0	(4.9)	暗灰	暗灰、にぶい黄橙	粗砂多含	良	ハケ後ナデ	ハケ、ナデ	底完	C-154	内面黒斑有か、外面黒斑有
183	S X 02	ウ	底部	-	5.6	(5.8)	黄灰～灰	にぶい黄橙～黄灰	礫多、粗砂並含	良	ケズリ	ナデ、ハケ、工具によるナデ	底7/12	C-181	
184	S X 02	ウ-東	底部	-	7.0	(5.9)	灰白	灰白	礫並、粗砂多含	良	ケズリ	ハケ	底完	C-157	外面黒斑有、底部稍凹形
185	S X 02	ア	底部	-	3.0	(5.6)	暗灰	にぶい黄橙、黒	礫少、粗砂多、赤色粒少含	良	ケズリ	ハケ、ナデ	底6/12	C-229	
186	S X 02	イ	底部	-	1.5	(8.0)	にぶい黄橙	灰黄褐	礫少、粗砂並含	良	ケズリ後ナデ	ハケ	底完	C-59	内面炭化物、外面煤付着
187	S X 02	ア	底部	-	1.5	(2.8)	暗灰	にぶい黄橙	礫少、粗砂並含	良	ケズリ後ナデ	ハケ	底完	C-202	
188	S X 02	ア	底部	-	3.2	(2.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂並含	良	ナデ	ミガキ、ナデ	底9/12	C-159	
189	S X 01	ウ-畦(セク-フ)	底部	-	5.3	(4.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫並、粗砂多含	良	ケズリ	ミガキ、ケズリ後ナデ、工具によるナデ	底完	C-156	外面黒斑有
190	S X 02	ア	底部	-	13.5	(4.0)	淡黄	淡黄	礫少、粗砂多、赤色粒並含	良	ケズリ、ナデ、ヨコナデ	ミガキ、ハケ後ヨコナデ、ヨコナデ	底完	C-42	
191	S X 02	ウ	底部	-	7.6	(3.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂並含	並	ケズリ後ミガキ、ハケ状工具によるナデ、ハケ、ヨコナデ	ミガキ、ヨコナデ後ミガキ、擬凹線3条	底完	C-180	内外面煤付着
192	S X 02	ウ	底部	-	9.5	(4.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂並、赤色粒少含	良	ミガキ、ナデ	ミガキ、ヨコナデ	底10/12	C-149	
193	S X 02	イ	底部	-	10.3	(4.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並、黒雲母少含	良	ミガキ、ナデ	ミガキ	底6/12	C-65	
194	S X 02	ウ	底部	-	9.0	(4.6)	灰黄	灰黄	粗砂並、赤色粒少、雲母少含	良	ハケ、ナデ、ヨコナデ	ミガキ、ミガキ後ヨコナデ	底4/12	C-200	
195	S X 02	イ	底部	-	6.0	(4.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並含	良	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	底完	C-62	
196	S X 02	イ	底部	-	6.6	(2.5)	浅黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂多、赤色粒少含	良	ミガキ	ミガキ、ナデ	底完	C-61	

第8表 出土遺物観察表7

報告番号	遺構	遺構詳細	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 (内)	色調 (外)	胎土	焼成	調整 (内)	調整 (外)	遺存率	実測番号	備考
197	S X 02	ア-砂層	底部	4.2	—	(3.3)	浅黄橙	浅黄橙	粗砂多含	良	ケズリ後ミガキ	ミガキ	摘み11/12	C-178	外面黒斑有
198	S X 02	ウ	高坏	10.8	裾部13.3	12.0	にぶい橙	にぶい橙	礫少、粗砂並、赤色粒少含	良	ハケ後ミガキ、シボリ目後ナデ、ケズリ、ハケ	ケズリ後ハケ後ミガキ、ヨコナデ、ケズリ後ミガキ	口10/12 裾4/12	C-75	
199	S X 02	イ	高坏	—	裾部12.2	(13.9)	にぶい黄橙	橙	礫少、粗砂並含	良	ミガキ、ナデ、ハケ	ミガキ、ケズリ後ミガキ、ハケ後ミガキ	裾3/12	C-56	外面赤彩、透かし孔2個1組2カ所有
200	S X 02	イ-畦(セク-ハ)	高坏	22.7	裾部13.4	16.1	にぶい黄橙	赤橙	礫少、粗砂並含	良	ハケ後ミガキ、ナデ、シボリ目後ナデ、ハケ	ケズリ後ハケ後ミガキ	口11/12 裾1/12	C-67	内外面赤彩
201	S X 02	イ	高坏	26.9	裾部13.6	19.2	灰黄	にぶい黄	礫少、粗砂並、赤色粒少含	良	ミガキ、シボリ目、ケズリ、ハケ	ミガキ	口5/12 底6/12	C-68	内面黒斑有、透かし孔3カ所有
202	S X 02	ウ	高坏	23.8	—	(4.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂多含	良	ハケ後ヨコナデ、ヨコナデ後ミガキ、ケズリ後ハケ後ミガキ	ケズリ後ヨコナデ、ケズリ、ケズリ後ミガキ	口1/12	C-191	
203	S X 02	ウ	高坏	24.6	—	(6.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並含	良	ミガキ	ケズリ後ミガキ	口1/12	C-190	内面煤付着
204	S X 02	ア	高坏	17.2	—	(6.9)	灰黄、黄灰	灰黄、黄灰	粗砂少含	良	ハケ後ヨコナデ後ミガキか、ミガキ	ミガキ後ヨコナデか、ケズリ後ハケ後ミガキか	口2/12	C-194	
205	S X 02	イ	高坏	27.4	—	(6.8)	にぶい黄橙	灰黄褐	粗砂少、赤色粒少含	良	ミガキ	ミガキ	口1/12	C-126	外面黒斑有
206	S X 02	ア	高坏	17.7	—	(7.25)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂少含	良	ケズリ後ミガキ	ミガキ	口6/12	C-129	
207	S X 02	ア	高坏	12.1	—	(6.4)	にぶい黄橙	浅黄橙	礫少、粗砂並、赤色粒少含	良	ケズリ後ミガキ	ケズリ後ミガキ	口9/12	C-64	
208	S X 02	イ	高坏	—	裾部14.1	(9.75)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並含	良	ミガキ、シボリ目、ナデ、ハケ後ナデ	ケズリ後ミガキ、凹線12条、ヨコナデ	脚完 裾1/12	C-118	透かし孔4カ所有
209	S X 02	ウ	高坏	—	裾部13.0	(9.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂並含	良	ミガキ、シボリ目、ケズリ、ハケ	ケズリ後ミガキ	裾1/12	C-224	
210	S X 02	ウ	高坏	—	裾部13.6	(9.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並含	良	シボリ目後ケズリ、ヨコナデ後ハケ、ヨコナデ	ケズリ後ミガキ後ハケ、ミガキ	裾11/12	C-124	透かし孔4カ所有
211	S X 02	イ、ウ	高坏	—	裾部14.2	(8.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並含	良	シボリ目、ハケ、工具によるヨコナデ	ミガキ、ヨコナデ	裾11/12	C-87	内面黒斑有
212	S X 02	ウ	高坏	—	裾部16.0	(11.7)	浅黄橙	浅黄橙	粗砂並、赤色粒少含	良	ナデか、ケズリ、ヨコナデ後ミガキ	ミガキ、ヨコナデ	裾3/12	C-222	透かし孔4カ所有
213	S X 02	イ	高坏	—	—	(9.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並、赤色粒並含	良	ミガキ、シボリ目、ナデ、工具によるヨコナデ	ミガキ	脚完	C-225	透かし孔3カ所有か
214	S X 02	ウ	高坏	—	裾部12.6	(9.05)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並含	良	シボリ目、ナデ、ハケ後ヨコナデ後一部ミガキ	ケズリ後ハケか後ミガキ後一部ケズリ	裾2/12	C-125	内外面煤付着
215	S X 02	ウ-東	高坏	—	—	(4.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂並含	良	ミガキ、シボリ目、ナデ、ハケ	ケズリ後ミガキ	脚完	C-226	
216	S X 02	ウ-畦(セク-フ)	高坏	—	裾部10.6	(6.95)	灰黄	にぶい黄橙	粗砂並含	良	ミガキ、ナデ、ハケ後ヨコナデ、ヨコナデ	ハケ後ミガキ	裾3/12	C-123	
217	S X 02	ウ	高坏	—	裾部14.2	(13.0)	にぶい橙	浅黄橙	粗砂少含	良	ミガキ、シボリ目、ケズリ、ナデ、ハケ	ミガキ、ヨコナデ	裾3/12	C-80	内面煤付着、透かし孔3カ所有
218	S X 02	ウ	高坏	—	裾部14.8	(11.4)	浅黄橙	浅黄橙	粗砂並、赤色粒少含	良	ミガキ、シボリ目、ケズリ後ナデ、ケズリ後ヨコナデ	ハケ後ミガキ、ミガキ、ヨコナデ	裾9/12	C-81	内外面煤付着、透かし孔4カ所有
219	S X 02	ア	高坏	—	裾部15.4	(11.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙～灰褐	粗砂少含	良	シボリ目、ハケ、ヨコナデ	ミガキ、ヨコナデ	裾1/12	C-91	透かし孔2段有、下段2個1対4カ所
220	S X 02	イ	器台	22.6	—	(13.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂並含	良	ミガキ、ヨコナデ、シボリ目	ミガキ、ケズリ	口3/12	C-85	透かし孔4カ所有
221	S X 02	ア-砂層	器台	—	—	(7.4)	灰白	灰白	粗砂並含	良	ミガキ、ケズリ後ミガキ	ケズリ後ミガキ、ミガキ		C-197	
222	S X 02	ウ	器台か	16.7	—	(2.5)	橙	橙	粗砂並、赤色粒少含	良	ヨコナデ後ミガキ、ミガキ	ヨコナデ後ミガキ、ケズリ後ミガキ	口1/12	C-162	
223	S X 02	ウ	器台	—	裾部13.6	(9.4)	浅黄橙	浅黄橙	粗砂多含	良	ケズリ、シボリ目後ナデ、ナデ、ヨコナデ	ケズリ後ミガキ	裾1/12	C-223	外面煤付着、透かし孔2個1対3カ所有
224	S X 02	ウ	器台	—	裾部15.9	(12.6)	にぶい黄橙	橙	礫少、粗砂並含	良	シボリ目後ナデ、ヨコナデ	ミガキ、凹線6条、キザミ1列	裾完	C-79	内外面煤付着、外面赤彩、透かし孔4カ所有
225	S X 02	ア	器台	—	裾部15.8	(10.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並含	良	ケズリ後ミガキ、シボリ目、ハケ状工具によるヨコナデ	ミガキ	裾1/12	C-127	
226	S X 02	ア	器台	—	裾部15.2	(9.7)	にぶい橙	にぶい橙	粗砂少含	良	ケズリ、シボリ目、ヨコナデ、ケズリ後ミガキ	ミガキ	裾1/12	C-86	透かし孔4カ所有
227	S X 02	ウ	器台	—	—	(10.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並、赤色粒少含	良	ミガキ、ケズリ、ヨコナデ	ケズリ後ミガキ、ハケ後ミガキ	脚完	C-196	透かし孔4カ所有
228	S X 02	ウ	器台	—	裾部14.0	12.5	灰黄褐	灰黄褐	粗砂並含	良	ミガキ、ケズリ後ナデ、ケズリ、ハケ	ケズリ後ハケ後ミガキ	裾6/12	C-83	内外面黒斑有

第9表 出土遺物観察表8

報告番号	遺構	遺構詳細	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 (内)	色調 (外)	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	遺存率	実測番号	備考
229	S X 02	ウ	器台	-	裾部 15.2	(10.2)	浅黄橙	にぶい橙	礫多、粗砂多、赤色粒少含	良	ミガキ、ケズリ、粗いケズリ後ハケ後ミガキ	ケズリ後ミガキ、ハケ後ミガキ	裾 6/12	C-82	
230	S X 02	ア	器台	-	-	(7.7)	にぶい橙	にぶい橙～褐灰	粗砂並含	良	ミガキ、シボリ目、ケズリ、ヨコナデ	ミガキ	脚完	C-228	外面煤付着、透かし孔4カ所有
231	S X 02	ウ	器台か	-	-	(6.4)	浅黄橙	浅黄橙	粗砂並含	良	ケズリ、ミガキか	ミガキ	脚完	C-193	
232	S X 02	イ	器台	-	裾部 26.2	(4.4)	にぶい黄橙	橙	礫少、粗砂並、赤色粒少含	良	ミガキ	擬凹線31条	裾 1/12	C-186	内外面煤付着
233	S X 02	ウ、ウ-畦 (セク-フ)	脚部	-	裾部 13.0	(4.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂多含	良	ナデ、ヨコナデ、凹線2条～3条	ヨコナデ、ミガキ	裾 3/12	C-120	透かし孔有(数不明)
234	S X 02	ウ	小型器台	-	-	(3.25)	赤橙	赤橙	粗砂少含	良	ナデ、シボリ目	ハケ後ミガキ		C-147	内外面赤彩
235	S X 02	ウ	蓋	摘み 2.0	6.5	2.95	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並、赤色粒並含	良	ナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	摘み 6/12 底 3/12	C-132	
236	S X 02	ウ	蓋	摘み 2.7	8.2	3.5	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並、赤色粒少含	良	ハケか	ミガキ	摘み完 底 3/12	C-134	
237	S X 02	ウ	蓋	摘み 3.2	-	(4.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並含	良	シボリ目後ナデ、ハケ	ミガキ	摘み 5/12	C-212	
238	S X 02	イ	蓋	摘み 2.7	9.0	4.4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少、粗砂並、赤色粒少含	良	ナデ	ミガキ	摘み完 底 3/12	C-131	
239	S X 02	イ	蓋	摘み 3.85	9.6	5.05	にぶい黄橙	橙	粗砂並、赤色粒少含	良	ナデ、ケズリ、ハケ後ミガキ、ミガキ	ミガキ	摘み完 底 1/12	C-66	外面赤彩
240	S X 02	ウ-東	小蓋甕	摘み 3.0	9.8	3.6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並、赤色粒少含	良	ナデ、ケズリ後ミガキ	ナデ、ミガキ、ケズリ後ミガキ	摘み完 底 7/12	C-133	
241	S X 02	イ	蓋か	-	-	(8.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂少含	良	ミガキ	ケズリ後ミガキ、ミガキ		C-57	外面黒斑有、底部にゆがみ有
242	S X 02	ア	握手	-	-	(4.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂少含	良	ナデ	ミガキ	小片	C-177	

第10表 出土遺物観察表9

報告番号	遺構	遺構詳細	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質	実測番号	備考
243	P12		石錐	7.20	1.09	0.72	6.42	ガラス質 安山岩	石-1	
244	排土		スクレイパー	5.22	7.03	1.61	42.42	安山岩	石-14	
245	S X 02		二次加工のある剥片	3.30	6.69	1.10	18.15	安山岩	石-15	
246	S X 02	ア	打製石斧	14.90	8.50	2.25	273.54	細粒砂岩	石-10	
247	S X 02	ア	打製石斧	(15.00)	(7.70)	2.25	(280.61)	安山岩	石-9	
248	S X 02	ウ- S K 01	打製石斧	(11.50)	7.60	2.30	(223.21)	安山岩	石-8	
249	S X 01	ウ	打製石斧	(11.45)	9.10	3.15	(313.40)	凝灰岩	石-3	
250	S X 02	ウ- S K 01	打製石斧	(9.65)	8.20	3.50	(326.87)	安山岩	石-7	
251	S X 01	イ	打製石斧	(7.85)	(5.65)	1.80	(76.41)	安山岩	石-6	
252	S X 01	ア	敲石	11.25	6.75	4.40	(550.82)	デイサイト	石-5	
253	S X 02	ウ	敲石	(12.20)	(3.90)	(4.80)	(188.36)	安山岩	石-17	煤付着
254	S X 02	イ	敲石	13.60	4.00	3.80	304.46	安山岩	石-13	未成品の可能性も有
255	S X 02	ウ	敲石	8.50	6.60	5.70	440.61	中粒砂岩	石-11	
256	S X 02	イ	台石	(14.50)	(16.50)	13.10	(4032.00)	角閃石 安山岩	石-16	
257	S X 01	イ	台石	(14.50)	10.40	5.65	(1036.88)	火山礫 凝灰岩	石-4	割れた後も使用か
258	S X 02	ウ	砥石	(10.30)	(5.90)	3.20	(209.64)	凝灰岩	石-12	
259	S X 02	ウ- (セク-フ)	砥石	(6.20)	4.70	4.90	(152.55)	チャート	石-19	
260	S X 02	ウ	砥石	6.90	5.20	2.50	10.84	軽石	石-20	トーンの部分がすり面
261	S X 02	ウ	砥石	3.15	3.95	2.30	4.09	軽石	石-18	トーンの部分がすり面
262	S D 04		行火	(10.95)	(8.05)	(4.60)	(235.99)	凝灰岩	石-2	煤付着、額谷石

第4章 総括

調査区の概ね北東側においては中世、南西側においては弥生時代後期後葉から古墳時代前期の遺構を確認した。以下、2時期の様相について若干述べ、総括とする。

第1節 弥生時代後期から古墳時代前期

調査区南西側において、土坑1基、溝2条、河道(SX01・SX02)などを検出した。最大幅5m以上を測る河道がそのうちの約半分の広さを占め、それ以外では遺構の分布密度が低かった。周辺の遺跡でも、大溝が「環濠」的に集落を取り巻くように走ると推定されており(本田・安1995 28頁)、本遺跡の河道も集落域の境界に位置していたと考えられる。このような様相から、調査区南西側は集落域の縁辺部にあたり、集落の中心は調査区南側(河道右岸)に展開していたと推定される。

河道から弥生時代後期後葉から古墳時代前期初頭の土器が多量に出土した。SX02(イ)トレンチの土層断面では河道上層部(第3章第3節第7項で「新河道」と仮称、河道埋没過程で形成された筋状の窪地とも考えられ、常時流水を伴う小河道とまでは断定できない)の多くの層で土器が含まれていることが確認され、断続的に土器が廃棄された状況が窺われる。土坑状の凹み(SX02内SK01)、SX02ウ区の暗褐色粘質土、さらにはSX01イ区でまとまって土器が出土している(図版5参照)。出土遺物には赤彩が施された壺(100・102)、高坏(68・103)、装飾器台(73)が含まれていた。これら土器集中箇所以外でも壺(156)、高坏(200)、器台(224)、鉢(48)、蓋(239)、鉢(164)小型器台(234)などの赤彩精製品や、甕形(26・118・119など)・鉢形(53)などのミニチュア土器がみられる。その他に多くの高坏(59・60など)・器台(69・70など)も出土している。これらのうちには、当然、祭祀に関連する資料も含まれており、河道への土器の断続的な廃棄の背景には単なる破損以外に、河道近くで執り行われたであろう何らかの祭祀的行為に伴う廃棄の可能性が考えられる。一方、赤彩が施されたものも含め、煤が付着した壺(43・100など)、高坏(62、214・217など)、器台(224など)、鉢(169)が確認でき、祭祀的行為に火が関連していた可能性も考慮される。

河道などから出土した土器は、弥生時代終末(月影式期)のものが主体を占め、それに古墳時代前期初頭の白江式期のものが含まれてこよう。白江式期に残存する月影式系統の土器と月影式期のそれとを個体レベルで截然と区分することには難しい面がある。なお弥生時代後期後葉の法仏期のものほとんど目立たない。河道右岸側に存在すると考えられる集落についても、弥生時代後期後葉～終末期に成立し、同終末期に盛期を迎え、古墳時代前期初頭に衰退していったと推定される。本遺跡の存続期間は県内では集落の増加時期にあたり、それと軌を一にしている。本遺跡と同様な存続期間を示す周辺の遺跡として、高堂遺跡(戸澗幹夫他・1990)、佐野A遺跡(川畑1995)、大長野A遺跡(本田・安1995)などがあげられ、さらに現在確認できているよりも多くの数の集落が存在する可能性が考えられる。

第2節 中世

調査区北東側で、柱穴列、柵、竪穴状遺構、溝などの中世の遺構を検出した。出土土器、遺構の主軸方向、覆土などから中世の集落について考える。

S D01は覆土が黒褐色粘質土で、竪穴状遺構とほぼ同じである。またS D01出土遺物は12～13世紀の加賀焼、竪穴状遺構のそれは14世紀まで下らない土師器が出土した。このことから両遺構は12～13世紀頃の遺構とみることができるのではないか。竪穴状遺構は調査区端部に位置するため、主軸方向は明らかではない。

柱穴列 I・S A01・S A02の主軸方向は(N-30～35°-E)の範囲にあり、これらの間に位置するS D04は調査区南端から屈曲する途中までの範囲では主軸方向が(N-35°-E)で、これらの遺構は主軸方向がほぼ同一である。またこれらの遺構の覆土は暗褐色土あるいは暗褐色粘質土を主体としており、さらには柱穴列 IのP07出土の土師器は14世紀後半の遺物で、S D04からは15世紀前半の行火などが出土した。このような点から、柱穴列 I、S A01・S A02、S D04は14世紀後半を上限とする遺構と考えられるのではないか。ところで、50cm以上の大きな柱穴を主体とし、柱間が4 m以上を測る掘立柱建物は14世紀後葉～15世紀中葉と15世紀後葉～16世紀前半の2期に存在していたという報告がある(吉田2000)。この報告の前半段階と柱穴列 IのP07から出土した土師器の時期は齟齬するものではない。

S D02・S D03は覆土が暗褐色粘質土を主体とし、S D02から14～15世紀の青磁、S D03から時期不明の中世土師器が出土した。両溝は調査区東端から約5 m北側における直線部分の主軸方向がそれぞれ(N-17°-E)、(N-20°-E)であり、S D04の屈曲後の主軸方向が(N-23°-E)で近似する。S D02・S D03は14～15世紀頃の遺構で、主軸方向は異なるが柱穴列 I、S A01・S A02、S D04も同時期と考えられるのではないか。

柱穴列 II(正確には「柱穴群」)のP04から胎土が15～16世紀頃とみられる土師器が出土しており、柱穴列 IIは15～16世紀頃の遺構とみることがもできるのではないか。

時期の確認できる遺物が少量で、時期を特定するには無理があるかもしれないが、遺構の主軸方向、切り合い関係などから、本遺跡の中世集落は12～13世紀(中世前半)と14世紀後半から16世紀頃(中世後半)の2時期に営まれたと推測される。後者の遺構が多く確認されたことから、石子町ハサバダ遺跡で今回確認された中世集落は中世後半を主体とすると考えられる。

引用・参考文献

- 越前慎子ほか、2013年 『下黒田遺跡・下佐野遺跡・諏訪遺跡・蔵野町東遺跡・蔵野町遺跡・駒方南遺跡発掘調査報告書』
公益財団法人富山県文化振興団 ※蔵野町東遺跡と本遺跡の性格には類似点がみられる
- 垣内光次郎 1990 「中世北陸の暖房文化」『石川考古学研究会々誌』第33号 石川考古学研究会
- 川畑 誠 1995 『佐野A遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 戸潤幹夫ほか、1990 『小松市高堂遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 端 猛・安 英樹ほか、1997年『金沢市下安原海岸遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 本田秀生・安 英樹 1995『寺井町千代デジロA遺跡・大長野A遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 吉田 淳 2000 『長池キタノハシ遺跡』野々市町教育委員会
『石川県中世城館跡調査報告書Ⅲ(加賀Ⅱ)』石川県教育委員会 2006
- 『牛島ウハシ遺跡』寺井町教育委員会 1999
- 『加賀 能美古墳群』寺井町・寺井町教育委員会 1997
- 『小長野C遺跡』寺井町教育委員会 2004
- 『寺井町史』第三巻 寺井町史編纂委員会 1994
- 『よみがえる古代 国史跡指定 和田山・末寺山古墳群』寺井町 1981



調査区北東側(俯瞰)



調査区中央(俯瞰)



調査区南西側(俯瞰)



竪穴状遺構(南から)



竪穴状遺構土層断面(南から)



S D01(南西から)



S D01遺物出土状況(東から)



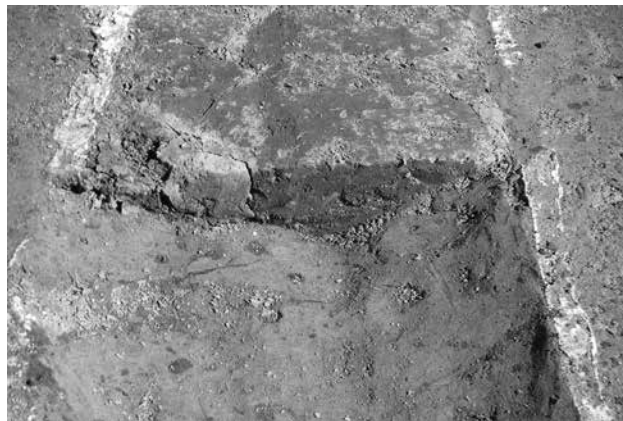
S D02・S D03(南から)



S D04(北から)



S D05(西から)



S D06土層断面(西から)



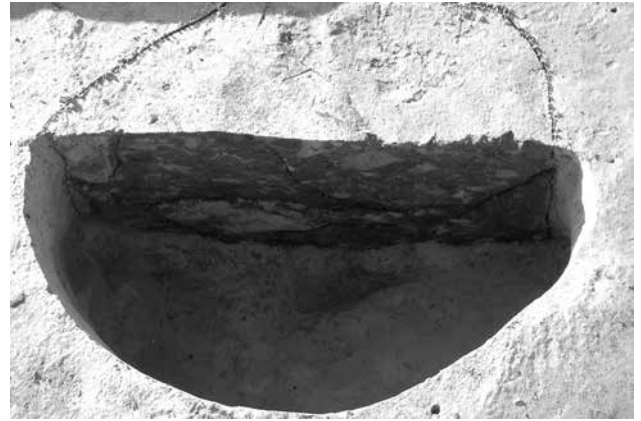
調査区中央(北から)



柱穴列 I (南から)



柱穴列 I (P07)(南東から)



柱穴列 I (P08)土層断面(南東から)



柱穴列 II (南から)



柱穴列 II (P09)土層断面(北東から)



柱穴列 II (P10)土層断面(南東から)



調査区壁面土層C地点(南東から)



S K03(南東から)



S A01・S A02(北から)



S A01(P22)土層断面(東から)



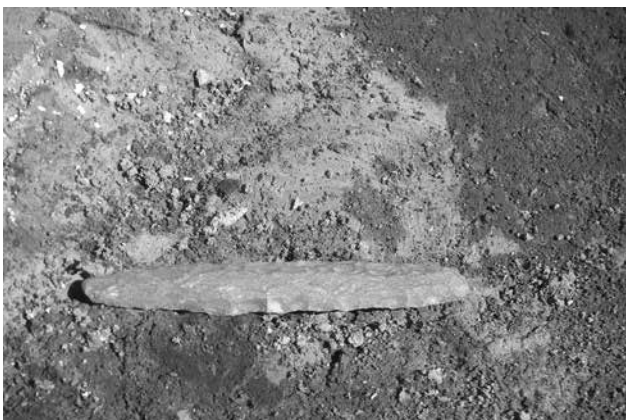
S A01(P23)土層断面(東から)



S A01(P22)(東から)



S A02(P31)(東から)



P12遺物出土状況(南から)



作業風景



調査区南西側遺構検出状況(南西から)



S D07(西から)



S D08(南東から)



S X01(南から)



S X02(南から)



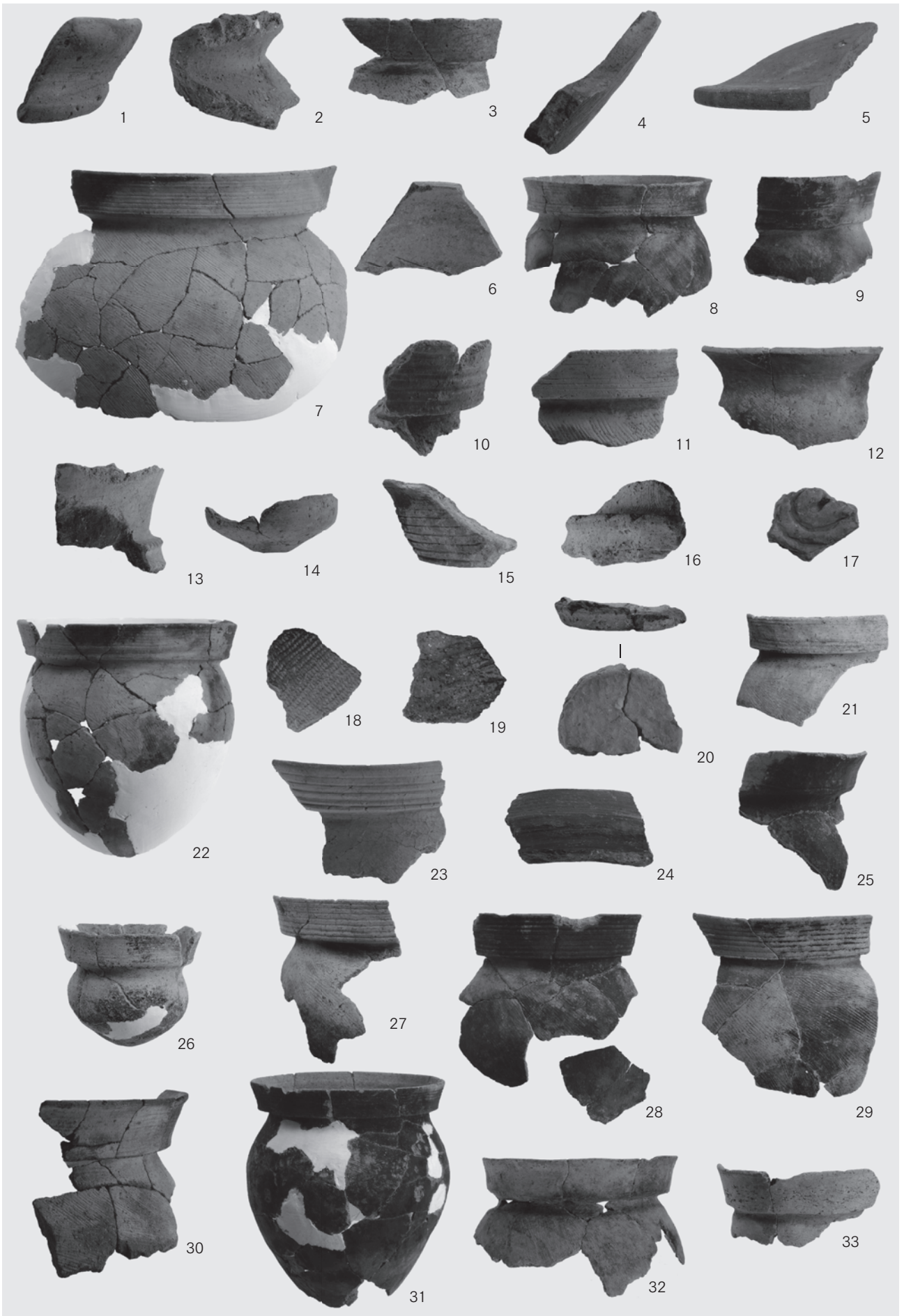
S X01(ウ)トレンチ土層断面(南から)



S X01イ区遺物出土状況(北東から)

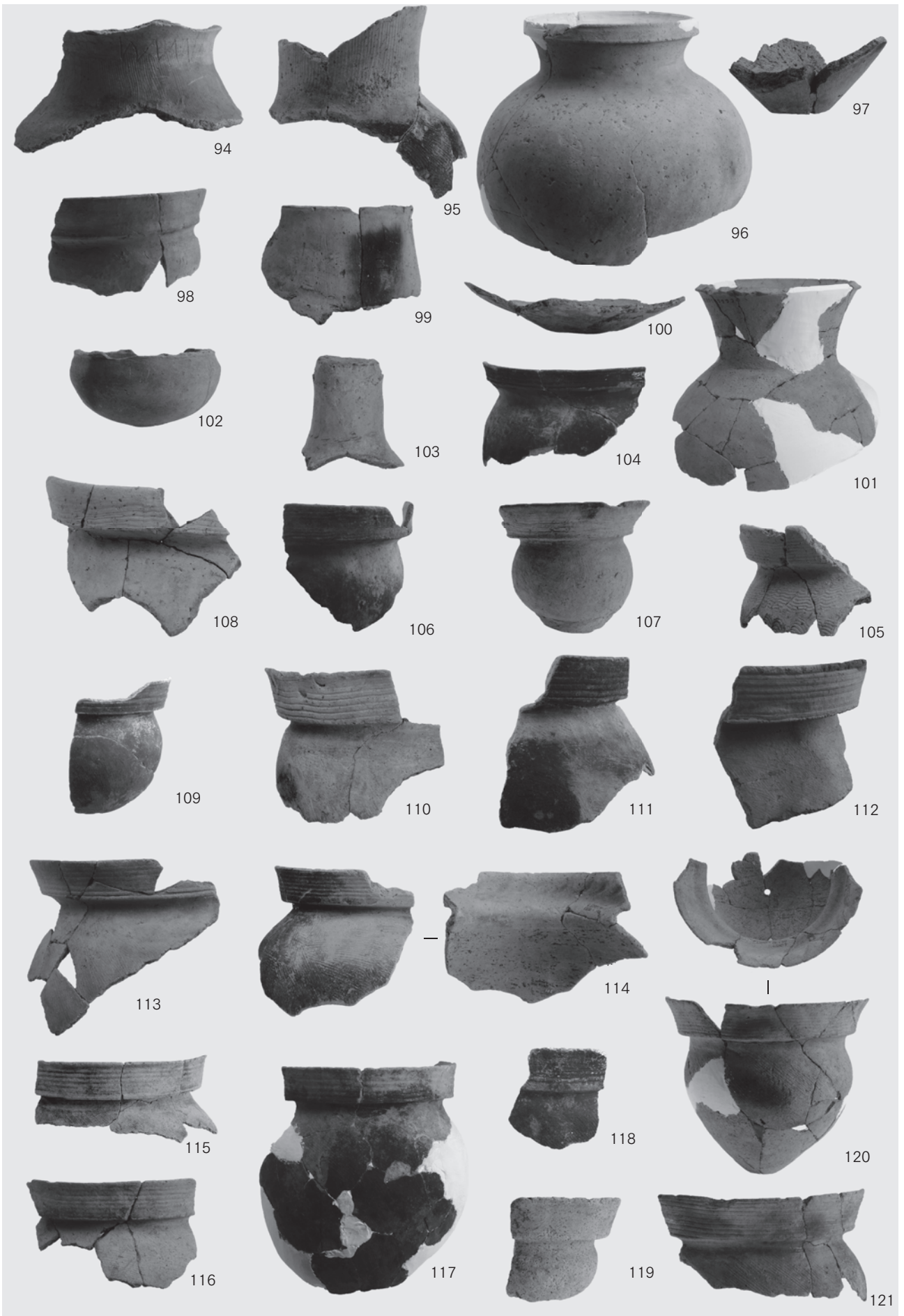


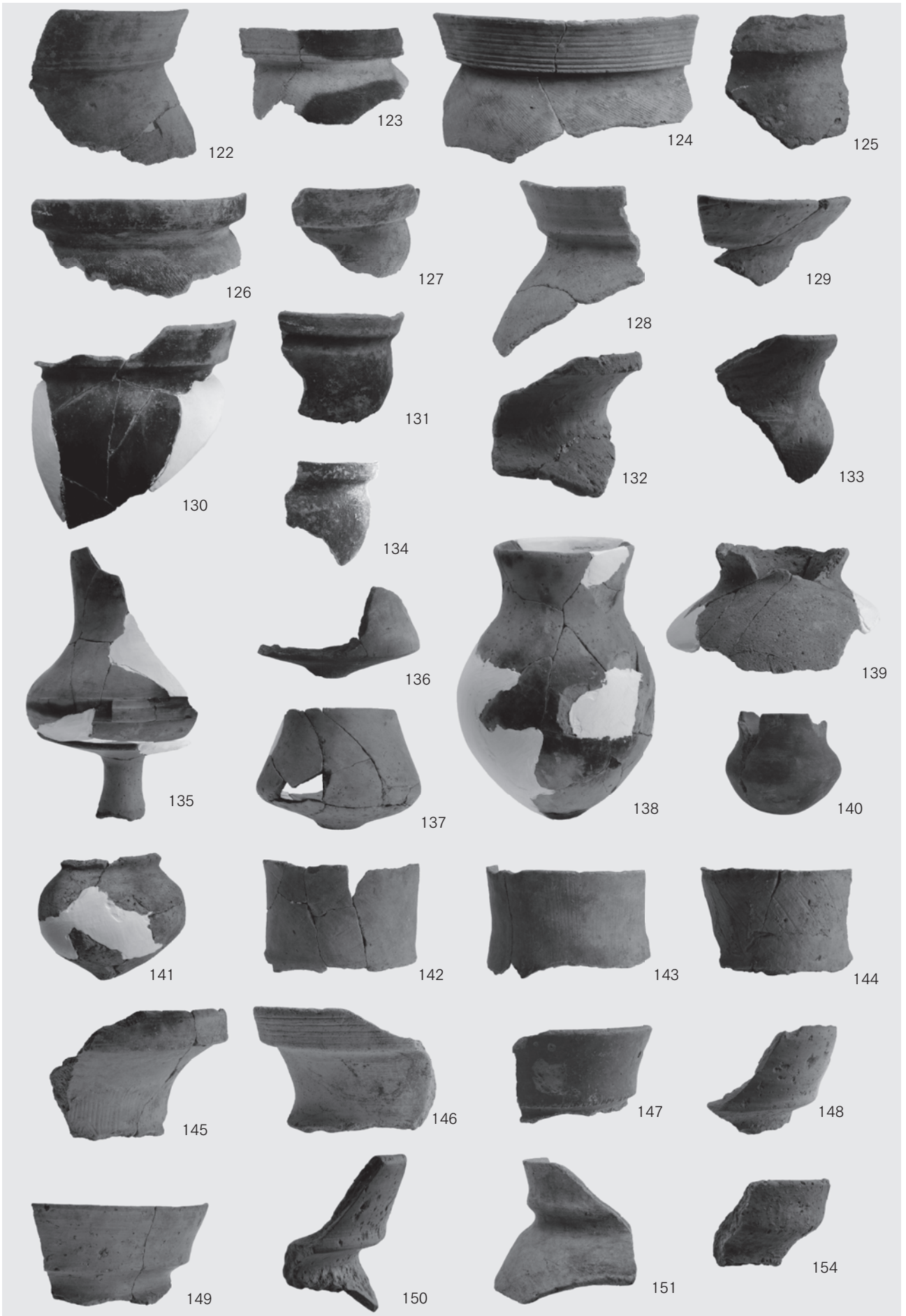
調査区壁面土層E地点(東から)

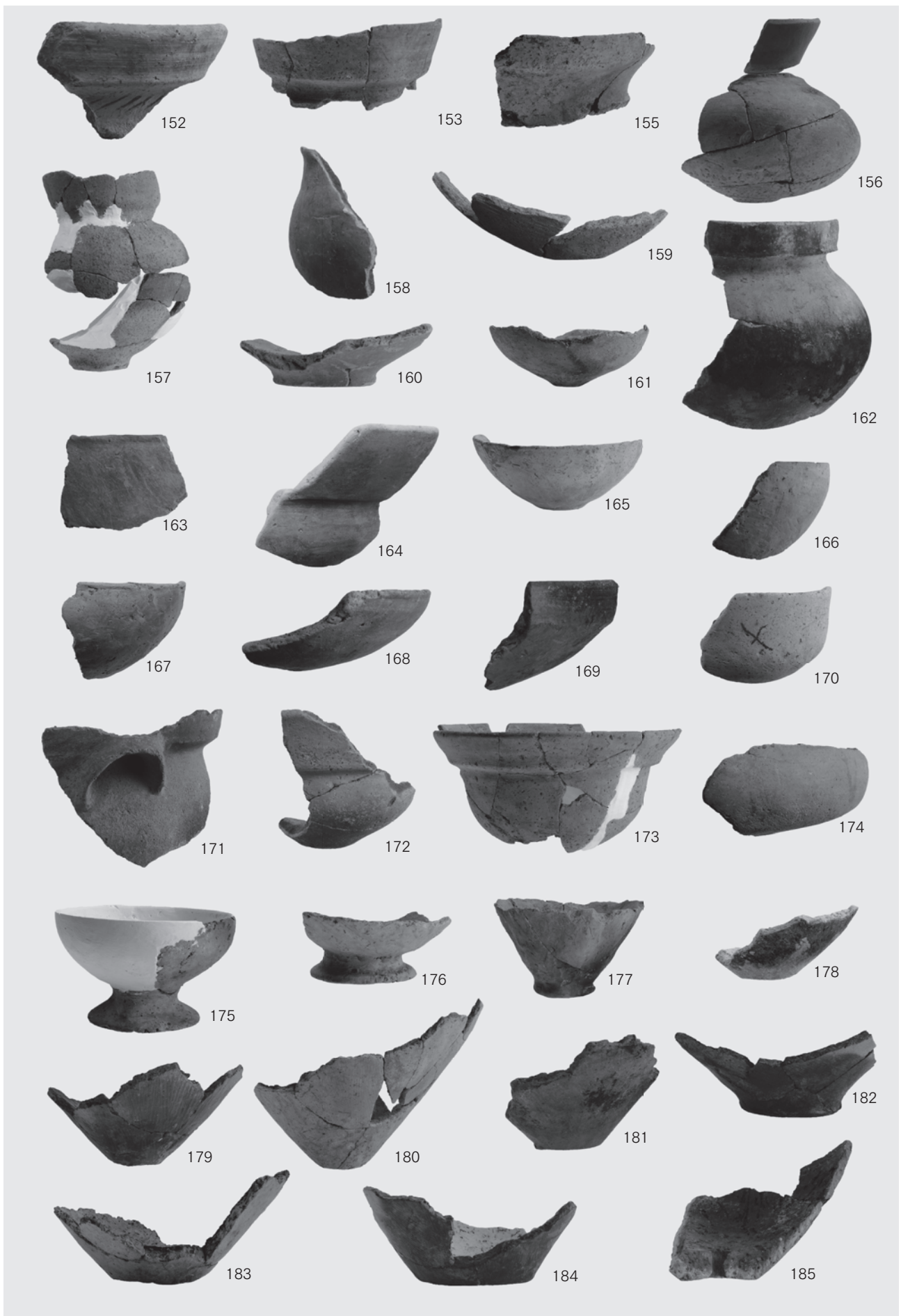




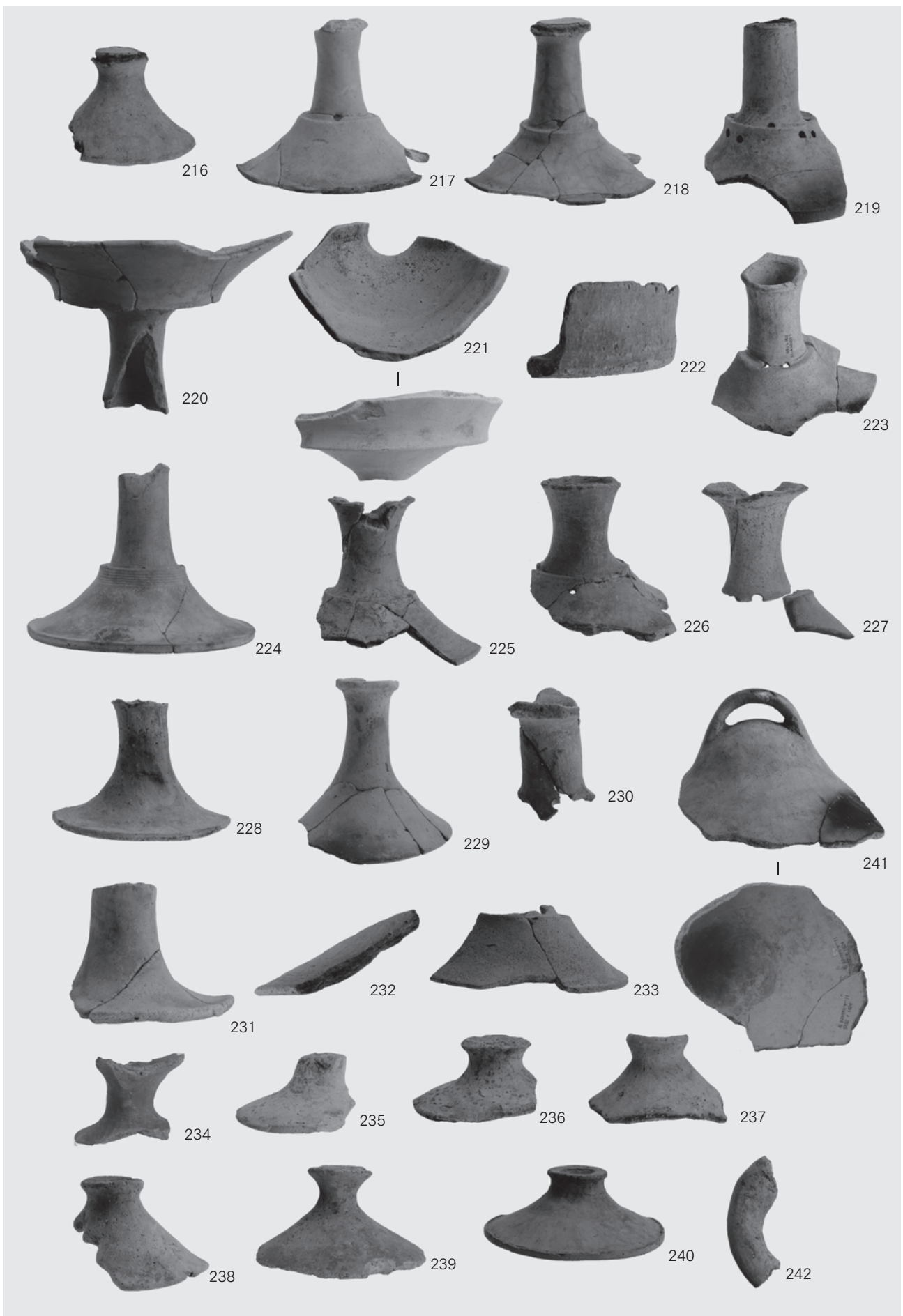


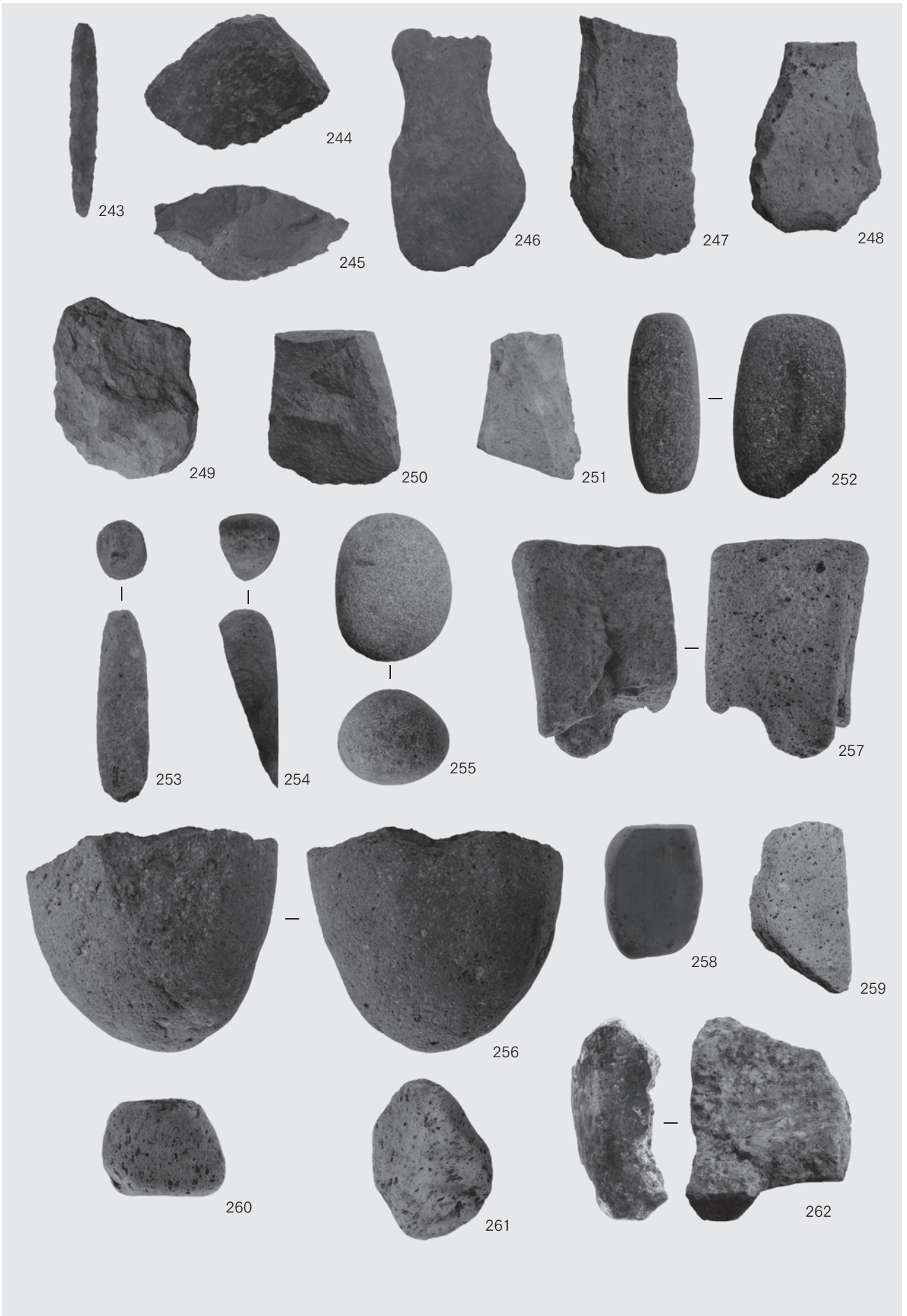












報 告 書 抄 録

ふりがな	のみしいしこまちはさばだいせき							
書名	能美市石子町ハサバダ遺跡							
副書名	道路改良事業(一)和気寺井線に係る埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	北川晴夫、松山和彦							
編集機関	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL076-229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2015年2月27日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いしこまち 石子町ハサバダ遺跡	いしかわけん 石川県 の み し 能美市 いしこまち 石子町	172111	1002500	36度 26分 04秒	136度 30分 39秒	20111003 ～ 20111109	750㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
石子町ハサバダ 遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代	土坑、小穴、溝、河道		弥生土器、古式土師器、 石器			
		中世	柱穴、柵、 竪穴状遺構、 土坑、小穴、溝		中世土師器、加賀焼、 陶磁器、石製品			
要約	<p>調査区南西側では、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構を確認した。この付近は遺構密度が低く、集落の縁辺部と推測される。河道からは多量の土器が出土しており、まとまりをなす地点もみられた。祭祀に関係したと考えられる器種もみられ、河道近くでの祭祀行為も想定される。土器の年代から、河道右岸(調査範囲の南側)に存在が推定される集落は、弥生時代後期後葉から終末期に成立し、同終末期に盛期を迎え、古墳時代前期初頭に衰退していったと考えられる。</p> <p>調査区北東側では、中世の集落を確認した。出土遺物、遺構の主軸方向・切り合い関係から12～13世紀と14世紀後半～16世紀頃との2時期がみられ、主体は中世後半である。</p>							

能美市 石子町ハサバダ遺跡

発行日 平成27(2015)年2月27日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話 076-225-1842(文化財課)

公益財団法人石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 田中昭文堂印刷株式会社